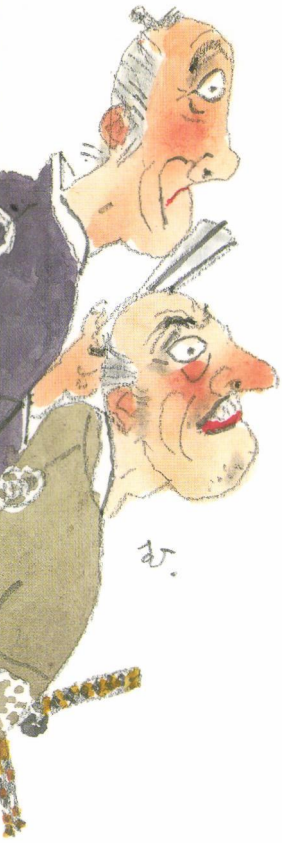
六道慧

天下を善くす

御算用始末日記

文庫書下ろし
長編時代小説



光文社文庫

光文社文庫

文庫書下ろし／長編時代小説

天下を善くす

御算用始末日記

六道 慧



光 文 社

光文社文庫

文庫書下ろし／長編時代小説

天下を善くす
御算用始末日記

六道　慧

光　文　社

この作品は光文社文庫のために書下ろされました。

目次

第一章　維新の風　7
第二章　ぶらかし大名　61
第三章　甦る悪夢　111
第四章　ままよの竜　165
第五章　築地の梁山泊　222
第六章　二心殿　275
第七章　侍の道　328
あとがき&千年老舗　390
愛がいっぱい詰まった「御算用日記」シリーズ　394
女優・浅野温子×著者・六道慧　対談

御算用始末日記

天下を善(よ)くす

第一章　維新の風

一

慶応四年（一八六八）四月。

生田数之進と早乙女一角は、密かに江戸城の大奥に入っていた。十三代将軍家定公の御台所だった天璋院のお召しを受けたからである。二人とも齢八十を超えていたが、御役にたてることがあればと、覚悟を決めていた。

御簾の向こうに人の気配を感じた後、

「天璋院じゃ」

凛とした声がひびいた。取次役を通さずに話しかけていた。

「生田数之進と早乙女一角じゃな。直答を許すゆえ、忌憚なき意見を聞かせてほし

い」

「ははっ」

二人同時に畏まった。まずは数之進から挨拶する。

「生田数之進でござりまする。お召しに従い、参上つかまつりました。公儀の勘定方にご奉公いたしておりました次第」

「早乙女一角でござる。同じく公儀の小姓方にご奉公しておりました次第」

過去形になったのは、すでに江戸幕府は瓦解しているからだ。昨年の十月、十五代将軍慶喜が大政奉還を上奏した時点で、二百六十年間、続いた徳川幕府は、事実上、崩壊していた。

「かつて、二人は幕府御算用者として、諸藩の藩政改革を手助けしたとか。巷ではお助け侍の異名が知れわたっていたとも聞いたが」

ふたたび天璋院が言った。

「まことか」

問いかけに、数之進は恐縮する。

「半世紀以上も前の話でござりまする。なれど、慥かにかような御役目を仰せつかった憶えがござります」

「それは重畳。本日、二人を招んだのはほかでもない。今一度、御算用者として、諸藩や民を助けてほしいと思うたからじゃ」

不意に御簾が揺れた。天璋院だろうか、御簾から出て来たのか。ふわりと香の薫りが流れた。衣擦れの音とともに、人の気配が近づいて来る。

「いかがであろうの」

と、目の前に腰をおろした。貴人と目を合わせるのは、非礼であるため、むろん顔はあげていない。

「ご命令とあらば……」

数之進の答えを、天璋院は素早く遮る。

「命令ではない、願いじゃ」

断ってもよいのだと言っていた。天璋院も江戸城を去る身、もはや、なんの力も持っていない。禄はやれぬ、地位も名誉も与えられぬ。幕府の後ろ盾がない中、諸藩の下級藩士や民に、生きる道を見つけてやってほしいという、無謀とも言える願いだった。

「謹んでお受けいたしまする」

「それがしも承りまする」

二人の答えには、なんの躊躇いもなかった。

「白髪を染めて戦場に赴いた実盛に倣い、見事、死に花を咲かせましょうぞ」

数之進が告げると、

「面をあげるがよい」

天璋院が言った。間近におわす十三代将軍の御台所。これには躊躇いが出たものの、ふたたび促された。

「かまわぬ。面をあげよ」

「は」

数之進は、遠慮がちに目をあげる。そこには意志の強さを秘めた眸を持つ徳川の女子が座していた。年はまだ三十二歳。江戸城無血開城にいたる道を、手助けしたとも言われている。陰の立て役者であるのは、おそらく間違いない。

「なんの役にも立たぬやもしれぬが」

天璋院は懐から、葵の御紋が記された手札を出した。

「心の支えぐらいには、なるであろうかの」

寂しげな笑みを浮かべる。下手な慰めは、さらに傷を深めるだけ。掛ける言葉が見つからなかった。

「頂戴つかまつります」

恭しく、手札を受け取るのが精一杯。隣に座した一角は、さりげなく涙を拭っていた。もはや幕府御算用者を名乗ることはできないが……。

「天璋院様」

あらためて願い出る。

「われらは『日本御算用者』として、民にご奉公いたしたく思いまする。お許しいただけましょうや」

「日本御算用者」

繰り返した天璋院の、表情がほころんだ。

「よき異名じゃ。かように名乗るがよい」

「ははっ」

二人同時に平伏する。

命を落とすかもしれない最後の危険なご奉公。無私の心と千両智恵を携えて、老翁たちは、半世紀ぶりの御役目を実行する。

江戸城明け渡しは、明日に迫っていた。

二

四か月後の八月。

「ここは、まことに江戸であろうか」

数之進は、歩きながら吐息をついた。場所は慣れ親しんだ日本橋の大通り、右側に室町一丁目、左側に長浜町一丁目、正面には日本橋が見えている。かつては深更になっても往来の途絶えない場所だったものを――。

それが今はどうだろう。

左右に立ち並んでいた大店は、跡形もなく消え失せている。火事の後特有のきな臭さはもう感じないが、大火の傷痕は生々しく残っていた。日本橋がなければ江戸だとわからないかもしれない。

「すでに江戸にあらず」

隣を歩いていた一角が継いだ。

「先月、江戸は東京と名を変えておるではないか。もっとも、われらにとっては、死ぬまでこの地は江戸だがの」

「然り」

頷き返して、しみじみ周囲を見まわした。忘れもしないあれは、そう、昨年の師走。十二月二十五日のことだ。薩摩藩が雇った浪人たちの手によって、江戸の町に火が放たれた。その結果が、これなのである。

「薩摩も酷い真似をするものよ」

数之進の呟きに、盟友が応えた。

「なれど庄内藩が三田の薩摩藩邸を砲撃したではないか。あれで、あいこじゃ」

「あいこ、か」

自嘲がにじむ。

昨年の十月十四日。十五代将軍、慶喜は、大政奉還に踏み切った。次いで今年の四月十一日には、江戸城無血開城に至っている。さらに五月十五日、上野の寛永寺に立て籠もった幕府軍の彰義隊が、官軍相手に戦ったものの、不忍池の対岸から放たれた肥前藩のアームストロング砲の威力を前にしてはかなわない。わずか一日で勝負は終わっていた。

「今も北関東や奥州では、血で血を洗う戦いが繰り広げられている由。日本人同士が、なぜ、戦わねばならぬのか」

と、数之進はふたたび歩き出した。八月にしては暑い日々が続いていた。早朝であるため、いくぶん涼しかったが、早くもじっとりと汗ばんでいる。今日も暑くなりそうだった。

「おまえの言うとおりよ。阿呆ばかりになりおったわ」

相槌を打って一角は、日本橋へと歩を進めた。数之進も友を追いかける。二人は橋の中央に立って、見るとはなしに川を眺めた。

かつてはひっきりなしに屋根船や屋形船が行き交い、新肴場の河岸ばかりでなく、他の河岸からも威勢のいい声がひびいていたものなのだが……かろうじて、何艘かの屋根船が認められただけだった。

「江戸はどうなるのか」

一角が独り言のように呟いた。

「昔の賑わいは、戻るであろうか」

「戻らいでか」

数之進は言い、友の肩を軽く叩いた。薩摩の火附け騒動の後、不穏な空気を察して、人々は江戸から逃げ出した。しかし、騒ぎが落ち着けば戻って来るはず。江戸っ子は、この町を忘れられないはず、だ。

「われらにも、まだ、できることがある。今、やれることをやるのみよ」
歩き出した数之進に、一角も続いた。それぞれの懐には、天璋院から授けられた手札がある。つい懐に手をやっていた。
〝なんの役にも立たぬやもしれぬが〟
という天璋院の、申し訳なさそうな言葉が甦る。
「いや」
数之進は声に出して言った。
「役に立たぬものなど、この世にはありませぬ」
立ち止まって、つい頭をさげていた。
「心の呟きを声にするのは、わしと一緒のときだけにせい」
すかさず一角が告げる。
「倅どもには気がふれたと思われるからの」
「うむ」
「それはそうと、潜入する藩は決めたか」
「決めた。倅に調べを頼んでおいたゆえ、そろそろ届く頃やもしれぬ。まあ、かようなご時世ゆえ、たいした話は得られぬだろうが」

友を促して、橋を渡り終えた。日本橋の南詰に広がるのもまた寂寞とした風景だった。ところどころ焼け残った家はあるが、はたして、人が住んでいるのかどうか。戦火がおさまらない限り、なかなか戻らないかもしれなかった。

「目立つのう。ここからでも、よう見えるわ」

数之進は思わず目を細めた。通一丁目に立ったとたん、真新しい家が見えたのである。すぐ近くに白木屋があった場所だが、大店の多くは打ちこわしや押しこみに遭い、やむなく江戸から離れている。朽ち果てた家の残骸が、放り出されている中にあって、建てたばかりのその家は、いやでも目を引いた。

「二代目は存外、肚が据わっておるようじゃ」

一角が先に立って歩き出した。嬉しくなったに違いない。弾むような足どりをしている。追いかける数之進は、かなりきつかった。

「待て、一角。急ぐでない」

「だから鍛えよと言うたではないか。にもかかわらず、だ。おまえは寒いだの、暑いだのと言い訳して、鍛錬に付き合わなんだ。それが年老いたとき、出るのよ」

舌打ちまじりの叱責が、懐かしさと愉しさを運んでくる。自然に数之進の足も速くなっていた。

（あのとき）

初めて、四兵衛店に行った日のことを、思い出さずにいられない。だれもいないとばかり思っていた家にいたのは……。

「生田様、早乙女様」

表店の前にいた年寄りが、数之進に目を留める。年は七十前後、絵双紙屋〈にしき屋〉の二代目を継いだ彦右衛門は、深々と辞儀をした。

「ありがとうございます。早くにご助言をいただきましたお陰で、横浜の見世は大繁盛。流石は千両智恵と思いましてございます」

「数之進は、十年以上前から、横浜で旅籠を営んでおるからの。他にも小間物屋や仕出し屋などを手広く商っておる。世情には通じておるのじゃ。そこに千両智恵が加われば無敵よ」

友の賛辞に苦笑いする。

「商いをしているのは、わしではない、次男の誠之進じゃ。まあ、色々な話が耳に入るゆえ、異人相手に錦絵を売るのは、悪くない商いと思うただけのことよ。儲けた金で同じ地に、昔の四兵衛店と同じ造りの家を構えたのは、彦右衛門さんの才じゃ。わしも一角も嬉しゅうてならぬ。そっくりそのままの家を建ててくれるとは、

考えてもおらなんだゆえ」

と、数之進は路地を見やる。右に三軒、左に三軒、奥に井戸と厠という造りは、昔とまったく同じだった。中は一畳程度の土間、三畳、六畳に押入付に違いない。彦右衛門から同じ家を建てる旨、知らせを受けたとき、数之進は涙があふれるのを止められなかった。が、彦右衛門の方も同じ気持ちだったのだろう。

「御礼を申しあげますのは、てまえの方にございます。土地を安値でお譲りいただきましたので、家を建てる金ができました。長屋の屋号は〈にしき店〉とさせていただきます。生田様はもちろんのこと、早乙女様にもあらためて御礼申しあげます」

ふたたび深々と辞儀をする。もともと四兵衛店は、畳や蚊帳を商う〈北川〉の四男、一角のものだった。彦右衛門から譲っていただけないかという話が出たとき、二つ返事で引き受けたのは言うまでもない。

「焼け野原の江戸に、家を建てようなどという、酔狂な輩がいるとはの。わしはおまえの心意気を買うたのじゃ。なれど、まさか同じ造りの家を建てるとは」

一角も路地を見やって、感無量の表情をしている。江戸の明日を見る思いがしたのは確かだろう。いや、明日であってほしいという、願いだったかもしれない。

「横浜の見世はいかがするのじゃ」
数之進は訊いた。
「倅がおりますので」
「さようであったな。わしとしたことが、八十を超えて以来、とんと物覚えが悪うなった。老耄とうないものじゃ」
「七十九じゃ、数之進」
一角がすかさず告げた。
「われらは永遠に七十九よ」
にやりと笑う。往年の美男ぶりを髣髴とさせる笑顔だった。数之進はすでに歯を全部、失い、柘植の木で作った総入れ歯を使っているが、一角はまだほとんどの歯が残っている。年はひとつしか違わないのに、見た目では相当、差がついていた。
「伊兵衛さんを思い出すの」
しかし、負けずに数之進も、柘植の入れ歯を見せて笑った。一角の父、伊兵衛は、六十九だったとき、倅に七十と言われるのを、なによりいやがっていた。六十九と七十に、どれほどの差があるというのか。
若いときはそう思ったが、今なら伊兵衛の意地がわかる。

「さよう」

一角はよけいな言葉は発しない。ただもう一度、にやりと笑った。数之進の脳裏には、むきになった伊兵衛の顔が浮かんでいる。おそらく友も同じだろうと思った。

「あの、生田様」

彦右衛門が遠慮がちに切り出した。

「また千両智恵を拝借したいのですが」

「なんじゃ」

「錦絵のことでございます。昨年の火附け騒動で、絵師も江戸を離れました。大坂や京に逃げたのでございましょう。新しい錦絵が手に入りません。いえ、むろん古い品でも売れるのですが、これまた手に入らない始末。あればあるだけ売れますので、なんとかならないかと思いまして」

「旗本や大名屋敷にあるやもしれぬ。もっとも、あぶな絵の類が多いやもしれぬが」

「案ずるには及ばず。春画も受けるであろう。のう、彦右衛門」

「はい」

頷いて、ふと眉を寄せる。

「ですが、相手は御旗本。痩せても枯れても、侍にござります。錦絵や春画などを売るでしょうか」

「売る。今の侍は、売れるものなら、なんでも売る。特に旗本の窮状は、目を覆うばかりよ。御徒町、四谷大横町、市ケ谷、神楽坂下あたりを歩いてみるがよい。夜になると、家の門前で家宝を売り始めるぞ。漆器や着物、代々大切にしてきた鎧兜まで勢揃いじゃ」

「まことでございますか」

目をみひらいた彦右衛門に、一角が言った。

「おまえは横浜にいたゆえ、知らなんだと見ゆる。いまや落ちぶれ旗本が、巷にあふれておるわ。数之進が言うたように夜になると、よいか、夜じゃ。体裁が悪いゆえ、昼には売らぬのじゃ。新米商人は阿呆ばかりよ。人の通らぬ夜に商いをしたところで売れるわけがない。かようなことにも気づかぬ愚か者ばかりじゃ」

辛辣だった。が、数之進も反論するつもりはない。

「ゆえに、錦絵や春画が売れるとなれば、こぞって差し出すは必至。なにしろ総桐の重ね箪笥が金一分、散らし紋の入った長持が金二朱程度の値しかつかぬ有様よ。試しに何軒かまわってみるがよい。またたく間に話が広がって、〈にしき屋〉の前

には、貧乏旗本や大名家の下級藩士が列をなすであろうさ」

ひと呼吸、置いて、続ける。

「もっと早うに、それぞれが進退を考えるべきであった。かような騒ぎが起こる前でさえ、食いつめていた貧乏旗本の明日は決して明るくない。取るべき道は三つ」

（一）新政府に帰順して朝臣、つまり政府に出仕する。

（二）徳川家に暇願いを出して、あらたに百姓や商人になる。

（三）無禄覚悟で旧幕府の新天地、静岡に移住する。

「静岡か」

一角が遠い目をした。

「静岡藩主となられたのは、幼い亀之助様。後見役として、慶喜様がおられるものの、四百万石を七十万石に封じられての新所帯じゃ。とうてい足りぬ。家臣団を養いきれぬわ」

「なれど、急に生計をたてろと言われてものう。路頭に迷うばかりよ」

「ゆえに千両智恵の出番と相成ったわけじゃ」

「では」
と、数之進は路地に視線を戻した。
「そろそろ、われらの家に参ろうか」
「おう」
大きな声をあげた盟友とともに、路地を進んで行った。めざすは右側の一番奥の家、路地には真新しい木の薫りが漂っている。

三

数之進が戸を開けようとしたとき、
「待て」
一角が制した。
「中に人の気配が在る」
「む」
もしや、と、思った。あのとき、中にいたのは、両目付の職を賜ったばかりの鳥海左門。とうに鬼籍に入っているのに、一瞬、かなわぬ夢を描いた。

（鳥海様がおいでになれば）

どれほど心強いことか。待っていれば諸藩の調書が届き、窮地に陥ったときには、必ず駆けつけてくれた。命を張って、配下を守ってくれた日々は、いまや遠い思い出となっている。

「開けるぞ」

友の言葉に、数之進は小さく頷いた。年甲斐もなく、胸の高鳴りを覚えている。かなわぬ夢が、かなうかもしれない。

勢いよく戸が開いた。

と同時に、一角は身構えている。襲いかかって来るのではないか、二人の動きを邪魔だと思う輩が、すでに刺客を放ったのではないか――。

「百合」

数之進は驚きに目をみはった。手前の三畳間に微動もせず美しい娘が座している。孫の百合だった。年は十七、藍色の袷が色白の肌を引き立てている。紅すら引いていなかったが、凛とした面立ちは、見惚れるほどに輝いていた。

「おじい様」

百合は畳に手を突き、頭をさげる。

「お待ちいたしておりました。まだまだ暑さが続いております。喉がお渇きになられたのではございませぬか。すぐに茶の支度をいたします」

問いかける暇もない。素早く土間に降りて、急須に湯を注いだ。あらかじめ火を熾して、用意しておいたのは流石と言うしかなかったが、

（困ったものよ）

数之進は目で友に告げ、座敷にあがる。一角もすぐさま隣に座した。老翁たちは顔を見合わせた後、

「そなたがここに来たことを、父上と母上はご存じなのか」

おもむろに切り出した。父上というのは、数之進の嫡男、作之進のことである。今は亡き世津との間に、生田夫婦は二人の男子をもうけていた。作之進は幕府の勘定方にご奉公していたが、早々と暇願いを出して、横浜に転居。次男の誠之進が営んでいた商いの一部を引き継ぎ、生計をたてる道を開いていた。

ちなみに一角も、芸者だった小萩――育代との間に、長女と長男を授かっている。長女は作之進に嫁いだため、生田家と早乙女家は、姻戚関係を結んでいた。早乙女家の長男夫婦も暇願いを出して、横浜に居を移している。数之進親子の手ほどきを受けながら、慣れぬ商いに勤しんでいた。

安政元年（一八五四）三月三日。

日米和親条約がかわされた時点で、横浜、下田、箱館の三港が開港されていた。数之進は千両智恵が閃くまま、まず次男を連れて横浜に乗りこんだのである。旅籠や生糸問屋、小間物屋、仕出し屋などを営ませつつ、茶も扱って、かなりの利益をあげていた。読みがあたって生田家の明日は、今のところ、安泰といえた。

つまり、生田家と早乙女家は、（二）の徳川家に暇願いを出して云々という道を選んだのだった。

（横浜におれば、恙なく過ごせるものを）

孫娘をつい見やっていた。

「手紙を置いて参りました」

百合は多くを語らない。女子の割に無口なのは、だれに似たのだろうか。茶を運んで来た孫娘にあらためて告げた。

「危ない御役目ゆえ、女子は連れて行けぬと申したはず。町の様子を見ればわかるであろう。もしかすると、ふたたび戦になるやもしれぬ。そなたは早う横浜に戻るがよい」

「わたくしも、お手伝いいたします」

孫娘は退かなかった。

「角翁の手ほどきを受け、日々、剣の修行を続けて参りました。三年ほど前からは、柳生新陰流の道場にも通うております。決して足手まといにはなりませぬ。どうか配下として、お使いくださいませ」

畏まって両手を突き、深々と頭をさげる。畳に額をすりつけんばかりだった。

四月に天璋院の嘆願を受けた時点で、二人は、生田家と早乙女家の者たちを招集している。手足となって動く役目は、それぞれの男孫に託していた。今日、ここに来るのは、生田竜平と早乙女勝利のはずだったのだが……。

「命を落とすやもしれぬ」

数之進は、静かに諭した。

「わしと一角は死に花を咲かすべく、天璋院様のご嘆願をお受けいたした。なれど、そなたはまだ若い」

「兄上は十九、勝利様は二十歳にござります」

じりっと前に出た百合を、あくまでも穏やかに見つめた。

「そなたは女子じゃ。子を産み、育て、やがては生田家の女主となるのが運命よ。かようなときゆえ、楽ではないやもしれぬがな。そなたであれば、見事に務めるで

あろうと、わしは思うておる」

「江戸は危ない」

言葉を継いだ一角に、百合は負けじと言い返した。

「すでに戦いは会津へと移っております。北関東でも小競り合いが続いているようですが、これは早晩、収まりましょう。江戸は横浜と変わらぬほどに、安全なのではないかと存じます」

この頃、新政府軍は、会津鶴ヶ城まで攻め入り、城下は火に包まれた。白虎隊が自決してなお会津軍は降伏の白旗を掲げていない。

また旧幕府海軍の副総裁――榎本武揚は、江戸城無血開城以後も、軍艦の引き渡しを拒否。旧幕府陸軍奉行並や、若年寄といった重臣らを乗せ、開陽丸以下、八隻の艦船で江戸を脱出していた。

「確かに戦場は、北に移っているやもしれぬ、が」

数之進は、一角と顔を見合わせることしかできない。女子でありながら、戦況に詳しいのは意外だったが、すぐにそれを授けた者の顔が浮かんだ。

同じことを感じたのだろう、

「勝利か」

一角が苦々しい呟きを洩らした。

「いえ」

即座に首を振った百合を、数之進は手で止める。

「叱責はせぬ」

庇おうとした心を汲み取っていた。

「話を戻すが、われらの御役目は、金子はむろんのこと、扶持も賜れぬ。天璋院様に塁が及ばぬよう、二度とお訪ねするつもりはない。つまり、お褒めの言葉すら、賜れぬ御役目よ。受けられるのは、さよう」

「感謝の気持ち」

小声で百合が続けた。

「いや、それさえも受けられるかどうか。諸藩はいずこも戦々恐々、下手をすれば領地を奪われて、一文無しになるやもしれぬ状況じゃ。おそらく疑心暗鬼に陥っておろう。われらを新政府が遣わした間者と思うやもしれぬ」

「怪しまれたとたん、これじゃ」

一角が首を切る仕草をした。

「さよう」

すかさず数之進は相槌を打つ。

「幕府御算用者として、諸藩に潜入したときも、幾度となく危ない目に遭うた。よう生きているものよと、あらためて思うた次第じゃ」

「なれど、楽しそうでございました」

孫娘は訴えた。目が潤んでいた。

「百合」

「おじい様たちの武器は、無私の心と千両智恵。姉君たち、わたくしから見れば、大伯母様たちでございますが、お二人の借財を返すためもあったのでございましょうが、それは些細な、取るに足らない理由であったように思えてなりませぬ。おじい様たちは私を捨て、諸藩の下級藩士や民のために働きました。わたくしはそれが……とても誇りなのです」

涙目だったが、光るような笑顔を向けた。数之進は孫娘の、この表情に弱い。

「なれど」

なんとかして諦めさせようとしたが、うまい言葉が見つからなかった。あとひと押しと思ったに違いない。

「お二人をお守りしたいのです。今は亡きおばあ様も……」

「たわけ！」

突然、一角が恫喝した。すっくと仁王立ちになる。

「それはそなたの驕りじゃ。人を斬ったことがあるか、ええ、百合よ。傷を負わせたことすらあるまい。人を斬ったこともない者に、われらを守れるはずがないわ。笑止千万、驕りすぎて、よう物が見えなくなっておる」

「……」

百合は悔しげに下唇を噛みしめた。しょせんは道場内の日向剣術、実戦で役に立つかどうかはわからない。と、百合自身も知っている。

「人を斬るときの、相手の命を奪うときの、なんとも言えぬ苦しみを、わしはそなたに味わわせとうないのじゃ」

告げて一角は、どすんと荒々しく座る。そっぽを向いた横顔には、複雑な気持ちが浮かびあがっていた。

「わしも一角と同じ考えじゃ」

数之進は、敢えて口にする。

「さいぜんも言うたが、百合には早う嫁いで、女子の幸せをつかんでほしいと思うておる。そなたを可愛がっていた世津も、同じ考えであるのは間違いない」

「ご免」

不意に戸口で声がひびいた。年をとったためだろうか。数之進はともかくも、武芸十八般を自称していた一角が、声をかけられるまで気づかなかったとは……二人は少なからぬ衝撃を覚えた。

「年には勝てぬな」

「うむ」

一角が土間に降りて、戸を開ける。

四

「これは、お爺様」

目元涼やかな美丈夫が会釈した。一角の長男の倅、早乙女勝利、二十歳。若い頃の一角によく似た美貌の持ち主だが、陽気な祖父とは対照的に、無愛想で、必要最低限の言葉しか発しない若者だった。

「あがれ、勝利」

数之進の呼びかけに、いっそう畏まる。

「は。ご無礼つかまつる」
刀と脇差を外して、土間に入って来た。そこでようやく気づいたのか、
「百合殿」
驚きに目をみはる。
「ご無沙汰いたしております、勝利様。四月にお目にかかって以来でございますね。此度は、わたくしもお手伝いしたいと思いまして、馳せ参じました次第。勝利様にもお口添えいただきたく存じます。頑固な老翁たちに、ひと言、お願いいたします。百合は足手まといになどならぬ、必ずや役に立つと、仰せになってくださいまし」
頬を朱に染めて訴えた。若侍は眩しげに従妹を見つめている。が、にやにやしている一角に気づいたのだろう、すぐさま仏頂面に戻った。
「横浜に戻られよ」
勝利は、先程までの二人と同じ意見を述べた。
「戦場が北に移りつつあるとはいえ、江戸はまだまだ危のうござる。お爺様たちの手伝いは、わたしと竜平で充分、足りるのではないかと」
「まあ、とにかく、あがるがよい」
数之進は手招きする。律儀に土間で受け答えしていた勝利は、会釈して、座敷に

あがって来た。百合は幼なじみの若侍を、凄い目で睨みつけている。
「そなたのためじゃ」
軽く背中を叩いて、勝利を援護した。八つ当たりされたような格好になったが、当人は平然としている、ように見えた。それがよけい癪に障ったのかもしれない。
「なんと申されましょうとも、わたくしは、おじい様と角翁の配下になります。奥御殿の様子を探るために、女子が要るではありませんか。それともだれかが、奥女中に化けるのでございますか」
具体的な案を提示する。これには数之進も唸るしかなかった。
「うぅむ」
言われてみれば、そのとおり。昔は一角が美貌を武器にして、奥女中から奥御殿の話や、さまざまな噂話を入手した。しかし、維新の風が吹き荒れる今、色仕掛けで話を仕入れるのは、なかなかむずかしいかもしれない。
「諸藩の奥方はじめ、奥女中たちは、おそらく国許に戻っているのではないかと思うが」
ぼそっと言った勝利に、百合は猛然と反撃する。
「その国許が危なくて、帰れないのではありませんか。もちろん勝利様のお言葉ど

おり、戻った奥方たちもいるやもしれませぬ。なれど、街道筋の村々では、やくざや盗人が横行し、危険きわまりない有様であると聞きました。奥方たちは江戸を離れずに、奥御殿に籠もっておられるように思います」

「なるほど」

勝利は、大きく頷き返した。これが精一杯の詫びだと、真剣な眼差しに気持ちをこめている。どちらかと言えば鈍い方なのだが、

「ご理解いただけましたか」

百合は安堵したように言った。が、それとこれとは話が別とばかりに、数之進は孫娘を見やる。

「かえすがえすも残念無念よ。そなたが男であればと、わしは何度、口にしたことか」

持ちあげてから、申し渡した。

「これが最後じゃ。横浜に戻るがよい」

「おじい様」

百合は息を呑み、数之進を凝視めた。なにゆえ、女子は駄目なのか。とうてい得心できませぬと、怨みがましい目を向けている。その美しい眸に、みるみるうちに

涙があふれた。

「ええい、泣くでない。そなたの身を思えばこそじゃ。わしも一角も勝利も、そなたには女子の幸せを……」

「女子も要るのではないかと」

勝利が口を挟んだ。

「百合殿の話を聞き、得心した次第。わたしと竜平は、奥女中には化けられませぬ。ここは今一度、話し合うべきではないかと存じまする」

「裏切り者めが」

一角の忌々しげな言葉を、百合が遮る。

「命を捨てる覚悟はできております。たったひとりでもいい、感謝してくれる藩士や民がいれば、それで充分でございます。日本御算用者の傍らに、我が身を置くことをお許しくださりませ」

と、三度、深々と頭をさげた。

（日本御算用者）

数之進は、天璋院が繰り返した役名を、心の中で呟いた。名誉も与えられぬ、褒賞も授けられぬ。だれひとりとしてその働きに、気づかぬやもしれぬ。悪くすれば

殺められるやもしれぬ――。
「ちと考えさせてくれぬか」
数之進の答えに、勝利の呟きが重なる。
「あの音は……なんでござりましょうな」
「む？」
二人の老翁は、じっと耳を澄ました。遠くの方からお囃子のような音が聞こえてくる。それはだんだん大きくなっていた。

日本国のよなおりは、ええじゃないか。
ほうねんおどりはお目出度い。
おかげまいりすりゃ、ええじゃないか。
はあ、ええじゃないか、ええじゃないか。

「まさか」
数之進は立ちあがって、土間に降りた。一角、勝利、百合とあとに続く。いまだ瓦礫が積み重ねられた町に、大きな「ええじゃないか」という声と、笛や太鼓のお

囃子がひびいていた。

「彦右衛門さん」

見世の前にいた彦右衛門に呼びかける。

「あれは、まさか」

「はい。世直しの舞いにござります。一昨日にも現れました。狙いは幾ばくかの銭のようでして」

と、彦右衛門は見世の中に戻って行った。

ええじゃないかは、女装した男や男装した女といった異装の民が、「ええじゃないか」や「ちょいとせ」などの囃し言葉を発しながら、集団で乱舞するという現象だ。確認されている最初の乱舞騒動は、慶応三年（一八六七）八月、三河国御油宿で起きており、その後、東海や京阪を中心とした地域で頻発している。

「江戸でも、かような騒ぎが起きるとは」

数之進たちは、木戸の前で乱舞騒動を見つめていた。「ええじゃないか」の囃し声は、地鳴りのような足踏みとともに近づいて来る。土煙が舞いあがり、野良犬が激しく吠えていた。肌にまとわりつくような熱と湿気が、騒動を後押しするかのよう。集団の先頭では、女装した男が音頭を取っている。

「些少ではございますが」

見世から出て来た彦右衛門が、先頭の男に紙包みを手渡した。御礼金のようなものだろう、鷹揚に頷いて受け取るや、男は見世の前で「ええじゃないか」と舞い踊り始める。総勢三十人ほどだろうか。土煙をあげながら踊る姿は、一種異様な雰囲気を醸し出していた。

立ち去るまでの間が、なんと長く感じられたことか。

「いやはや、江戸にまで世直しの大乱舞が現れるとはの」

吐息まじりの言葉に、彦右衛門が応えた。

「幾ばくかの銭を渡さぬことには、立ち去ってくれぬと聞きました。新手のたかりでございましょう。まあ、押しこみされるよりは、ましかもしれないと思いまして」

諦めたような顔をしていた。実際、世直し盗人と称して、押しこみをする悪党が後を絶たない。儲けすぎた大商人から小判を盗るのはすなわち、善行だというのが連中の言い分だった。

「一揆の代わりに、大乱舞をしているのでござりましょうか」

百合が訊いた。

「さあて、どうであろうかの。ここだけの話じゃが、倒幕派の企みという説もある」

「薩摩や長州が、でございますか」

と、百合。

「さよう。現に薩摩や長州といった地では、世直しの乱舞騒動は起きておらぬ。また騒動が始まったのは、薩摩藩の大久保利通や、公家の岩倉具視らが、倒幕を画策し始めた時期と一致するではないか」

「そういえば」

孫娘は呟き、尊敬の目を向けた。

「流石は、おじい様。騒ぎの裏に隠された真実あり。真実を知るには、かような『目』を持たねばならぬのですね」

「うむ」

真っ直ぐな眼差しが、面映ゆくて、数之進は目を逸らした。遠離って行く土煙の集団に、もう一度、目を投げる。

「竜平がいるのではないかと思い、気が気ではなかったわ。かような騒ぎあるところ、必ずや馬鹿者あり、じゃからの。乱舞集団の中から、ひょこっと姿を現すので

はないかと思うたが」
　通りを確かめた後、勝利に訊いた。
「なぜ、竜平は来ないのじゃ。どこにおるか、存じよるか」
「は」
　畏まって、勝利は答える。
「従弟は、おそらく深川富岡八幡宮門前の遊女屋にいるのではないかと存じます。花代をためすぎたとか、遊女を連れて逃げようとしたとか、仔細はわかりませぬが、始末されそうになっているようでござる。昨夜、横浜の家に使いが参りました」
「な、なんじゃと!?」
　数之進は目を剝いた。
「なにゆえ、早う言わぬ」
「叔父御、竜平のお父君が、ああいう阿呆は一度、死んだ方がよい。放っておけと仰せになりまして」
「ふざけたことを。一度、死んだら終わりではないか」
　慌てて支度をする。
　頼みの綱と思っているのは、数之進の買いかぶりか。大器晩成と見守ってきたの

は、ただの勘違いか。見たくない現実を見なければならない。
（長生きしすぎるのも考えものか）
と思った。

五

永代橋を渡った区域、深川佐賀町界隈に広がっていたのは、日本橋や神田と同じような風景だった。
旗本や大名屋敷は早くも取り壊されてしまい、空き地だけが目立っている。明け渡された土地は、当然のことながら、新政府の持ち物となっていた。火事の被害を免れた町屋が、ぽつん、ぽつんと建っている。
空き地には雑草が生い茂り、痩せた野良犬がうろついていた。餌を探しているのか、草に鼻面を突っこんでいる。かつての住人は、三つの選択肢のうち、どれを選んだのだろうか。いずれにしても、前途多難であるのは間違いない。
「お。甘酒屋がおるぞ」
年の割に目のいい一角が、道端に群れている一群を顎で指した。振り売りの甘酒

屋が、いっとき社交場になっているようだった。五、六人の男が集まっている。

「買い求めて参ります」

いち早く百合が動いた。老翁たちの後ろに、百合、勝利の順で従っていたが、出遅れた勝利もまた急ぎ甘酒屋に走る。男たちの一群に近づくにつれて、大声のやりとりが聞こえてきた。

「結局のところ、薩摩と長州が公方様をぶっ倒して、天下を取ったにすぎねえのさ」

「そうともよ。次はどっちが天下を取るかわからねえがな。薩長はじきに喧嘩別れするに違えねえ」

「また戦か」

「だろうぜ。薩長がやり合っているときは、大名家の殿様たちは黙ってご観戦だ。どっちに付こうか頭を痛めるだけで手がつけられねえだろうよ」

「で、遅かれ早かれ大乱かい」

「そうそう」

民の気持ちを代弁するような会話だった。横浜から江戸に来る間も、数之進たちは似たような話を幾度となく耳にしていた。

薩長が対立、そして、天下はふたたび騒乱の渦となる。

「幕府の威厳は、維新の風とともに消え失せたか」

数之進は道端の石に腰かけた。一角は老剣客の誇りが許さないのか、隣に座ろうとはしない。

「無理もないことじゃ。武州、上州、野州と、戦の地となった場所の幕府代官、あるいは関東取締出役といったお歴々は、在地を捨てて遁走よ。幕府の権威は失墜。民は自衛するしかなく、銃を扱える者たちが次々に現れた。良かったのか悪かったのか、わからぬがのう」

深い吐息をついた。苦笑した数之進を見て、盟友は訊いた。

「なんじゃ、今の笑いは」

「いや、かつてのわしのような吐息をついたと思うてな。可笑しゅうなった次第よ」

「深い吐息は、お助け侍の十八番か」

「うむ」

と、つい手本のような吐息をついていた。どちらからともなく顔を見合わせる。互いに苦笑いを浮かべていた。

「おじい様」

甘酒を手にした百合が戻って来る。両手の甘酒を二人の翁に渡して、自分の甘酒は勝利から受け取った。そろそろ午近くになっている。前夜、降った雨のせいだろうか、道にはゆらゆらと陽炎が立ちのぼっていた。

「暑い」

数之進は、思わず口にしていた。

「この暑さでは、薩長も戦を休むであろうな」

小声で言ったのだが聞こえたに違いない。

「お侍」

噂話に興じていたひとりが、こちらに来た。侍に訊けば答えが得られるとでも思ったのか、

「薩長は戦になるかい」

軽い口調で言った。

「わからぬ。薩摩は海、長州は陸を得意とするゆえ、五分と五分やもしれぬの。戦うかどうかはさておき、そもそも薩摩七十七万石と、長州三十六万石には、共通している部分があるのじゃ」

「へえ、どんな？」

別の男が問いかけた。興味を持ったらしく、振り売りのまわりにいた男たちが集まって来る。みな興味津々という顔つきをしていた。

「まずこの二つの大藩は、財政の立て直しに成功しておる」

応えて、数之進は唇をゆがめる。

「もっとも、半分ほどは抜け荷のお陰だがな。両藩ともに富裕の国力を持っておるのじゃ。ゆえに此度の戦では、勝利をおさめるに至ったというわけよ」

「小判力の差ってわけか」

ひとりの言葉を、別の男が継いだ。

「うまいこと言うじゃねえか。だがよ。江戸は御用盗が横行する有様だ。物騒でしようがねえや」

御用盗とは、江戸攪乱の命を受けた浪士団が、御用の筋を口にして、商家を脅す手口だった。戦火が北に移ってもなお、残党がうろついている。荒んだ空気が悪党を招び、悪党がさらに極悪人を招ぶのだろう。

「夜は外に出ぬことじゃ。じきに市中見廻り隊が編成されるだろうが、今は自衛するしかない」

「八丁堀の旦那衆ですかい」

はじめに声を掛けて来た男が訊いた。

「さよう。近々捕亡方、これは町奉行所の与力や同心を改称しただけじゃが、これが編成されると聞いた。さらに市中取締隊も作られるとか。新政府の命により、薩摩藩を含む十二藩が、東京府に藩士を差し出す旨、決まっておるそうじゃ」

「で、戦よ」

別のひとりが、訳知り顔になる。

「薩長がドンパチやって、おいらたちは右往左往だ。儲かるのは、船宿と船頭ばかりってな。さっさと逃げた方がいいんだろうがよ。ここで踏ん張るのが、真の江戸っ子ってもんだい」

腕組みして、見得を切るような仕草をした。自嘲気味の笑いが広がる。ひとりがさらに問いかけた。

「それで、お侍。この空き地は、どうなるんだろうな。草ボウボウで、うろつくのは野良犬だけじゃねえ。狸や狐までが真っ昼間っから姿を現しやがる。とにかく寂しくっていけねえや」

「この空き地か」

数之進があらためて目を向けたとき、

「あら」

百合の声と同時に、兎（うさぎ）が男たちの足もとをすり抜けて来た。一角が易々（やすやす）と抱きあげる。撫でながら呟いた。

「狸や狐に加えて、兎までもが現れたか」

「兎、兎はどこへ行った」

背後であがった大声に、男たちが振り向く。押しのけるようにして、近在の百姓らしき男が姿を見せた。

「兎」

「おまえさんの兎か」

一角が手渡すと、百姓らしき男は破顔する。

「へへへ、さようでさ。あっしはこの近くの百姓なんですがね。お上から『育てるがよい』と下されたんですよ。餌（えさ）は空き地に生えている草でいいし、糞（ふん）もさほど臭くない。おまけに増える、増える、増える。いや、小判を産んでいるように思えて、笑いが止まらないんでさ」

「お上ってのは、新政府のことだろ」

ひとりが訊いた。
「え、そうなのかい。おれはてっきり将軍様のお言葉だとばかり思っていたが」
「兎を育てて、いかがするのじゃ」
今度は数之進が問いかける。
「へ？」
百姓は当惑気味に首を傾げた。
「育てた後のことよ。肉にするのか、毛皮を売るのか。あるいはその両方ということも考えられるが、新政府が兎を買い取る旨、約定をかわしたか」
「いえ、それは」
もごもごと口ごもる。
「お爺様。急がぬと、簀巻きにされて、大川やもしれませぬゆえ」
勝利に促されて、数之進は立ちあがった。
「おう、さようであったな」
男の道端会議の輪から抜け出した後も、やりとりが続いている。だれの胸にも消えない不安があった。

六

「兎鍋でも奨励するつもりか」
一角が、揶揄するように言った。
「牛鍋、豚鍋と、世は肉様々じゃ。兎も食えぬことはなかろうが、さして旨いものではあるまい。新政府もいいかげんな策を取るものよ」
歩きながら肩越しに振り返る。
「まさに苦肉の策じゃ」
数之進の言葉に、往年の色男はにやりと笑みを浮かべた。
「駄洒落か」
「そんなところじゃ。駄洒落で笑いとばさぬことには、やっていられぬわ。なにを考えておるのやら」
「余裕がないのであろう。会津はいまだ戦火の中。榎本武揚はさらに北へ向かっているとか。目指すは仙台であろうかの」
「それしか考えられぬ」

「最後の決戦地は、いずこであろうな」
「いずれにせよ、さっさと白旗をあげるのが得策よ」
数之進は、ふと堀割に目を投げた。屋根船を操る船頭の姿に、妙な懐かしさを覚えている。船頭は浴衣一枚を羽織り、頭に細く絞った手拭いを巻いていた。見事な棹さばきを証明するかのごとく、水の滴が玉のように飛び散っている。江戸っ子らしい粋な姿だった。
気持ちを察したのだろう、
「ほんの少し前までは、大川に屋根船があふれていたのにのう。茶屋の紋を染めぬいた幕を張った屋根船の美しさに、わしもよう見惚れたわ」
一角も屋根船を振り返っていた。堀割を吹く風が、わずかではあるものの、暑さをやわらげてくれる。老翁たちの歩みに焦れたのかもしれない。
「先に参ります」
勝利が追い抜いて行った。四人はすでに富岡八幡宮と永代寺の門前町に入っている。以前は人波の絶えることがなかった道なのに、ほとんど人が歩いていなかった。数之進は、鄙びた田舎町に紛れ込んだような気持ちを覚えた。
「遊郭には、閑古鳥が鳴いておるか」

「こちらです」
先に行った勝利が、角で手を振っている。従弟の身を案じているのはあきらか。支えるように、百合がそっと数之進の腕を取った。
「すまぬ」
「いえ。おじい様たちに、かような思いをさせる兄が、怨めしゅうございます。父上の仰せに従い、放っておけばよいのです。おそろしい思いをすれば、多少、ましになるやもしれませぬゆえ」
可愛らしい唇から出る言葉は、手厳しいものだった。
「出来過ぎた妹を持つと、兄は立つ瀬がない、と、いや、百合が悪いと言うているわけではないぞ」
慌て気味に言い添えた。ちらりと冷ややかな目を返されたからである。
「わかっております。なれど」
そこで百合は言葉を切る。
〝わたくしが男であれば〟
声にされなかった部分が、数之進の心にひびいた。ぽんぽんといつもの癖で、孫娘の腕を叩いた。

「新しい世は、悪いことばかりではないはずじゃ。女子が活躍できる場が、増えるやもしれぬ。増えぬと思うた場合は、百合が増やせばよい話よ」
「はい」
「それにしても、人がおらぬの」
一角が言った。
「江戸を逃げ出した商人や職人は、いつ戻って来るのであろうか。このままでは干上がってしまうわい。わしが若ければ、毎日でも通いつめるものを」
遠まわしに竜平を擁護していた。数之進は黙って、角を曲がる。男が通わなければ、遊郭は潰れるだろう。昼見世の路地には、弛緩した空気が漂っている。大欠伸をしている遊女を見て、数之進もつい欠伸をしていた。
「欠伸も伝染るわい」
「お爺様」
通り過ぎかけた三人を、勝利が呼び戻した。
「お、いかん」
数之進は戻って、遊女屋の暖簾をくぐる。勝利は廊下にあがり、階段をのぼり始めた。見世の男衆には話を通したのだろう、あとに続いた数之進と一角を、男衆が

辞儀で出迎えた。

「そなたはそこで待て」

百合に言い置いて、二階へとあがって行った。開け放たれた座敷に、昔の賑わいを探すのはむずかしい。風通しの良さが、せめてもだろうか。

ここです。

というように勝利が、襖（ふすま）の閉まった座敷を目で指した。数之進より先に盟友が、襖を少しだけ開ける。中から男女の語らいが流れて来た。

「本当に大丈夫なんですか」

遊女だろう、女の問いかけに、竜平が答える。

「案ずるな。うちは横浜で手広く商いをやっているんだ。おれが大川に放りこまれるとなりゃ、あわくって飛んで来るさ」

「それにしては、遅いじゃありませんか」

「横浜は、日本橋より遠い。爺さんたちが、よたよたと来るんだ。夕方頃にようやくお着きと相成（あいな）って……」

「竜平！」

こらえきれず、数之進は飛びこんだ。一角と勝利も中に入って来る。

「お、お爺様」

竜平は布団の上で目を剝いた。女物の長襦袢をまとい、生意気に煙草をふかしていたようだ。臑毛だらけの足が、紅い長襦袢の裾から覗いている。白粉と煙草の匂いに、昨夜の余韻もまじっていた。

年は十九。色男ではないが、醜男でもない。笑うと人懐っこい顔になるのだが、今はその余裕がないのか、蒼白になって、唇をわななかせている。

「……」

睨みつける数之進の後ろで、一角が遊女を廊下に追いやる。勝利は戸口に立って、万が一にそなえていた。逃がすまいと気合いが入っている。もっとも玄関には、百合が待っているので逃げられるわけがない。

「よたよた来たわい、おまえの虚言に騙されての」

屈みこんで、孫の額を軽く小突いた。

「いえ、よたよたなどと……」

「竜平」

二度目の呼びかけは、一角だった。大声を出したわけではない。が、一角の外孫にあたる竜平は、角翁をなにより畏れている。

「申し訳ありませぬ」
寝乱れた布団の上で平伏した。
「偽りを申しました、浅薄でございました。始末されると聞けば、お爺様たちが急ぎ、すっとんで来るだろうと考えた次第にござります」
言い訳には耳を貸さない。
「借財はどれほどじゃ」
数之進は問いかけた。
「……」
沈黙を返される。
「どれほどじゃと訊いておる」
苛立ちまじりの問いかけに、消え入りそうな答えが返った。
「ひ、百と、五両」
「なに？」
「百五両にござります！」
「ひ……」
座りくらみを覚えた数之進を、後ろで一角が支える。

「しっかりせい、傷は浅いぞ。姉君たちの借財は、三百五両だったではないか。あれから見れば、まだましじゃ」

「はい」

顔をあげた竜平の頭に、数之進は思いきり拳をくれてやったが、

「あたっ」

あまりの固さに手が痺れた。

「いつつつつ、けろりとしておる。その頭の固さに心根が沿わぬのは、得心できぬが致し方ない。わしは諦めた。大川でひと泳ぎするがよいわ。行くぞ、一角」

痺れた手を振りながら、廊下に出る。刹那、柱の下の方に『あるもの』が刺さっているのを見たが、気づかぬふりをした。慌て気味に声が追いかけて来る。

「百五両は、お爺様」

「ここで働きつつ、返すことじゃ。それがいやなら、大川の藻屑と消えるしかあるまいな。四月に言うたと思うが、わしは横浜の作之進たちと縁を切っておる。覚悟のうえの縁切りじゃ。金子は今、はて、いくら持っていたかの」

「わしは三両、おまえは二両。併せて五両じゃ」

一角の言葉で思い出した。

「さようであった。色々物入りだろうからと、作之進が持たせてくれた大事な金子よ。女遊びにしか興味のない色狂いの孫に、渡せるはずもない」

「邪魔したな」

ぴしゃりと一角が襖を閉める。金を支払ってもらえると思っていたのだろう。階段の前に男衆が集まっている。老翁たちを庇うように勝利が進み出た。

「手荒な真似はならぬ」

数之進は言い、主らしき風体の男に目を向けた。

「百五両分、孫は働いて返すと言うておる。働き手を雇う余裕がないのであれば、簀巻きにして大川に放りこめばよい。われらはいっさい口を出さぬ。後々遺恨も残さぬゆえ、案ずることはない」

「見世先でお待ちの妹君を……」

主らしき男の言葉を、階下からの絶叫が遮った。

「うわっ」

「こ、この女」

百合に投げ飛ばされたのだろう、

「柔をいささか嗜んでおる。剣術と槍もな、わしが指南した。あれに遊女は務ま

らぬ。また兄の借財を返すために、我が身を捧げる女子でもない。数之進が言うたように、阿呆な男は大川の魚の餌にしてやるがよいわ」

一角が言った。勝利が先に立ち、老翁たちは階段を降りる。見世先では百合が、懐剣袋の紐をほどき、いつでも抜けるよう身構えていた。見世の外に投げ飛ばされたと思われる男たちが、着物に付いた泥を払っている。

「おじい様」

辞儀をした百合に、数之進は告げた。

「そなたの兄はもうこの世にはおらぬ」

土間に降りて、草履を履き、外に出る。ふたたび勝利が年寄りと娘を庇うような素振りを見せた。投げ飛ばされた二人に、油断なく目を配っている。それを横目で見ながら、二人の老翁は来た道を戻り始めた。

「いざとなれば、立ちあがる男だと思うていたのじゃが」

十八番の深い吐息が出る。

「買いかぶりすぎたか」

「親馬鹿ならぬ、爺馬鹿よ」

「うむ。いや、世津が言うていたのじゃ」

竜平は、なにか大きなことをやる子です。

「眼鏡違いだったのであろう。常日頃、『きらいな言葉は努力、好きな言葉は一攫千金』と言い放っておったからな。期待はしておらなんだが、もしや、と」

「一縷の望みに懸けたか」

盟友の呟きに頷き返して、数之進は、多難な明日に歩を進める。手勢は百合と勝利を含めて総勢、四人。

明日への道のりは険しかった。

第二章　ぶらかし大名

一

三日後の早朝。

数之進と一角は、芝将監橋の南に位置する美木藩の藩邸門前にいた。伝手を頼りに仔細を素早く調べつつ、百合を奥女中として送りこんでいる。勝利は麻布の下屋敷を中心にして、調べを続けているため、同道していない。

美木藩の現藩主は、美濃国芝山美濃守友春で、石高は一万石の小藩だ。藩邸の北には広大な増上寺があり、南には薩摩藩の中屋敷がある。東南には芝金杉町、本芝町といった町屋が控えているものの、その向こうに広がるのは江戸湾の雄大な景色。日本橋近辺よりも涼しく感じるのは、江戸湾から吹きつける風のお陰かもし

れなかった。

「美濃守様のお年は二十五。十八になったばかりの奥方様とは昨年、所帯を持ったばかり。前藩主、つまり、お父上だが、すでにみまかられておる。領地は豊かな土地ゆえ、実高は倍の二万石とも言われておるな。はてさて、家臣のことはいかようにお考えであろうか」

数之進は、表門を見あげた。御算用者として動くのは、五十数年ぶりとあって、昨夜はほとんど寝ていない。今も武者震いに襲われていた。

「下屋敷や抱屋敷を数多く持っていたが、いまや屋敷はここと麻布の二軒のみ。いやおうなく家臣に暇を出さねばならなかったであろう」

一角の呟きには苦悩が滲んでいる。

新政府は、十万石以上の大名が拝領できる屋敷は三か所、十万石以下の大名は二か所に制限する方針を打ち出していた。そのため、藩士を減らさざるをえず、巷には浪人があふれ返る状態となっていた。食い詰め浪人が盗人に転ずるのに時はかからない。江戸近郊は危険きわまりない無法地帯と化している。

「いずこも同じじゃ。今、賑わっておるのは横浜ぐらいよ」

小声で返した数之進に、一角は意味ありげな笑みを返した。

「流石は千両智恵よ。何度も言うたやもしれぬが、いち早く横浜の活況を予見し、次男の誠之進に、さまざまな商いをさせたのは正解であったわ」

「勘違いするでない。横浜の見世とは、もはやなんの縁故もないのじゃぞ。執着してはならぬ」

念を押すような言葉が出た。

「わかっておるわい。少なくとも、われらの子は安泰と言いたかっただけよ。まあ、来年のことはわからぬがな」

浮き沈みの激しい昨今、昨日のお大尽が今日は物乞いといった激変ぶりも珍しくない。数之進は大きく深呼吸した。

「さて」

「行くか？」

「おう」

武者震いを抑えて、御成門脇の潜り戸を叩いた。が、だれも出て来ない。試しに潜り戸を開けてみる。

「開いた」

「待て。わしが先じゃ」

と、一角が危険な役目を買って出た。半世紀前を髣髴とさせる労りだった。いつ、どんなときでも、盟友は数之進を守るのが務めと考えている。慎重に潜り戸を押して、足を一歩、踏み入れた。

「だれじゃ」

とたんに誰何の声がかかる。そのときすでに一角は中に入っていた。数之進もわずかに遅れて中に入る。槍を持った門番が、警戒心をあらわにしていた。

「爺の押しこみか？」

四十前後の中間は、槍を構えて、問いかけた。

「押しこみなどではない。わしは生田数之進、隣におるのは早乙女一角じゃ。殿の一大事に馳せ参じるのは、これ侍の務め。美濃国より駆けつけました次第。と、ご家老様にお取り次ぎいただけぬか」

姓名以外は嘘八百だが、これまたかつての御役目が甦っている。次第に胸が熱くなってくるのを感じていた。

「国許から」

門番は、あきらかに驚いていた。今更、来てなにをするつもりなのか。しかも爺ではないか。役に立つどころか、邪魔になるだけではないか。

そんな表情が現れている。
「ついでに横浜も見て参った」
数之進は、目通りする価値ありと、懸命に訴えた。
「国許の様子や、賑わう横浜の状態を、殿やご家老様にお話ししたいのじゃ。取り次いでくれぬか」
そっと紙包みを手渡した。ご時世に関わりなく、金の効果は絶大である。
「ご家老様がお目にかかるかどうかはわからぬが、まあ、取り次ぐぐらいはな。できなくもない」
もったいをつけて、門番は、母屋（おもや）の方に足を向けた。
藩邸の総坪数は、約二千坪。一万石の小大名家としては、ごく普通の構えといえた。通常、御成門の奥にもうひとつ、中門（なかもん）と呼ばれる門が設けられているのだが、それを造るだけの広さはない。母屋に入る玄関が見えていた。
「なんの荷であろうな」
一角が、左側に積みあげられた木箱や葛籠（つづら）を目で指した。
「下屋敷や抱屋敷の荷ではあるまいか。新政府に取りあげられてしまい、やむなくここに運んだのやもしれぬ」

「藩邸の前庭が、いまや荷物置き場か。ここがこの有様では、麻布の下屋敷はもっとひどいやもしれぬな」

そう言いながら、一角は、大台所に続く小門の方に歩いて行った。大名家の屋敷は特殊な場合以外、ほとんど造りは変わらない。

「だめじゃ、一角。ここにおらねばまずい」

などと言いつつ、数之進は盟友を追いかけている。伊達に年は重ねていない。幾たびもの苦難が、融通無碍の気持ちを養っていた。

(なるようになれ)

と、なかば開き直っている。

「ここも開くぞ」

一角が小門を開けて、大台所の敷地に入る。

「不用心なことじゃ」

数之進も友に倣った。左手に大台所の建物、右手にはぐるりと下級藩士用の長屋が続いている。長屋の前にも荷が山積みされていた。雨や土埃を懸念しているのか、いちおう油紙で覆ってある。

「なにやら不穏な空気じゃ」

ふたたび一角が、顎を動かした。長屋に入る戸口の前で、二人の男が話をしていた。ひとりはこの屋敷の藩士と思しき中年男、相手は若い町人である。

「もう魚は売れぬとは、どういうことだ」

藩士らしき男が言った。詰問口調だった。

「美濃守様は、最後の最後で新政府軍に加わったじゃありませんか。あっしらは、公方様のお陰で生計をたててきやしたからね。あくまでもご公儀の味方なんでさ。新政府軍なんぞ、くそくらえだ」

魚屋は判官贔屓の江戸っ子らしい台詞を吐いた。江戸に残った民の多くは、似たりよったりの考えを持っている。今までやってこられたのは、公方様のお陰、ゆえに新政府に与するやつは許せない。

「ゆえに魚は売れぬと？」

藩士の目つきが変わる。刀の鍔を左手で握りしめたが、それを見ても、いや、だからこそかもしれない。魚屋は「へへん」と胸を反らした。

「おもしれえ、やってもらおうじゃねえか。こちとら庖丁を使う商いだ。人斬り庖丁が恐くて、魚屋がやれるかってんだ。さあ、やれるもんならやってみろぃ！」

裾をたくしあげて、地面にどっかと座る。

「げ、下郎、馬鹿にしおって」
藩士は腰を落として、右手を刀の柄にかけた。
「あいや、しばらく、しばらくお待ちを」
数之進は右手を掲げて駆け寄る。むろん一角も後ろに付いていた。まあまあと割って入り、藩士に囁いた。
「騒ぎを起こせば、新政府にこの屋敷まで押さえられるやもしれませぬぞ。ここはこらえるのが肝要ではないかと存ずる」
目の端に、魚屋を外に連れ出す一角が映っていた。藩士は悔しげに唇を引き結んでいる。目で魚屋を追っていたが、藩主を慮ったのだろう、
「なさけのうござる」
怒りを愚痴に変えた。
「殿が新政府軍に加担したとたん、魚屋や八百屋が売ってくれなくなり申した。野菜を作っていた下屋敷や抱屋敷は、新政府に没収されてしまい、賄いが成り立ちませぬ。殿もどうせなら最後まで『ぶらかし大名』で通してくれればよいものを」
ぶらかしとは、主に幕府が用いた手だてである。拒絶もせず、さりとて応じもしないで、回答をできるだけ引き延ばすという策だ。調べた中に美濃守友春の話が載

っていたため、特に驚きはしない。
「仕方あるまい。新政府に与しなければ、今頃、この屋敷は放火されて、跡形もなく消え去っていたに相違ない。戦に参加しないまでも、どちらかを選ぶしかなかったのじゃ。殿も苦渋のご選択であったろう」
「それはそうかもしれませぬが」
藩士は答えた後、しみじみ数之進を見つめた。
「失礼ですが、ご隠居は？」
「お、ご無礼つかまつった。それがしは生田数之進。いてもたってもいられずに、国許より馳せ参じた次第。あれは盟友の早乙女一角じゃ」
こちらに戻って来た一角を手で示した。二人の老翁を交互に見比べて、藩士はおもむろに辞儀をする。
「申し遅れました。それがしは、田中三郎太（たなかさぶろうた）。江戸を離れたことは一度もござらぬゆえ、領地の様子はとんとわかりませぬ。賄方の頭役を務めております」
「さようか」
忙しく考えて、告げた。
「先程の話じゃが、野菜と魚の仕入れについては、心あたりがなくもない。ここに

来る前、日本橋で知り合うた者たちがおってな。頼めば、仕入れられるやもしれぬ」

横浜に移るまで数之進は、隠居後の務めとして、民の相談事にのっていた。江戸の『お助け侍』は、日本橋界限はもちろんのこと、亀戸村や今戸といった御府内に知れわたっている。仕入れられる自信があった。

「まことでござるか」

三郎太の驚きと喜びを、一角が後押しする。

「案ずるでない。おまかせあれ」

「その代わりと言うてはなんじゃが」

数之進は、交換条件を口にした。

「今、門番が御家老様に、われらの話をしておるのだが、諸藩はいずこも金欠状態。追い返されるやもしれぬ。田中殿の口利きで、しばらくここに置いてもらえるよう、話をつけてはいただけぬか」

「承知いたした。しばしお待ちを」

三郎太は力強く請け合って、表玄関に続く木戸に走った。すぐに動いてくれたそれに、藩の混乱が見え隠れしている。なんとしても野菜と魚を仕入れぬことには、

立ちゆかない窮状が表れていた。

「ひとまずは潜入に成功せり、かの」

数之進の言葉に、一角が肩を叩いた。

混乱の坩堝と化している江戸と武家屋敷。ひとりでも多くの者に、明日への道を示せるかどうか。

維新のお助け侍が、今、動き出した。

二

「いやいや、三日ぶりの鰯じゃ」

「まことに。鰯がかように旨い魚だったとはの」

「胡瓜の酢の物とて、負けず劣らず旨いわ」

「豪勢な夕餉よ」

広間はさながら小宴となっていた。噂を耳にしたのか、藩士がいっせいに現れたため、賄方は戦場のような忙しさになっている。

「ほれ、追加の飯が炊きあがったぞ。早う運べ」

数之進はごく自然に、采配を振っていた。年寄りゆえ、力仕事はできないが、段取りを指図するぐらいはできる。賄頭の田中三郎太が口添えしてくれたとあって、配下や下働きの者たちは、素直に従っていた。

（これで藩邸にいる藩士の、おおかたの人数がわかる）

しっかり頭に刻みこんでいる。調べられたのは、美木藩の今までの概要であり、現在の状況はつかめていない。まずは人数を知るのが先と思い、台所に陣取ったのは間違っていなかったようである。

「われらも飯にしようぞ」

一角に呼ばれて、台所の板の間に腰を落ち着ける。いつの間に作ったのか、握り飯が皿に載っていた。

「相変わらずじゃな。おぬしは素早い」

「鹿尾菜の煮物と、漬け物も取っておいたわ」

二人兼用のひとつの膳に、盟友は小鉢を並べた。食べねば保たぬと考えて、握り飯を頬張る。下男や下女の働きぶりを、眺めながらの夕餉となっていた。

「御家老を見たか」

と、数之進は訊いた。美木藩の江戸家老は、松本徳太夫、四十歳。さりげなく彼

の者の話を引き出そうとしたのだが、下級藩士たちは言葉を濁すばかりで、答えを得られていなかった。

「いや、見ておらぬ。ちらりと耳にしたのじゃが、御家老は麻布の下屋敷におられるとか。殿が藩邸、下屋敷が御家老ということなのやもしれぬ。此度の魚屋騒動もそうだが、騒ぎが起きるのは日常茶飯事。それぞれの屋敷で指揮を取るようにしているのではあるまいか。いちいち殿にお伺いをたてていたら、間に合わぬやもしれぬからの」

「ふむ。一理あるが」

「が？」

一角が鋭く問いかけた。

「なんぞ、気になることでもあるのか」

「いや、今、藩邸にいる藩士は、おそらく三十人前後。もともと美木藩は藩士の数が少ない藩じゃが、それにしても少なすぎるのではないかと思うてな」

慌ただしかったのは、はじめの四半刻（三十分）ほどのみ。早くも台所は落ち着き始めていた。下男や下女も老翁たちに倣い、飯を食べ出している。

「なれど、数之進。美木藩の禄高は一万石じゃ。新政府の天下となって、人減らし

をしたのは間違いない。下屋敷にも二十人ほどはいるだろう。藩邸に三十人というのは、妥当な数ではあるまいか」

「併せて、五十人か」

「殿に付いて領地に行ったとしても無禄やもしれぬ。時が経てば藩士の数は、もっと減るやもしれぬな」

一角の正論を否定するつもりはない。幕臣同様、藩士が選ぶ道も三つしかなかった。新政府に奉公するか、農民や商人になるか、殿様に同道して領地に行くか。先の見えぬ明日を、だれもが不安に思っていた。

「あの」

飯を食べていた下女が、遠慮がちに話しかけてきた。

「なんじゃ」

「思いのほか、胡瓜が手に入りました。ありがたいのですが、すぐには使いきれないほどの量なのです。せっかく仕入れられた胡瓜を、無駄にしたくないのですが、どうすればよいかと思いまして」

「漬け物樽には、押しこんだか」

数之進の言葉に、下女は小さく頷いた。

「はい。古漬けにしても美味しいので、入れられるだけ詰めこみました」
「では、残りの胡瓜は明日、笊に干すがよい。板ずりした胡瓜を、一寸（三センチ）ほどの長さに切って、干すのじゃ。幸いにも雨が降る気配はなし、よう干しあがるであろう」
「胡瓜を干す、のですか」
意外そうに訊き返した。
「いかにも、干すのよ。干しあがった胡瓜は、炒めて、砂糖と醤油で味つけすると、立派な総菜になる。甘酢に漬けてもよい。野菜は干すことによって、旨味が凝縮されての。茄子も人参も南瓜も、実に旨くなる」
「へえぇ、茄子や人参も干すのでございますか。茄子は色が変わって、汚くなるのではございませんか」
「薄い塩水に浸けた後、干すのじゃ。さすれば、さほど色は変わらぬ。よい味噌汁の具になる。胡瓜と同じように、炒めても旨い一品になるぞ」
「さっそく試してみます」
答えた女の目は、泣きはらしたあとのように赤くなっていた。
「いかがしたのじゃ。目が赤いの」

「ここから先、どうなるのか不安でたまりません。夜、あまり眠れないのです。色々と考えてしまって」

「ものは考えようと言うではないか。かような時こそ好機と、考えられるかどうかで明日が違ってくる。『金がなければ智恵を出せ、智恵がなければ汗を出せ』じゃ。侍よりも町人の方が、気楽でよいぞ。そうそう、目の疲れには、番茶がよい。湯飲みに番茶を入れて、そこに塩をひとつまみ、入れる。手拭いの先を浸しての。目にしばらくあてて、それが冷えたらまた湯飲みに入れたものを目にあてる。これを繰り返すだけでも、だいぶ楽になるはずじゃ」

「へえぇ、番茶ですか」

「ついでにもうひとつ。鹿尾菜は煮る前に、たっぷりの湯でさっと茹でるが肝要よ。味が染みこみやすうなって、うまく煮あがる」

「へえぇ」

三度目の驚きぶりを、一角が受ける。

「面白いことを言う爺であろう。巷では『お助け侍』の名で通っておる。千両智恵の持ち主でな。助けた者は数知れずよ」

「そのへんにしておいてくれぬか。尻のあたりが、こそばゆくてかなわぬ」

尻を掻く仕草の後、
「さて、年寄りは寝る時刻じゃ。片づけまでは、とうてい手伝えぬが、あとは宜しく頼むぞ」
立ちあがって、腰を伸ばした。一角とともに、台所の板の間から、広間に続く廊下に出る。ちょうど賄方の頭、三郎太に出くわした。
「お」
「生田殿」
深々と頭をさげる。
「助かり申した。藩士はむろんのこと、殿におかれましても、ひさかたぶりの焼き魚。箸がいっときも止まりませなんだ。本当にありがたく思うております」
二度目の辞儀には、辞儀で応えた。
「それがしこそ、でござる。こちらに滞在することを許されたのは、田中殿のご尽力のたまもの。ありがたきことと思うております」
「いや、それがしの口添えなど、たいした力はござらぬ。それよりも」
と、三郎太は数之進の耳もとに唇を寄せる。
「引き続き、野菜と魚を仕入れられまするか」

「毎日のことでござるゆえ、いささかむずかしゅうござるが、なに、おそらく大丈夫ではないかと存ずる。先程、届けてくれた者に、頼んでおきましたゆえ」

恩着せがましく言った。実際のところ、新肴場や青物市場は、閑古鳥が鳴いている有様なのである。江戸から人が流れ出てしまい、店仕舞いした者も少なくない。啖呵を切った件の魚屋も、今頃、女房に怒鳴りつけられているのではなかろうか。知り合いさえいれば、品物を手に入れるのは、さほど困難ではなかった。

「さようでござるか。いや、それを伺いまして、安堵いたしました次第。少なくとも仕入れについて、頭を悩ませずに済みまする」

「麻布の下屋敷は、大丈夫でござりまするか。同じように仕入れられなくて、困っているのではござらぬか」

数之進の問いかけに、三郎太はさっと表情を変えた。

「いや、まあ、あちらはあちらで、なんとかやっているのではないかと。では、それがしはこれにてご免つかまつりまする。実は勘定頭も兼ねておりますため、のんびり膳を摂る暇もない有様。人減らしのあおりが、あちこちに出ておりまする」

ごめん。と、背を向けて、足早に立ち去って行った。

「台所に行くつもりではなかったのか」

一角が怪訝そうに見送っている。

「どうやら下屋敷に、美木藩の厄介事がありそうじゃな」

「勝利の調べがうまく進んでおるとよいが」

「待て！」

不意に広間で大声がひびいた。何人かの藩士が、ひとりの藩士を出て行かせまいとしていた。腕を持つ者、前に立ち塞がる者と、懸命に制している。

「止めるな。おれは今日こそ、殿に申しあげる。このままでは我が藩は、いや、殿の明日はないも同然ではないか。だれかが言上しなければならぬ。覚悟はできておる。おれは命を懸ける所存じゃ」

言い放った若い藩士を、数之進は見つめていた。それぞれの明日同様、幕臣や藩士の有りようがこういうときだからこそ、出る。ある者は茫然自失、ある者は私利私欲に走り、そして、わずかではあるものの、己を捨てて主のため、国のために動く者がいる。

（三つめの藩士であればよいが）

つい醒めた目を向けていた。己を捨てる覚悟のある者が、今の世にどれほどいるだろう。はなはだ心許ない状況であるのは確かだった。

「ええい、離せ。おれは殿に……」
「あいや、しばらく、しばらくお待ちを」
またもや数之進は止めに入る。
不満を口にする若い藩士こそ、格好の情報源だった。

三

「殿はまことに『ぶらかし大名』よ」
若い藩士――五十嵐健之助（いがらしけんのすけ）は言った。
「『考えておく』と仰せになるばかりで答えが出ぬ。その間に御家老が、やりたい放題じゃ。乗っ取られるのも、さほど遠くないやもしれぬ」
年は二十二、三。眉毛がきっとあがった風貌（ふうぼう）には、負けん気の強さが浮かびあがっている。背丈も五尺六寸（約百七十センチ）ほどあるのではないだろうか。見るからに武闘派という印象を受けた。
藩邸の長屋の部屋にいるのは、二人の老翁と、健之助を含む三人の若い藩士だった。酒を買いに行かせての酒宴となっている。

「乗っ取られるとは、聞き捨てならぬの」
数之進の言葉に、他の藩士が慌てた。
「いや、健之助は大袈裟に言うておるだけじゃ。我が藩は一丸となって、国難を乗り越えるつもりじゃ。今こそ、ひとつになるときよ」
「しらじらしいことを言うな」
健之助が冷ややかに遮る。
「一丸となる、ひとつになるだと？　その輪をくずしているのは、他ならぬ御家老ではないか。徳太夫藩でも立ちあげる腹づもりなのやもしれぬ。殿をないがしろにするのは許せぬ。ゆえに、だ。おれは殿に願い出て、御家老を」
手で斬る仕草をした。
「めったなことを言うでない」
「御家老の息がかかった者に聞かれるやもしれぬ」
ふたたび狼狽えた二人を、一角はちらりと見て、大徳利を取りあげる。
「ますます剣呑な話じゃ」
と、空になった健之助の湯飲みに酒を注いだ。人に聞かれるのを懸念しているようだが、長屋は静まり返っている。ほとんど人がいないのを、数之進は事前に確か

めていた。

「いったい、御家老はなにをしておられるのか。我が藩にとっては、はなはだ都合の悪い話のように思えなくもない。老いたとはいえ、わしも藩士のはしくれよ。他言はせぬゆえ、話してはくれぬか」

三人にゆっくりと目をあてていく。健之助だけは見つめ返したが、他の二人は目を逸らした。口を開きかけた健之助の袖を、懸命に引っ張っている。これでは駄目だと思い、数之進は話を変えた。

「ご正室の妙子様であったか。昨年、祝言をあげられたと伺うたときには、みな心より安堵いたした次第。殿は奥方様と、仲睦まじゅう過ごしておられるのであろうか」

別方向から探りを入れる。

「仲睦まじゅう過ごしておられた。今年の春まではな」

健之助は相変わらず仏頂面をしていた。

「ほう、今年の春までとは？」

意味ありげな部分を、問いかけに変える。

「御家老よ」

「知ってのとおり、ご正室は御用人、坂野清兵衛様の愛娘、妙子様。殿が惚れられての。是非にと望まれたのだが」

二人の藩士が、交互に答えた。

「負けられぬとでも思われたのか。御家老もご自分の愛娘を、是非、殿のご愛妾にと訴えられてな」

「殿が例によって例のごとく、『うむ』だの『ふむ』だの言うて、先延ばししているうちにの。御家老は娘御を下屋敷の奥御殿の女主に据えてしもうた」

「きっぱりと断ればよいものを」

「殿も男だからな」

二人はにんまりと笑みを交わし合った。健之助はむっつりと押し黙っている。三人の中では、一番、正直者に見えた。

「なるほど。では、この屋敷の女主は、ご正室の坂野妙子様。そして、麻布の下屋敷の女主は、御家老の娘御か」

繰り返した数之進に、ひとりが早口で告げる。

「いや、殿のお気持ちは、ご正室の妙子様にある。下屋敷には、さよう、今まで二度しか訪ねておらぬ」

「なれど、ご愛妾は早くもこれだと」
もうひとりが、手で腹がふくれる仕草をした。
「早くもご懐妊か」
一角が思わず声をあげる。
「という話でござる」
「いやいや、殿のお胤ではないという噂も」
「真実やもしれぬ」
「言い交わした相手がいたというからな」
答えるのは二人のみ。健之助は加わろうとはしない。が、おそらく同じ考えなのだろう。同意するように小さく頷いていた。
(殿のお胤ではない、か)
数之進は内心、呆れていた。日本の明日を考えるときではないのか。それがあまりにも大事すぎて無理だというのであれば、せめて、藩士の明日を考えるべきではないか。
「美木藩は、平らかじゃのう」
一角の口から皮肉たっぷりの言葉が出た。ぴくりと健之助の眉があがる。

「殿は、色事に現をぬかしておるわけではない」
庇うあたりに、気質が表れていた。命懸けの直訴も辞さないと言いつつ、心の中では常に美濃守を案じている。真っ直ぐな想いが、両の眸にちらついていた。
かちんときたのか、
「さようか。なれど、現をぬかしておるようにしか見えぬがの」
反論した盟友を、数之進は窘める。
「一角」
同時に、頬を朱に染めた健之助を手で制した。つまらぬ諍いは、双方にとって益がない。素早く頭を整理した。
「つまり、我が藩は、藩主派と下屋敷の家老派に、分かれておるわけか」
「いや」
健之助は否定しかけて、口をつぐんだ。だれの目から見てもあきらか。新政府軍と旧幕府軍ほど深刻ではないものの、美木藩にも戦いがある。
「なんだかんだ言うても殿はよいわ。食えるからな。われらはどうなるのか」
「さよう。国許に戻っても、三男坊ゆえ居られる場所はない」
また二人が話し始めた。

「新政府は能力のある者しか雇ってくれぬ。このまま江戸、いや、東京に残って商いでもするか」
「はたまた食えないのを覚悟のうえで殿に付いて行くか」
「いずれにしても楽ではない」
「うむ。今までのようなわけにはいかぬ」
二人の言葉は、諸藩の下級藩士全員の叫びだった。冷や飯食いの次男坊や三男坊。だがしかし、幕府が続いていれば、なんとか食うぐらいはできた。平和ボケと言ってしまえばそれまでだが、大名家の下級藩士ほど、つぶしの利かない者はいないのではあるまいか。
「殿にお目通りできぬかのう」
数之進は、独り言のように呟いた。

四

「領地は江戸ほどではないものの、やはり、盗人や悪党どもが横行しておる。負けず劣らずの厳しい状況じゃ。そういった中にありながらも、民は必死に土地を耕し、

特産品の美濃紙を作っておる。いくつか言上したき儀もある。民の声を伝えたいのじゃが」

「民の声とは？」

健之助が訊いた。

「できれば蚕を飼いたいという話が出ておる。資金は村で準備するゆえ、許可していただけぬかと相談されての。おぬしらも知ってのとおり、良質の蚕種紙は、外国、これは英吉利や仏蘭西といった国のことじゃがな。異邦の者たちにより売れる。村人はその噂を聞いたのであろう」

ほとんどは作り話だったが、蚕種紙が売れるというのは事実だった。初めて聞く話だったのかもしれない。

「生糸や絹布ではなく、蚕種紙が売れるのでござるか」

健之助は、驚きを隠そうとしなかった。

「いかにも。横浜に立ち寄った折、聞いた話よ。どうやら欧州では、蚕に悪い病が出来しておるようでな。蚕に悪い菌だかなんだかが付着して、台無しになってしまうとか。ゆえによう売れておるとか」

「蚕種紙、一枚が、なんと九ドルじゃ」

一角が両手を使い、九と示したが、三人ともぽかんとしている。数之進が補足した。

「今の相場では、一両が亜米利加ドルにして、ほぼ一ドルよ。つまり、蚕種紙、一枚の値は」

「九両でござるか」

健之助が大きな声で継いだ。他の二人は、口を開けたまま、言葉もない。ただただ吃驚していた。

「さよう」

「ゆえに数之進は、桑の葉を育て、蚕を飼えと言うておるのじゃ。我が国の蚕種紙は質がよいと評判のようでな。蚕の病が落ち着いた後も、売れ続けるのは間違いない。美濃紙とともに、藩で奨励するのが得策よ」

一角の言葉を、すかさず受けた。

「我が国の紙も評判がよいとか。『国産の紙は堅靭、技は精巧で美しく、異邦ではいまだその比を見ず』と聞いた。中でも美濃紙は、他の追随を許さぬほどに品質が優れておる。我が藩では、通常の美濃紙のほか、漆液を塗った紙による品物、さよう、手文庫や枕、高坏、茶筒なども扱っておったな」

数之進の目は、部屋の片隅に置かれた茶筒に向いている。視線に気づき、健之助が持って来た。手に取ってみる。

「一閑張りの手法じゃ。とても紙とは思えぬほどに堅固でありながら、軽い」

つい感嘆の声をあげそうになったが、意識して気持ちを抑えた。一閑張りの品は日常的に使っていたが、贅沢品と思い、すべて横浜の家に置いてきたのである。

「『良品は、声なくして人を呼ぶ』というが、まことよの。丈永奉書に油引きして、文様を打ち出した紙、あれは、うーむ、なんであったか」

名前が出てこない。

「擬革紙でござるか」

健之助が助け船を出した。

「そう、擬革紙であったな。あれも美しい紙じゃ」

「日本橋の〈竹屋〉が有名ではないか。竹屋絞りであったか。東都土産のひとつとして、紙煙草入れがあるぞ」

一角の言葉に、大きく頷き返した。

「あれも異邦には受けがよい。とにかく目を外に向けるのが肝要よ。外国相手に商いをするぐらいの気持ちを持たねば、生き残れぬ」

「われらに紙を造れと？」
健之助が気色ばんだ。
「紙漉きをやれと仰せか。職人に頭をさげて、ご指南いただけぬかと頼み、手ほどきを受けよと……」
「いかにも」
数之進は穏やかに答えた。士農工商の制度に従い、健之助は士として剣の技をみがいてきたに違いない。あるいは苦手な漢文や算術も、一生懸命に習得してきたのかもしれない。それが役に立たないと言われたも同然だ。
「おぬしの憤り、わからぬでもない」
静かに諭した。
「なれど、時代が変わってしもうた。わかっておろうが、もはや剣で食べていくのは無理じゃ。生計をたてるための技を会得しなければならぬ」
「わしも同じ考えじゃ」
一角が同意する。
「幸いにもおぬしらは、まだ若い。かような技でも会得できよう。まあ、やり始めるのに、遅いということはないがの」

「傘寿を過ぎても、でござるか」

今度は健之助が皮肉を返した。とたんに一角は顔色を変える。

「われらは七十九よ。まだまだ傘寿には遠いわ」

のう。と数之進を見やった。苦笑いで応えた後、

「わしは、今からでも指南を受ける」

真剣な目を健之助に向けた。

「紙漉き、蚕の育成、畑仕事。生きるためなら、なんでもやるがな。民に教えを請うのは恥ずかしいことか？　それはすなわち、侍としての誇りを捨てることになるとでも考えておるのか？」

手厳しい言葉になったかもしれない。

「……」

健之助は唇を噛みしめ、他の二人は顔を見合わせる。諸藩の下級藩士の、代表格と言える三人を見るにつけ、数之進は気持ちが暗くなりかけた。が、天璋院の顔を思い出して、奮い立たせる。

「努力は幸せの第一歩よ。明日のために動くがよし、じゃ。ゆえに、わしは殿へのお目通りを願うておる」

「なにを言上するのでござるか」
健之助の問いかけには、わずかではあるが好奇心と……諦めに似たものが漂っていた。今更、なにを言ったところで、この状況は変わらない。美濃守友春になにができるのか。隠居しても困らない大名が、下級藩士の明日など気にかけるわけがないと、心のどこかで思っているようだった。
「明日よ」
数之進は即答した。が、理解できなかったのだろう、
「明日？」
健之助は首を傾げる。
「それぞれの明日じゃ、明日への道よ。それを開くために、殿はなにをすべきか。われらはなにを……」
突然、長屋の廊下に大声がひびいた。酔っているのか、意味不明のやりとりがかわされている。明かりが点いているのを見たに違いない。
「おう、酒宴か」
障子を開けた藩士の横に、もうひとりが顔を覗かせる。
「珍しいな。よう金があったものよ」

二人とも顔が真っ赤だった。健之助は露骨に、いやな表情をする。
「ご隠居の奢りじゃ。われらの懐には、一文もないからな。だれかのように、屋敷にある金目の品を売り払うような真似はしておらぬゆえ」
「なに？」
と、一角が腰を浮かせる。
「まさか」
帰って来た二人を、じろりと睨みつけた。年老いても百戦錬磨の強者、眼光の鋭さに恐れをなしたのか。
「わ、われらは失礼する」
慌てて障子を閉めた。どたどたと哀れなほど慌てふためき、自室へと逃げこんだ。だれからともなく吐息が洩れる。
「ここまで、ひどいとは」
数之進は、我知らず懐の手札を握りしめていた。主家の道具を売り払って、酒代に替えてしまう藩士。あの様子では遊女屋にも足を運んでいるかもしれない。
荒みきっていた。
（この三人は、まだましなのやもしれぬ）

少なくとも隠居爺の話に、耳を傾けてくれた。明日への心得はできていないが、おいおいわかってくるのではないだろうか。この中のひとりでもいい。生計をたてられるようにするのが、数之進たちに与えられた最後の使命。

「わしでよければ、畑の耕し方など、指南して進ぜるが」

遠慮がちに申し出る。

さて、三人はどう応えるか。明日が楽しみだった。

五

翌日の早朝。

「取り去った雑草は、木枠で囲んだその場所に入れてくれぬか。夏の間は伸び放題だったらしいからの。いくらでも集まるであろう」

と、数之進は、大台所前の庭の片隅を指した。幅二尺（六十センチ）、長さ一間（百八十センチ）ほどの板を土に埋めこみ、四角く囲ってある。その中に抜いた雑草を入れるよう、下働きの者たちに告げていた。一角は台所の中で野菜を干すための下準備を手伝っている。

「よいか。この雑草箱はよき肥料になるとともに、しばらくの間は、小さな畑としても活躍する。入れたら足で踏み、その上にまた雑草を被せるようにすれば、相当、詰めこめるはずじゃ。はじめは南瓜あたりが無難じゃが、時期としてはそうよな、菠薐草でも植えてみるか」

どんどん積みあげられる雑草を、鋤で持ちあげながら、放りこんでいった。没収された下屋敷や抱屋敷の品だろう。使いこまれた鍬や鋤が、塀に立てかけられている。

「ここに菠薐草を植えるのでござるか」

健之助が意外そうに訊き返した。他にも酒宴に参加した二人の藩士が手伝っている。昨夜の飲み代分ぐらいは、働かねばならぬとでも思ったのかもしれない。汗だくになって、藩邸の庭に生えた雑草を抜き取っては、運んで来た。

「さよう。二作目は人参、次は牛蒡といったように、この雑草箱で野菜を作り続けると、細かくてよい土ができる。藩邸にいるのは殿を含めて、せいぜい四十人。わずかなりとも野菜を作れれば、それだけ助かるからの。せっかくある庭を使わぬ手はない」

陽が降り注ぐ庭を、ゆっくりと見まわした。ここにも運びこまれた荷が積みあげ

られていたのだが、数之進は、それを空いている長屋に移させていた。鍬を手にした下男が、慣れぬ手つきで耕している。

「畑では白菜や大根、人参などを作り、雑草箱では菠薐草を作る。白菜や大根は漬け物にも使えるではないか。四種類の野菜だけでも、献立がゆたかになる。自給自足をめざして、畑仕事に勤しむのが肝要よ。まあ、米まではなかなか作れぬがの」

なにげなく出た言葉に、健之助は過敏な反応を見せた。

「生田殿におかれましては、いずれ米も滞ると、お考えでござるか」

雑草箱に草を放りこむ手が止まっている。今までは国許から送られて来る米があった。不足分は江戸で買い求め、屋敷の賄いに充てられた。しかし、領地を没収されたらどうなるか。禄高は皆無となり、明日の米にも困りかねない。

「わからぬ」

正直に答えた。

「新政府が諸藩をかように扱うか、わしには想像もできぬ。なれど、常に最善を尽くすのが信条でな。今、できることを、やる。それしかない」

「今、できることを、やる」

健之助は小声で一部を繰り返した。感じるところがあったのかもしれない。頷い

て、また作業に戻った。
「そうじゃ。鶏の糞は集めたか」
数之進の問いかけに、健之助は畏まる。
「は。鶏小屋に赴き、落ちていた糞を集め申した。肥料に使うのでござるか」
「いかにも肥料よ。畑として使ったことのない土地を、滋味ゆたかな土地に変えねばならぬ。鶏糞を土に撒き、敷き藁を被せておくとよい。これからは落ち葉も拾うようにして、落ち葉箱も作るのがよかろうな」
「無駄なものはいっさいない」
健之助は噛みしめるように言い、目を投げた。侍は用無しではないのか。これから役に立つのは、商人や職人、そして、農民ではないのか。さまざまな武道や学問に、費やしてきた二十数年は無意味だったのだろうか。
否。
我が身を重ね合わせたような眼差しをしていた。
「そういうことじゃ」
数之進は力をこめて、続ける。
「この世に、無駄なものは、ひとつもない。さよう。月代を剃った後の毛も、よき

肥料になるのじゃぞ」

これまた意外な話だったに違いない。

「月代の毛が？」

健之助は額に手をやった。

「うむ。人の毛は、寝ているときでも伸びる。つまり、命の力があるのじゃ。それを撒けば、作物にも力が移って成長が早くなる」

「なるほど。では、月代の毛も集めておくようにいたします」

「問題は苗よ。『苗半作』と言われるように、よい苗ができれば、病や低温、干ばつといった災害にも強い作物ができるのじゃ。なれど、苗売りも江戸から姿を消してひさしい。種から育てねばならぬのは、いささか手間がかかるの」

「勘定頭の田中様が、ご存じやもしれませぬ。下屋敷や抱屋敷の畑で使う苗を、仕入れておられました。よい苗が仕入れられるかどうかまではわかりませぬが」

「さようか。お目にかかった折に、お訊ねしてみるとしよう。そういえば」

数之進は腰を伸ばしながら、母屋を振り返る。

「今朝はまだお顔を見ておらぬ。朝餉の折にも、おいでにならなんだ。お出かけになられたのか？」

「麻布の下屋敷でござろう」

健之助は素っ気なく応じた。田中三郎太に対しての、複雑な感情が見え隠れしていた。相談相手として推奨しつつも、三郎太が麻布の下屋敷に行くことは好ましく思っていない。

（鍵は、やはり、下屋敷か）

喉（のど）まで出かかった問いかけを呑みこんだ。

「数之進。ちと見てくれぬか」

背後から一角に呼ばれた。勝手口の脇に並べた木箱の上に、胡瓜や人参といった野菜を広げた平笊（ひらざる）が置かれている。数之進は健之助に断って、一角の方に向かった。

「胡瓜は、昨日、おまえが言うた一寸ほどの長さのものと、斜めに薄く切ったものを干した。茄子も輪切りと長く切るものを作ったぞ。人参も輪切りじゃ」

盟友が勤労の楽しさを披露する。数之進も目を細めた。

「みなで働く姿は美しいの。茄子は干している間は色が変わらぬが、取りこむとすぐに色が変わってしまうのが難点じゃ。色が悪くなっても味は変わらぬが、見た目を気にするのであれば、取りこんですぐに料理するがよい」

一角の隣にいた昨日の下女に告げた。

「ご隠居様。かように沢山の野菜を干して、いかがなされますか。煮るとよいのはわかりますが、いささか多すぎるのではないかと存じます」

「長くは保たぬが、多少、日持ちするゆえ、案ずることはない。すぐに使いきるであろう。茄子と人参は、かき揚げにすると旨いぞ。牛蒡や南瓜があれば、なおよいがの」

「牛蒡はございます」

「お。では、それも干すとしよう。人参や牛蒡は、鹿尾菜や干瓢と一緒に炒めて、きんぴらにしてもいける。唐辛子をちと入れてな。ぴりっとした辛みが、食欲をそそるであろう。今日も暑うなるやもしれぬ。干し野菜のきんぴらで食が進むのは間違いあるまい」

「では、牛蒡は千切りで宜しいですか」

「よいが、少しの間、水に四半刻ほど晒してから干すのが大事じゃ。晒した後、茶色い水が出なくなるまでよく洗うのも肝要よ。色が黒くなるのを防げる」

「ひと手間も、ふた手間もかけるのですね」

「さよう。人を育てるのと一緒じゃ。手間を惜しんではならぬ」

「ご隠居様の千両智恵を、拝借いたしたく思います」

下女の言葉に、思わず盟友を見やる。千両智恵を吹きこんだのはあきらか。にやりと笑い返した。

「いかがなされましたか」

不審げな下女に首を振る。

「いや、なんでもない。して、なにを訊ねたいのじゃ」

「長葱の保存法でございます。長葱は保つと仰って、毎年、大量に仕入れるのです。土に埋めて保たせますが、寒い年には凍ってしまい、使えなくなることもしばしば。なにか策がないかと思いまして」

「長葱か」

数之進は屈みこみ、小枝を取って地面に図を描いた。

「葱の長さほどの穴を掘り、そこに籾殻を入れるのじゃ。その上に葱を立てて、入れる。この際、大事なのは、葱の根が土に付くようにしてやることよ。さすれば土に根を張って、よけい長持ちするからの」

「へえぇ、籾殻で」

下女も屈みこんで、昨日と同じ感嘆の声を洩らした。

「まことに千両智恵でございますね。色々なことをようご存じで」

「これでけっこう稼げる」
一角が唇をゆがめた。
「以前であれば、礼金を貰うたところじゃがな。こういうご時世ゆえ、おまけにしておいてやろうではないか」
「ありがとうございます。では、さっそく牛蒡の灰汁抜きをいたしますので」
台所に戻って行った下女を横目で見ながら、二人の老翁は陽だまりに腰を降ろした。

六

「あまり無理をするでない」
数之進は友を案じたが、
「なんの。おまえとは、鍛え方が違うわい」
すぐに切り返された。
「確かに」
「百合によると、勝利は来なんだ由。下屋敷の調べに、思いのほか手間取っておる

ようじゃの」

「うむ」

数之進は頷いた。

最低でも一日一度は、情報交換をする段取りになっている。勝利は百合に報告し、百合がそれらを纏めて、老翁たちに知らせる。そういう手筈になっていたのだが、勝利は日付が変わっても姿を見せなかった。

〝奥御殿の裏木戸に、現れませんでした〟

百合の言葉が甦っている。だれに姿を見られるかわからない。長話は禁物ゆえ、素早く文を渡すよう、勝利には言い含めてある。にもかかわらず、現れなかったのは、想像以上に美木藩の内情が、込み入っているからかもしれない。

〝お殿様は、昨夜、奥泊まりなされました。ご正室の妙子様と夜遅くまで月見をなされた後、お寝みあそばされたようでござります。仲睦まじいご様子が、傍目にも見て取れるほどでございました〟

なれど、と、百合は不安げに続けた。

〝奥御殿の御門では、藩士が寝ずの番をしておりました。旧幕府軍の浪士を警戒しているのやもしれませぬ。勝利様は来なかったのではなく、来られなかったのやも

しれませぬ〟

戦場が奥州から北に移りつつあるとはいえ、新政府軍の残党狩りは続いている。昔の伝手を頼って、諸藩に駆けこむ者も少なくない。

美木藩も例外ではないということだろう。

「勝利が来られぬのであれば、われらが出向くしかあるまいな」

数之進の呟きに、一角が苦笑いする。

「年を取ると、気が短くなるのう。待つのが苦手になった。もっとも、わしは昔から気の長い方ではないがの」

「なにやら、このあたりがちりちりするのじゃ」

と、数之進はこめかみのあたりを指した。

「夕餉のときには、三十人ほどいた藩士が、深更には姿を消していたではないか。昨夜、長屋にいたのは、金目の品を売り払い、飲みに行った不届き者を含めて、総勢七人。むろん、われらも入れての話よ。残る二十数人は、いったい、どこに行ったのか」

「奉公先を探しておるのやもしれぬ。禄高が一万石の大名家ゆえ、養える藩士はごくわずか。人減らしには遭わなかったものの、さっさと見切りをつけた方がいいと

思い、あちこちに足を運んでいるのではないか」
「見て見ぬふりをしておれば、自然に藩士の数が減るか。たとえ金目の品を売り払う輩がいようとも、なにも言わぬが得策。『ぶらかし大名』と呼ばれる美濃守様にとっては、願ってもない状況なのやもしれぬが」
「不穏な空気を感じるのか」
「うむ」
数之進はちらりと周囲を見、いっそう声をひそめた。
「美濃守様は最後には、新政府軍に加わった形を見せておられるが、真実は定かではない。はたして、お心はいかがであろうの。それを知るのは、美濃守様だけじゃ」
「美濃守様のお心を知る必要があると？」
盟友の口から、怪訝そうな問いかけが出た。すべてではないが、藩主の中には飾りにすぎない者もいる。ましてや『ぶらかし大名』となれば、藩士はほとんど相手にしていないだろう。にもかかわらず、なにゆえ、こだわるのか。
一角の問いかけを正確に読み取った。
「わしはそう考えておる」
「おまえのこだわりは、あとで『なるほど』と思うことが多い。そうとなれば、隙

を縫って下屋敷に……なんじゃ」

腰を浮かせた一角の視線を追い、数之進も立ちあがる。健之助のもとに、昨夜、酒宴をともにしたひとりが駆けつけて来た。長屋の方を指し示しながら、二言、三言、話した後、二人は長屋の方に足を向ける。

「何事じゃ」

数之進も一角とともに追いかけた。長屋の小門に続く戸口には、何人かの藩士が集まっている。健之助たち三人組と、不届き者の二人組。そこに見たことのない二人の藩士が加わっていた。

「止めるなと言うているではないか」

新顔のひとりが、三人組に言った。

「下屋敷に行くのは、われらの言葉にあらず。この者たちの考えよ。それを他人がどうこう言えるものではない」

「御家老は殿を孤立させて、どうなさるおつもりなのか。我が藩を操ろうと考えておられるのではないのか。おれにはそう思えてならぬ」

健之助が語気を強めて反論する。三人組は藩主派、不届き者の二人は宙(ちゅう)ぶらりん状態、新顔の二人は家老派といったところだろうか。

「待て」
数之進は一角を手で制した。しばらく静観の態勢を取る。
「五十嵐はまだかようなことを言うているのか」
新顔のひとりを、もうひとりが継いだ。
「時代が変わったのじゃ。御家老は美木藩が生き残れるよう、心をくだいておられる。それはすなわち殿の明日を考えておられるからよ」
「さよう。御家老ほど美木藩のことを考えている方はおらぬ」
「意地を張るな、五十嵐。『二心殿（にしんどの）』の異名を持つ御用人の坂野様では、この乱世を生き抜けぬぞ」
「きさま、坂野様を愚弄するか！」
健之助が殺気立った。腰を落として、脇差の鞘を左手で握りしめる。藩士たちは畑仕事に勤しんでいたため、刀を外していたが、新顔の二人は刀を携えていた。
「やるか」
ひとりが腰を沈めた。
「ま……」
声をあげようとした一角を、遮るように大声がひびいた。

「やめい！」

玄関に続く木戸が開き、上級藩士と思しき男が現れた。若党らしき藩士をともなっている。年は四十前後、色男ではないが、目に独特の力があふれていた。仁義礼智信の五常を、今も守っているのではないだろうか。見るからに誠実そうな印象を受けた。忘れ去られようとしている侍の心を、持っている男のように思えたが――。

「む」

数之進は、現れた上級藩士と、新顔の藩士のひとりが見せた『ある仕草』に目を留めた。

「いかがしたのじゃ」

盟友の問いかけに首を振る。

「いや、なんでもない」

「なんでもないという顔ではないが、今は言いたくないという顔をしておるな。おお、徐々に勘が戻ってきたわい。なにやら胸が躍るの。昔の勘が戻って来たような気がするわ」

懐かしそうに呟き、小声で囁いた。

「あれが御用人の坂野清兵衛じゃ」

半世紀経っても潜入のやり方は変わらない。一角は藩邸の全体像をとらえながら、御用人の顔も確かめていたに違いなかった。

「ここは藩邸じゃ。言うまでもなく、刃傷沙汰はご法度。双方、引くがよい」

清兵衛は、藩士たちを見まわして言った。藩主派、家老派、中立派と、三つに分かれているように見えた藩士は、いっせいに畏まる。

「ははっ」

一礼してから、それぞれ目を合わせずに、散って行った。下屋敷の家老派の二人は外に出て行き、中立派は長屋に入り、藩主派の三人は大台所の方に戻り始める。藩士たちを目で追っていた清兵衛が、ふと老翁たちに目を向けた。

「う」

立ちあがろうとした数之進は、突然、腰に激痛を覚えた。中腰の姿勢のまま、呻き声をあげる。

「腰か」

一角が素早く支えた。

「う、む」

「そのまま座れ。動いては、いや、すぐに鍼を打った方がよかろうな。長屋の部屋

まで歩けるか」

「だ、だめじゃ」

うう、と、呻きながらも、一角の手を借りて、なんとか座る。清兵衛がこちらに近づいて来た。立ちあがることも一礼することもできない。

数之進はただ……呻き声を洩らし続けていた。

第三章　甦る悪夢

一

翌日の午前。

「悪夢じゃ」

数之進は、四つ手駕籠に揺られながら、ぶつぶつと呟いている。あの後、すぐに一角が鍼を打ってくれたお陰で、腰の痛みはかなりやわらいでいた。それでも鈍痛が完全に消えたわけではない。気をつけて動かないと、またあの激痛に襲われるのは必至。駕籠が揺れる度、腰を押さえていた。

「着いたぞ」

一角の声に、思わず安堵の吐息をついた。

「やれやれじゃ」

友の手を借りて、駕籠から降りる。本材木町一丁目の〈にしき店〉に着いていた。絵双紙屋の二代目彦右衛門が、見世から飛び出して来る。

「腰を痛められたとか。大丈夫でございますか」

不安げに問いかけた。あらかじめ使いをやって、今日、戻る旨、告げてある。美木藩には暇願いを出したが、大混乱の最中であるうえ、国許から出て来たという触れ込みの隠居爺である。特に気にかける者はいなかった。

「大事ない。ちと疲れが出ただけじゃ」

数之進は答えて、借りた家に足を向けたが、

「あの」

彦右衛門に呼び止められた。

「なんじゃ、彦右衛門。父親と同じ表情をしておるの。ははあ、さては厄介事に巻きこまれたか。それとも千両智恵の助けを借りたいという者が現れたか。まさか千両智恵の噂を、早くも流したわけではあるまいな」

「いえ、あ、千両智恵の話はいたしました。どこで耳にしたのかはわかりませんが、さっそく相談したいという者が現れたのでございます。野州の百姓でございます

が……」

「あとにせい」

一蹴して、一角は、数之進の介添え役になる。

「生田様」

なおも呼びかける彦右衛門を無視して、老爺たちは右側の一番奥の家に入った。左側の一番奥、向かいの家も百合の家として借りることを決めてある。奥の六畳間に腰を降ろして、数之進はふたたび大きな吐息を洩らした。

「ふう」

「ため息ばかり吐くでない。爺くさいと笑われるぞ」

一角は疲れを感じさせない動きで、茶の支度を始めた。おそらく彦右衛門に雑器の購入を頼んでおいたのだろう。竈には鍋や釜、手前の三畳間には古びた小さな茶箪笥が置かれていた。さらに開け放たれたままの六畳間の押入には、二人分の夜具が押しこまれている。布団を敷きたかったが、数之進にはその気力もない。

「おぬしの言うとおりじゃが、年には勝てぬ」

手枕で横になる。奥御殿の百合にも、今日一日、本材木町の家に戻るという文を届けておいた。なにかあれば勝利は、ここに来るはずだ。

「ここの方が、なにかと都合がよいな」
独り言が出る。坂野清兵衛は、動けなくなった数之進に、労いの言葉をかけて立ち去っていた。大台所における千両智恵の働きぶりは耳にしていたらしい。が、国許の様子を訊ねることもなく、引きあげている。
「あれが気になる」
「なんじゃ」
茶を淹れた一角が、六畳間に来た。
「お、すまぬ」
「茶を飲むふりをして、ごまかすでない。昨日、坂野清兵衛が現れたとき、おまえは怪訝な表情をした。あれが今のあれか」
「そんなところよ」
と、ゆっくり起きあがった。茶を啜って、続ける。
「なれど、わしの見間違いやもしれぬ。おぬしは気づかなんだか」
「謎かけのようなそれも懐かしいわい。残念ながら、わしはなにも見ておらぬ。いや、見ていたのやもしれぬが、気づかなんだわ」
「いずれにしても、美木藩は、新政府と旧幕府同様、問題が山積しておるようじゃ。

美濃守友春様は、まだお若い。普通であれば前藩主が、大殿として指南するところだが、すでに父君はみまかられておる。御用人の坂野清兵衛が相談役なのじゃろうが」

「ほう。そこで言葉を止めたか」

一角はにやりとしたが、それ以上は言わなかった。数之進も敢えて口にしない。かまわず話を進めた。

「下屋敷の勝利が、なんぞつかんだやもしれぬ。家老派の動きを、早く知りたいものじゃ。われらが藩邸を出た後に、中立派の二人は下屋敷に逃げこんだやもしれぬ」

「なるほど。昨日の騒ぎは家老派の藩士が、餌をぶらさげて、あの二人を取りこもうとしたわけか。それはともかく」

と、一角は目をあげた。

「竜平のことはよいのか。おまえはまったく口にせぬが、わしに遠慮しておるのであれば、気遣いは無用ぞ」

「おぬしとわしの間柄ではないか。気遣いなど、せぬわ」

苦笑いして、答えた。

「百五両の借財、少しずつでも返さねばならぬ。竜平は生き返って、そのうち現れるであろうさ。勝利が遊女屋の柱に、置き土産を残しておいたからの。死んだふりをして逃げるやもしれぬが、幽霊のままではいられぬわ」

「ふぅむ、勝利はわかったような顔をしていたが、どうやら孫の方がおまえの心を読むのに長けておるようじゃ」

「勝利は、わしの心を読んだわけではない。竜平の父親、わしの倅の作之進が言うた言葉から察したのよ」

「はて。なんと言うていたか」

一角の疑問を、即座に解決する。

「『ああいう阿呆は一度、死んだ方がよい。放っておけと仰せになりまして』じゃ」

「よう憶えておるな。数翁のおつむは、いまだ衰えず。たいしたものよ。わしは日々、物忘れがひどうなるが」

「コツがある。書くことじゃ。それによって、記憶されるのじゃが、はて？」

話しているうちに、向かいの家に目が行っていた。百合のために借りた家の戸が閉まっている。まだ暑いため、数之進たちが借りた家の戸も、借り手が決まっていない他の四軒の家も戸を開け放している。

「なにゆえ、向かいの家の戸は閉まっているのか。そういえば彦右衛門さんが、呼びかけていたな」

いきなり話がとんだが、一角は慣れている。

「なに？」

怪訝そうに眉を寄せたものの、すぐに不敵な笑みを滲ませた。

「ますます昔に戻るようじゃ。わしは向かいの家の戸なぞ、気にしておらなんだが、さようか。閉まっているのが気になるか。そうであるならば、彦右衛門に」

立ちあがりかけたとき、戸口で呼びかけがひびいた。

「あの、生田様」

「ほんに父親そっくりじゃの。彦右衛門が呼びかけるときは、厄介事が起きたときじゃ。先程、話に出た野州の百姓とやらが来ておるのか」

それぐらいは憶えておる。とばかりに、一角が胸を反らした。盟友のそんな姿にも、懐かしさを覚える。

「はい」

彦右衛門の答えに、数之進はまた苦笑いした。

「一角の読みどおりというのが、いささかつまらなくもない。なれど、相談に乗る

ぐらいはできよう」
「それでは」
顔を輝かせた彦右衛門を見て、一角が辛辣な言葉を吐いた。
「しらじらしい顔をするでない、はじめから引き受けてくれると思うていたのであろうが。芝居がすぎると鼻につくぞ」
「一角」
窘めて、頷き返した。
「会おう」
「ありがとうございます」
深々と頭をさげたが、
「あの」
三度、物言いたげな目を向けた。
「そのもったいぶった様子も父親譲りじゃ」
断じて、一角は告げた。
「さっさと案内せぬか。数之進は昔どおりじゃが、わしは昔以上に気が短くなった。すぐに来ないのであれば……」

「いえ、参ります。すぐに参ります」
取って返した彦右衛門は、ほどなく恰幅のいい男を連れて来た。老けて見えるが三十七、八ではないだろうか。彦右衛門は百姓と言っていたが、数之進には、小作人を使う庄屋のように見えた。

二

「野州の足利村で庄屋を務めております。弥助と申します」
弥助の挨拶で、推測が正しかったことがわかる。満更、捨てたものではないと、胸を反らした姿に、一角が気づいた。
〝同じような真似をしておるわ〟
そんな笑いに空咳を返して、数之進は訊いた。
「村の様子はどうじゃ。あちこちで戦が起こり、野州や信州、武州といった場所では、田畑が荒らされていると聞いた。豪農の家には、あたりまえのように金子を要求する輩も多いとか。生きた心地がすまい」
「仰せのとおりにございます。村では金を出し合いまして、腕のたつ浪人を用心棒

として雇いました。今も見廻りを続けております。いつまた戦いになるかわかりませんので」

「難儀なことよ」

心からの言葉が出た。表情にも表れたのか、

「お侍様から、かようなお言葉をいただくとは」

弥助は感じ入ったように頭をさげる。

「お目にかかりまして、『なるほど』と得心いたしました。この方こそが、あのお助け侍に違いないと」

「なに？」

数之進の驚きを、一角が受ける。

「もしや、昔の噂話を聞いておったのか」

「はい。父親が江戸に参りました折、噂を耳にしたそうにございます」

世の中には奇特な侍がいるものよ。わずかばかりの礼金で、民百姓の相談に乗っている由。なにかあったときには、わしも訪ねてみるとしよう。

「と、申しておりました」

「なんと」

驚きは、熱いうねりとなって、数之進を包みこむ。無私の心と千両智恵、それしかなかったが、それだけで充分だった。あのとき蒔かれた種は、風に乗って各地に飛び、その孫子へと語り継がれた。

「すまぬ」

滲んだ涙を、手拭いで拭った。

「年をとると涙もろくなっていかん。それで」

あらためて促した。

「相談事とは、いかようなものじゃ？」

「はい。今までは米や麦、野菜といったものを作って参りましたが、流れは刻々と変わっております。この先、なにを中心に作っていけばよいでしょうか。新政府に変わっても、今までどおりで宜しいでしょうか」

弥助の問いかけは、数之進にあらたな涙と確信をもたらした。

（民は己を失っておらぬ。大丈夫じゃ。この国の明日は明るい）

胸が詰まってしまい、言葉が出ない。

「生田様」

弥助もまた目をうるませていた。それを見ているうちに、じんときたのだろう、

一角は天井を見あげて、しきりに目をしばたたかせている。泣いてたまるか、と、意地を張っていた。

「なさけない姿ばかり見られてしもうたな」

数之進の言葉に、弥助は素直な答えを返した。

「いえ。真剣に考えてくださるお侍様が、まだおられると思い、てまえも胸が熱くなりました」

「相談についてじゃが、米は今までどおり、作るのがよかろうな。野菜なども変わりなく作るのがよいと思うがの。ひとつ、加えてほしい作物がある」

「なんでございましょうか」

弥助は身を乗り出した。自分の田畑ばかりでなく、小作人や他の百姓の明日まで考えている。両の眸は真剣そのものだった。

「小麦よ」

数之進は答えた。

「小麦でございますか。饂飩や天麩羅をあげるときの粉になりますが」

弥助の顔には、不安が浮かんでいる。ありきたりな、変わり映えのしない話だと思ったのかもしれない。小麦の作付けを増やして、どうしろと言うのか。はたして、

売れるのか。饂飩屋が増えるとでも考えているのか。

視線の問いかけに、力強く応えた。

「パンじゃ。話には聞いたことがあるやもしれぬが、外国では、ほとんど毎食、パンを食べておる。我が国では、今のところ、非常時のパンぐらいしかないがの」

「水戸藩で『兵糧丸』と呼ばれるあれか」

一角の呟きを受ける。

「さよう。非常時のパンじゃ。真ん中に孔の空いたものでな。孔に紐を通して、腰にぶらさげる。まあ、今はこの程度の広がり方だが、やがて、パンを主食として味わう時がくるのではないか。わしはかように考えておるのじゃ」

「慥かにパンの話は耳にしております。なれど、日本ではまだ米が主食にございます。小麦を作っても売れますかどうか」

弥助は気乗りしない様子だった。危ないものには手を出さない。確実に売れる品を作る。あたりまえのことだが、現在、それを実践している者がどれほどいるか。風評や噂に流されて、みな進むべき道を見失っている。

「販路はある」

数之進の断言を、一角が後押しする。

「横浜じゃ、弥助。英吉利、亜米利加、阿蘭陀と、さまざまな国の異人がおる。パンの種類は違うても、使うのは小麦粉よ」
「ああ、なるほど。横浜でございますか。ですが」
反論を手で遮った。
「案ずることはない。わしの知り合いに紹介できる。良質の小麦粉、よいか、ここが大事じゃ。質の良い小麦粉であれば、右から左へ飛ぶように売れるわ」
「まことでございますか」
ここでようやく弥助の顔に、希望の光が浮かびあがった。
「数之進は偽りを言わぬ、いや、言えぬ。安心して、まかせるがよい。実際の話、小麦粉は足らぬのじゃ。戦続きで作物が思うように採れぬ。こういうときこそが好機よ。他がもたもたしている隙に、がっちり販路をつかむ。これが肝要じゃ」
一角の言葉を聞き、「なるほど」と弥助は何度も頷いた。
「生田様のお話を承りまして、心が定まりました。小麦の作付けを増やすよう、村の長たちに話します」
「朗報が届くのを待っておる。今、横浜で売れるのは、仏蘭西パンでの。わしは固くて、あまり旨いとは思わぬが」

「入れ歯ではの、仏蘭西パンは味わえぬわ。わしは、きらいではない。噛みしめると小麦の甘みが感じられて、なかなかいけるぞ」

二人のやりとりに、弥助が口をはさんだ。

「つまり、横浜にいるのは、仏蘭西の異人が多いということでございますか」

「お。いいところに気づいたではないか。そのとおりよ。英吉利人もいるのだが、数としては仏蘭西人が多い。これは政がからんでおるのじゃ」

数之進は簡潔に説明する。品川東禅寺のイギリス公使館焼打事件や、生麦事件などにより、幕府はイギリス政府から最後通牒を突きつけられた。そのため、フランスに急接近したという事情がある。

「英吉利には、英吉利のパンがあるのでございますね」

弥助が確認するような問いかけを発した。

「さよう。さまざまな種類がある」

「種類は多くても、使うのは小麦を挽いた粉」

「いかにも小麦粉じゃ」

「一度、わたしも横浜に足を運んでみようと思います。案内していただけますか」

「むろんじゃ。わしと一角が、案内役を務める。そうそう、村の話に戻すがな。つ

いでに、もうひとつ、言うておきたいことがあるのじゃ」
「なんなりと仰せください」
「農繁期に、旅芝居の一座を招き、村人を慰労してはくれぬか」
「は？」
弥助は眉を寄せて、問い返した。
「農閑期ではなく、農繁期にでございますか」
「さよう。忙しいときほど、人は息抜きをしたいと思うもの。娯楽を求めるのじゃ。むろん農閑期に招くのも悪くないがな。どちらがいいかと問われれば、みな農繁期と答えるであろう。ためしに訊いてみるがよい」
「はい。村の者たちの話を聞いてみます」
まずは意見を聞いてからにする。その答えにもまた、数之進は好感を持った。鵜呑みにしないところがいい。どんな識者とて間違いを犯す。疑ってかかるのは、悪いことではないと思っていた。
横浜の話が出て、興味をそそられたに違いない。
「牛鍋屋の話も耳にいたしますが、やはり、異人はパンと同じぐらい頻繁に肉を食べるのでございますか」

弥助が訊いた。
「確かによう食べるであろうな。弥助さんは、牛鍋を食べたことは……」
「ございません」
慌て気味に遮る。とんでもないという顔をしていた。江戸に住む者はだいぶ馴染んでいるだろうが、野州の民にとっては、まだまだ遠い話かもしれなかった。
「じきに、おまえさんも、『ああ、明日も食べたい』と思うようになるわい」
一角が揶揄するように言った。
「そんなに旨いのですか」
と、弥助は、二人を交互に見やる。
「好きずきだろうが、一角は好物じゃ。わしはちとあの生臭さがな。鼻についてしまい、今ひとつ好きになれぬ。肉で旨いのは、鴨よ。杉焼にしてよし、鴨鍋にしてなおよし。明日も食べたいと思うのは鴨じゃ」
「失礼いたします」
戸口で彦右衛門の声がひびいた。戸は開けたままだったが、土間には入らずに愛想笑いを浮かべている。一角が立ちあがって、土間に降りた。
「なんじゃ。話の邪魔をするでない」

「いえ、あの」

彦右衛門は肩越しに後ろを見た。向かいの家の戸が開いている。数之進からは見えなかったが、

「華絵殿ではないか。薫子まで、なにゆえ、かようなところに」

一角が驚きの声をあげた。

「なに？」

数之進も立ちあがろうとしたとたん、腰に鈍い痛みが走った。呻きながらその場にうずくまる。

「生田様」

支えの手を伸ばした弥助に摑まって、座り直した。苦痛をこらえる目に映ったのは、鳥海華絵と、杉崎薫子。華絵は今は亡き二女――冨美の孫娘であり、薫子は今は亡き三女――三紗の孫娘である。娘たちは、口もとに造り笑いを浮かべていた。

「おひさしゅうございます」

「お元気そうでなにより、とは、いかないようでございますね」

薫子の皮肉めいた挨拶が、いやでも三紗を思い出させる。彦右衛門がこそこそと、逃げるように姿を消した。以前であれば、いやな胸騒ぎが湧いたものを――。

「苦労性と貧乏性の業も、年老いて鈍うなったか」
数之進の呟きを聞き、弥助が腰をあげる。
「それでは、わたしは失礼いたします」
さりげなく礼金を置いて行った。きらりと二人の目が光ったのを見のがさない。
今頃になって、胸のあたりがざわざわし始めていた。
(遅い)
心の中で叱咤する。だれに対してでもない、己に対する叱責だった。

三

「東京は変わりましたね」
華絵の言葉を、薫子が継いだ。
「本当に。かつての賑わいが嘘のような光景です。わたくしたちが離れていたのは、かれこれ、そう、わずか一年ほどだというのに……面影を探すのに苦労いたしました」
二人とも同い年の二十歳。江戸が危ないとなって、昨年の夏頃、二人は両親とと

もに避難していた。冨美が嫁いだ鳥海家の本家は、静岡に封じられた徳川家に従い、静岡の地に移っている。

そして、三紗が嫁いだ杉崎家は、侍を捨てて商人になり、料理屋、総菜屋、仕出し屋などなど、三紗がその才をあますところなく発揮したお陰で、ひと財産築いていた。しかし、附け火ですべてを失っている。

「本家の叔父上様は、いかがなされておる」

数之進がまず気になったのは、本家の後継者、鳥海左門の今だった。

冨美の長子として生まれた嫡男は、小さな御家争いを経た後、父の名とともに家督を継いでいる。江戸を去る時に逢って以来、文もかわしていなかった。華絵は左門にとっては姉の娘——姪なのだが、生家は禄高の低い貧乏旗本。にもかかわらず気位だけは高くて、降るようにあった縁談を断り続けた結果、天下争乱となってしまい、嫁き遅れていた。

「本家のことなど存じませぬ」

話し方は、おっとりとして亡き二女を髣髴とさせた。性格もどこか抜けているところがあって、よく似ていた。しかし、冨美が得意とした縫い物は、ごく普通に縫えるといった程度の腕前ゆえ、とても生計をたてることはできないだろう。

「さようか」

と、次は薫子に目を転じる。

「二親は、いずこにおるのじゃ。そなたひとり、いや、華絵殿がおるゆえ、ひとりではないが、いずれにしても江戸は危ない場所よ。かような地に若い女子を行かせるとは言語道断。説教してくれるわ」

「おじい様。江戸ではなくて、東京です」

しっかりと言い直す顔が、これまた三紗に瓜二つ。人目を引く美人であるのは、だれもが認めるに違いない。三紗は自分にそっくりの薫子を、文字通り、溺愛した。商家の娘であるにもかかわらず、武家女の嗜みを伝え、いずれは将軍の側室にという、無謀とも言うべき野望をいだいていた。そのせいで薫子は、華絵以上に権高になってしまい、これまた嫁き遅れている。

「わしにとっては、まだこの地は江戸よ」

言い返して、答えを促した。

「それで、そなたの父御と母御は？」

「父上はお酒を飲むことしかいたしません。目覚めるとすぐに『酒』とわめき散らしては、あおるようにお酒を飲むのです。泥酔するしか、能がありませぬ。以前の

父上は死にましてございます」

手厳しい言葉が返る。薫子の父は、商人としてはさして能力のない男だったが、三紗が遺した見世や財産を、減らさないことぐらいはできた。が、附け火でほとんど無一文になってしまい、生きる望みを失ったのだろう。

（侍が進む道と同じように、人が進む道も、およそ三つに分かれる）

数之進は思った。ひとつは、自暴自棄になり、堕ちていく者。ひとつは、泣くなく運命を受け入れて、どうにかこうにか生計をたてる者。ひとつは、他者のために立ちあがり、己の道をもつかむ者。

「それで？」

三度、数之進は促した。いやな胸騒ぎが湧いている。苦労性と貧乏性の業が、激しく疼き始めていた。

「父御と母御は、どこにおるのじゃ」

「横浜です」

横から華絵が口を出した。ぴしゃりと薫子が手を叩く。

「痛い」

「叩いたのですから、あたりまえです」

つんと顎をあげた横顔が、薄気味悪いほど三紗に似ていた。数之進は悪寒を覚えるとともに、いやな予感がいっそう強くなるのを感じている。

「もしや、華絵殿の父御と母御も」

「はい。横浜におります」

答えた華絵の手に、ふたたび薫子が平手をお見舞いした。数之進と一角は、思わず顔を見合わせている。なにかが起きて、二人の両親は、横浜の生田家を頼らざるをえない状態になった。

ごくりと唾を呑み、訊いた。

「なにがあったのじゃ」

不吉な胸騒ぎが高まってくる、額には冷や汗が滲んでいる。

永遠にも思える沈黙の後、

「箱根の温泉に参りました」

薫子が言った。問いかけに答えたとは思えないが、「待てまて」と数之進は己を制した。順序だてて話を聞くのが肝要。

「なるほど。避難しがてら、ということじゃな」

「贅沢な」

ぼそっと言った一角に、目顔でしばしの沈黙を促した。ちらりと角翁を睨みつけた薫子は、顎をあげて答えた。

「さようでございます」

「一年もの間、箱根にいたのか」

「いえ、ずっと箱根に逗留していたわけではありませぬ。楽しみながら温泉地を、転々といたしておりました」

「それで金子を使いはたしたのです」

華絵が早口で言った。

「よけいなことを」

またもや薫子が手を叩く。

「痛いと言うたではありませんか。だいたい薫子さんのお父上が、いい気になってお酒を飲むからです。あっという間に手持ちのお金が底をついたではありませんか」

「父上のせいばかりではありません。華絵様のお母上だって、あちらにお土産、こちらにお土産と、送っていたではないですか。本当に見栄っ張りなんですもの。お金を出すのはわたくしの家。あれで杉崎家の金庫は空になりました」

「まあ、母上が見栄っ張りですって？」
「ええ。ついでに申しますと、華絵様も負けず劣らずの見栄っ張り。貧乏旗本のくせに、着物と帯は大丸、簪は浅草の〈銀花堂〉、茶器は〈ほ里つ〉などと、相応しからぬ暮らしをなさっていたではありませんか」
「び、貧乏旗本ではありませぬ。ご公儀においては、十人目付の一家を務めた鳥海家の分家でございますよ」
「ですが、貧乏でした。お父上は、うちにいつも借金しに来たではありませんか」
「薫子さん、いつもではありませんことよ。たまに……」
「やめぬか」
力無く、数之進は制した。この二人は両親と一緒に、横浜の家へ行っている。そのうえでここに来た。数之進の倅——作之進と誠之進の思惑を読み取っている。訊きたくないが、訊かなければならない。励ますように、一角が背中を叩いた。
「借財はどれほどじゃ」
重い問いかけを、薫子は涼しい顔でかわそうとする。
「たいした額ではありません」
「いくらじゃ」

「ですから……」
「いくらじゃ、と訊いておる」
つい声が大きくなった。
「……」
薫子は、うつむいて告げたが、小さすぎて聞きとれない。
「ああ？」
わざとらしく耳を近づけた。
「二百両ほど、です」
「に……」
数之進は座りくらみを覚えて、後ろに倒れかかる。心得たもの、盟友が素早く支えてくれた。
「しっかりせい」
「い、一角。竜平の分と併せて」
右手の指を三本、左手は広げて、五を示した。
「三百五両か」
一角は唸るように言った。奇しくもそれは、姉の冨美と三紗が作った借財と同じ

金額だった。時を超えて、甦る悪夢。

「戦火の中、それを縫うようにして、療治か。さぞ楽しかったであろうな」

精一杯の皮肉だったが、

「はい。父上は、『人が死ぬだの、生きるだのと言うているときにこそ遊ぶ。これぞ温泉の醍醐味よ』と仰せになりまして」

薫子が胸を張って答えた。流石にまずいと思ったのだろう、華絵が袖を引っ張るが、時すでに遅し、一角が仁王立ちになっていた。

「たわけ！」

恫喝して、続けた。

「今、我が国でなにが起きているのか、知らぬわけではあるまい。かような時に遊びほうけるとは、呆れてものが言えぬ。ここにそなたの父御がおれば、斬り捨てたものを、ええい、口惜しいことじゃ」

「ですが、わたくしたちは付いて行っただけです」

「華絵様の仰るとおりです。悪いのは、わたくしたちではありません」

ねえ、と、頷き合う二人を見て、また座りくらみに襲われかけた。確かに一理あるが、子として止めることもできたはず。言い訳にしか聞こえない。

（二十歳にもなってこれでは、先が思いやられるの）

姉たちの孫娘を前にして、深い吐息が出た。

「作之進と誠之進は、なんと言うておるのじゃ」

答えはわかっていたが、念のために確かめる。

「おじい様におまかせする、と。ですが、借財はひとまとめにした方がよいと思うのです。あちこちに散らばっている借財を、ひとつにして、そこに返していく。それがよいと存じます」

薫子の言う『そこ』が、横浜の生田家であるのは間違いない。しかし、二百両をぽんと揃えて出すのは、生田家とて楽ではなかった。

「返す策はあるのか」

虚しさを覚えつつ、問いかける。

「わたくしたちが返します」

華絵の立派な答えに、横から一角が口をはさんだ。

「吉原にでも身を売るか。あそこは新政府の者が使うておるゆえ、かろうじて、廓の体裁を保っておるようじゃ。深川や本所の岡場所は、どこも見世仕舞い寸前だがの。華絵と薫子であれば、さよう、ひとり、五十両程度にはなるやもしれぬ」

辛辣な物言いに、二人は目を剝いた。
「ひどいことを」
「これだから、角翁はいやなのです。おじい様が、なぜ親しくなさるのか、わたくしにはよくわかりませぬ」
「薫子。わしの友であり、親戚である一角を、悪く言うのは許さぬ」
ぴしゃりと叱りつけて、さらに言った。
「して、借財を返す策とはなんじゃ。偉そうな口を利くからには、よい考えがあるのじゃろう。教えてくれぬか」
「母上は」
華絵の声が急に小さくなる。
「おじい様に伺えと」
窺うような目を向けていた。薫子はといえば、退屈そうに欠伸を噛み殺している。数之進が睨みつけると、首をすくめて、俯いた。
働く意思など、まったく感じられない。
(さて、どうしたものか)
顔を見合わせたとき、

「おじい様。百合です」
百合の呼びかけが戸口でひびいた。相変わらず戸は開け放ったままなのだが、覗くのを遠慮していた。
「かまわぬ。入れ」
数之進は応える。

四

「百合ですって」
「いやだわ」
華絵と薫子は、不機嫌さをあらわにする。土間に入って来た百合もまた、六畳間の二人に複雑な眼差しを投げたが、
「華絵様、薫子様。ご無沙汰いたしております」
平静さを装い、深々と辞儀をした。百合の方が年下であることや、亡き大伯母たちの孫となれば、敬意を払わねばならぬと思っているのだろう。
が、二人は嫌悪感を隠そうとはしなかった。

「なにゆえ、ここに百合がいるのですか」
華絵の言葉を、薫子が継いだ。
「来るのではありませんでした」
「参りましょう、薫子さん」
「ええ。わたくしたちは、向かいの粗末な家で待つことにいたしましょう」
「ほんに。はじめは牛小屋かと思いました」
「牛小屋の方が、ましかもしれませぬ」
勝手なことを言いながら、二人は家をあとにする。向かいの家に入るまで、百合は頭をさげたまま見送っていた。
「まことだったのでございますね」
話しながら、座敷にあがって来る。
「こちらに参ります直前、お二人のお父上より、横浜の家に文が届いたのでございます。どうやら、わたしが家を出た後、おいでになられたようですね。父上は文に目をとおした後、『いかがしたものか』と、おじい様そっくりの吐息をついておられましたが」
微笑んで座ろうとしたが、すぐにまた立ちあがる。

「お茶を淹れ替えます」
「わしにまかせろ。茶の淹れ方は、まだまだじゃ」
一角が言い、土間に降りた。
「申し訳ありませぬ」
百合は詫びて、数之進の向かいに腰を降ろした。出て行った二人とは、なんと違うことか。思わず吐息をつきそうになったが、それを待っているような孫娘の視線に気づき、こらえた。
「見とうございましたのに」
くすっと百合が笑った。その顔が亡き世津を思い出させた。
「お見通しか」
「いえ、たまたまでございます。父上の話をした後でしたので」
謙遜する様子も非の打ち所がなかった。
「そなたの半分でいい。あの二人に受け継がれておればのう」
「おじい様。二人に半分ずつ取られましたら、わたしはわたしでなくなってしまいます。お二人はあれで宜しいのではないかと存じます」
「そなたが出来過ぎておるのじゃ。ゆえに、兄者の竜平や、従姉たちの凡人ぶりが

目立ってしまうのよ」

一角が茶を運んで来た。数之進の頭の中では、三百五両の小判が、喧嘩するようにぶつかり合っている。が、黄金色の悩みは、いったん横に置いた。

「勝利から連絡が来たか」

茶を啜って、切り出した。

「はい。文を預かって参りました」

百合は懐から文を取り出して、数之進に渡した。横から一角が覗きこむ。老翁が読みやすいよう、勝利は字をかなり大きく書いていた。

「なになに『下屋敷の御門前では騒ぎが出来し候。居合わせたそれがしが、美木藩に加勢し申した。相手を尾行けるつもりだったのでござるが、腕を買われて、下屋敷にご奉公することに相成った次第』か」

「なんじゃ。勝利は、家老派にご奉公したのか」

「そうらしいの。却って都合がよいではないか。これで下屋敷の様子がよくわかる。できれば、もうひとり、連絡役がほしいところじゃが」

微妙な含みを察したのだろう、

「兄上でございますか」

百合が先んじて、言った。
「あてにできぬと思います。麻布の下屋敷に現れて、勝利様から幾ばくかの金子を借りて行った由。文に記すのは、躊躇われたのでしょう。勝利様はわたしにそっと告げて、下屋敷に戻られました」
「ほう、竜平め。さっそく化けて出たか」
数之進の呟きを、一角が受ける。
「察するに、勝利が小柄でも落としていったか」
遊女屋の座敷を出る際、気づかれぬよう、勝利は小柄を柱に刺して行った。竜平はそれを隠し持ち、簀巻きにされて大川に投げこまれると、短刀で縄を解いた。
父親が「ああいう阿呆は一度、死んだ方がよい。放っておけ」と言ったのは、勝利の温情を読み取ったうえのことに違いない。表向きは距離を取っているように見えるが、その実、二人はけっこう仲がよいのだった。
「それにしても、竜平は、われらの動きをよう存じよるな」
数之進は驚きを禁じえない。
「そういえば、ここ数日、妙な気配が在ったわ」
思い出すような目をした一角に、すかさず言い返した。

「そういうことにしておこう」
気づかなかったとは口にできまいな。年はとりたくないものよ。思い出すふりをして、己を慰めるのはよせ。
敢えて言葉にしなかったが、盟友は正確に読み取っている。
「いや、確かに気配が在った」
むきになっていたが、数之進は相手にしなかった。
「百合は屋敷に早う戻れ。怪しまれてはならぬ。明日の早朝、われらも戻るゆえ」
「はい。おじい様、くれぐれも腰をお大事になされますよう。角翁も無理をなされませぬように」
何度も辞儀をして、百合は家を出て行った。すぐに現実を直視しなければならなかったが、数之進は茶を啜っている。
「よりにもよって、三百五両とはな」
一角が代弁するように言った。
「して、いかがするのじゃ。権高な『ひね君』たちを、吉原へ売りに参るか」
「懐かしいの」
姫君ならぬ『ひね君』は、かつては二女の冨美と、三女の三紗に向けられた言葉。

それがそのままあてはまるような流れになっていた。

「竜平の分はともかくも、二百両は横浜の家に肩代わりしてもらうしかあるまい。借用書を作らせて、少しずつ返させるようにしよう。江戸では当分の間、大きな商いはできぬ。小商いをやらせて、コツコツ返させるしかなかろうな」

「甘い。我儘な『ひね君』たちは従わぬわ」

一角は断言した。

「おまえの姉君たちは、それぞれ手に職を持っていた。なれど、あの二人は見事になにもできぬ。それでも金だけは使いたいと思うておるに違いない。さしずめ『使足りぬ姫』じゃの」

「上手い」

数之進は、思わず膝を打った。その昔、一角は着道楽の冨美を『着足りぬ姫』、食道楽の三紗を『食足りぬ姫』と称したが、姉たち以上に金食い虫の二人には、いかにも似合いの表現といえた。

「世辞を言うでない」

そう言いながら満更でもない顔をしている。

「機嫌がようなったついでに、どれ、鍼を打ってもらおうか」

と、数之進はうつ伏せになった。
「わしもあちこち痛むわい」
友の口から文句が出る。
「あとで打ってやるゆえ、ちとこらえろ」
「打ちつ打たれつの鍼三昧(ざんまい)といくか」
「あの、生田様」
彦右衛門が、また姿を見せた。先程の百合とは違い、図々(ずうずう)しく家を覗きこんでいる。そんなところにも育ちの違いが出ていた。
「まさか、また相談したいという者が来たのではあるまいな」
一角が機先を制した。
「つい今し方、弥助が帰ったばかりじゃ。よもや七十九の年寄りに、続けざまの相談事は持ってくるまい。いかがじゃ、彦右衛門」
「厭味(いやみ)を言うでない、一角。なにかあったのか」
割って入った数之進に、彦右衛門は腰を折るようにして、告げた。
「生田様に、是非、伺いたき儀があると申しております。よくわからないのですが、税についてのことのようで」

「お願いいたします」
男の大声が聞こえた。彦右衛門を押しのけるようにして、土間に入って来る。まずは丁重に一礼した。
「てまえは浅草の仲見世で簪屋〈十六夜堂〉を営んでおります。お助け侍の噂話を耳にいたしまして、参りました。こちらに伺えばわかるのではないかと」
年は二十七、八。先刻の弥助よりも若い分、苦悩が正直に浮かびあがっていた。眉間に刻まれた深い自分の皺を、数之進はつい手で確かめている。皺の深さの度合いがよく似ていた。
「われらは……」
文句の嵐となりそうだった一角を遮る。
「あがるがよい」
「数之進」
不満げな盟友の肩を叩いて、宥めた。
「鍼はあとでよい。請われるうちが花ではないか。茶を頼む。おぬしの淹れる茶は、他では味わえぬからの」
「宜しいので？」

彦右衛門の問いかけに、頷き返した。
「あがるがよい」

五

「失礼いたします」
座敷にあがる〈十六夜堂〉の主を、向かいの家から薫子が見つめていた。戸を細く開けて、隙間から覗いている。
（ああいう姿も姉様のようじゃ）
数之進は苦笑して、主に視線を戻した。
「して、なにを訊ねたいのじゃ」
「はい。堂税のことにござります。屋号でおわかりのように、てまえの見世ではご公儀に堂税を支払って参りました。ですが、徳川様が静岡に移られまして以来、どこに税を納めたらよいのか、わかりません。いかがしたものかと思いまして、ご相談に参りました次第です」
「ふうむ、堂税か」

徳川時代、堂号を商家で許されることは、めったになかった。〈十六夜堂〉はその数少ない商家のひとつであり、ずっと寺社奉行に堂税を納め続けてきたのである。ところが、いまや徳川家は静岡に封じられた家。江戸に取り残された民や百姓は、侍同様、右往左往していた。

「その答えは、ちと待ってほしい。伝手があるゆえ、確かめてみる。わかり次第、知らせるということでよいか」

「もちろんでございます」

答えたものの、主は腰をあげようとはしない。茶を運んで来た一角が、すかさず毒を吐いた。

「二つの相談事には、二回分の礼金をもらう決まりになっておる。お助け侍の相談料は、決して安う……」

「やめぬか」

止めて、促した。

「他にもなにかあるのか」

「はい。商いのことにござります。浅草も人が減りまして、簪のような贅沢品は売れません。大家の〈にしき屋〉さんに聞いた話では、錦絵は横浜の異人に好評だと

か。売れ行きは上々と聞きまして」

意味ありげに語尾を濁した。不景気の嵐が吹き荒れている中、売れ行きをあげている見世は目立つのかもしれない。彦右衛門が話を広めるまでもなく、勝手に広まっているのかもしれなかった。

「商いがうまくいかなくなったとき、できることは、大きく分けて二つあると、わしは考えておる」

数之進は答えた。

「ひとつは、徳川様も実行なされた人減らし策よ。気の毒じゃが、見世を続けていくためには致し方なきこと。二つめは、初心にかえることじゃ。〈十六夜堂〉さんは老舗ゆえ、今までは客が訪れてくれた。しかし、今はなかなか見世に客が来ない。そうであるならば、どうするのがよかろうな」

問いかけに、主はしばし考えこんだ。初心にかえる、見世に客が来ないならば、どうするか。初歩中の初歩だったが、自信がなかったのだろう、

「こちらから出向く、のですか？」

主はおずおずと問い返した。

「さよう」

数之進は破顔する。

「おそらく〈十六夜堂〉さんの初代は、背負小間(しょいこま)をしていたはずじゃ。箱に鼈甲(べっこう)の簪や櫛(くし)を入れてそれを背負い、大名家の下屋敷や今戸あたりの寮、さらに花柳界(かりゅうかい)といった場所へ商いに行ったはず。また同じことをやればよいではないか」

「横浜よ」

一角が先刻と同じように後押しした。

「我が友は先見の明があっての。かなり早いうちに、横浜に旅籠(はたご)を開いた。次男にそれを商いさせつつ、一昨年であったか、二軒目を開いたのじゃ。今は長男が商っているがな。二軒の旅籠には、深川の芸者衆や幇間(ほうかん)が、日毎夜毎(ひごとよごと)、姿を見せる」

「江戸から消えた芸者衆たちは、横浜に移っていたのですか」

若い主(あるじ)は、みずから未熟さを露呈する。少し考えればわかりそうなものだが、わからないからこそ、お助け侍の出番があるともいえた。

「もしや、芸者衆たちは、横浜に住んでいるのですか」

続けて問いかける。

「あくまでも仮住まいであろうがな。ある者は横浜に住み、ある者は深川から通うて来る。まあ、住んだ方が楽なのはあきらかじゃ。お座敷がかかる度、深川まで使

いを出していては間に合わぬゆえ」
「その点、主は楽ではないか。簪を売るのは、お座敷がかかる云々など関わりがない。毎日、横浜に来て『いかがでしょうか』と売り歩けばよいだけのことよ」
盟友の言葉を受け、数之進は、いささか厳しい眼差しを向けた。
「もっとも、それができるかどうかは、主殿次第じゃが」
「できます、いえ、やらねば生き残れません。江戸に人が戻るのを待っている間に、見世は消えてしまいます」
不意に主は平伏した。
「どうかお力添えいただきたく存じます。横浜には知己がおりません。生田様にお縋りするしかないのです」
「では、相談料として、一分、いただこうか」
一角が差し出した手を、ぴしゃりと叩いて、告げた。
「この老いぼれでよければ、いつでも力添えしよう。倅に紹介状を書くゆえ、持って行くがよい」
「ありがとうございます。あの実は」
顔をあげた主に、一角がすかさず言った。

「なんじゃ。まだあるのか。では割増料金を……」
ふたたび差し出した手を叩いた。
「やめぬか」
「なれど、おまえとて借財を抱えておるではないか。人助けには反対せぬが、もらうものはもらわぬとな。姪や甥、はては阿呆な孫の借財は、さてさて、いくらになるか。ご破算で願いましては、三百と五両なり。併せて三百五両の小判が早急に必要でござる、と」
「三百五両！」
大声をあげた主に苦笑いを向ける。
「傘寿を超えて、いっそう励みができた」
「負け惜しみを言うでない。それからわれらは永遠に七十九よ、傘寿にはならぬ。とはいえ、年には勝てぬな。あたたた、腰が痛み始めた。すまぬが、数之進。鍼を頼む」
一角が数之進を慮って、偽りの芝居を演じた。いつまでも腰をあげようとしない主に焦れたのだろう。が、それでも主は物言いたげな眼差しを向けていた。
「さらなる難問があるのか」

と、一角。なかば呆れ顔だった。
「難問と言えば難問かもしれません。実は近くの武家屋敷に、鬼火（おにび）が現れるという噂が出ておりまして」
「幽霊退治はできぬ」
「数之進は、なにより霊の類（たぐい）が苦手でな。これが出ると聞くや、厠（かわや）にも行けぬようになる有様よ」
「ええい、よけいな話をするでない。なんにしても、幽霊はごめんじゃ」
「おもしろそう」
いつの間にか、薫子が土間の上がり框から身を乗り出していた。ずっと盗み聞いていたことを隠そうともしない。
「わたくしが引き受けますわ、幽霊退治。その代わりと言ってはなんですが、退治した暁（あかつき）には、五両、いただきます」
広げられた右手を、今度は一角が叩いた。
「みっともない真似をするな」
「あら、少しでも借財の足しになればと思いましたのに」
「なるほど。かように思うのであれば、〈十六夜堂〉さんの店番をするがよい。い

かがであろうな。無給でかまわぬ。留守番にこの娘とあの娘を」
上がり框の薫子と、戸口に出て来た華絵を、数之進は顎で指した。
「使うてやってはくれぬか」
「てまえは異存ございませんが……給金を払えません。それでも宜しいのですか」
「いかにも。一角、駕籠を頼む」
「承知」
とりあえずは浅草に、華絵と薫子を同道することにした。二人の老翁は横浜を拠点にしていたため、ここしばらく浅草や日本橋からは遠離っている。
痛む腰をなだめながらの道行きとなった。

六

かつて浅草の奥山は、江戸一番の賑やかな所だった。
さまざまな見世物小屋や小料理屋、居酒屋などが軒を連ね、屋台も昼夜を問わず、店開きしていた。参拝客はむろんのこと、単に浅草見物で訪れる客も少なくない。ほおずき市の日などは、歩くのもままならないほどの混雑ぶりになるのが常だった

のだが――。

今はどうだろう。

屋台は姿を消してしまい、開いている見世もまばらだった。矢場の女が陽だまりで、老女のように居眠りしている。ひとときの夢を貪るしか楽しみがないのかもしれない。人であふれていた奥山は、覇気のない町に変わっていた。

「猿若町も人がおらなんだが、ここも閑散としておるの」

数之進は、思わず呟いている。

浅草寺の東に位置する猿若町には、芝居小屋が集まっており、芝居見物の客は、浅草寺の境内を抜けて猿若町に行く。数之進たちも若い頃、奥山の見世を素見しながら、芝居見物に繰り出した憶えがあった。

「今、おるのは女子供と年寄りだけか」

一角の声も重かった。時刻は八つ半（午後三時）になろうという頃か。対する若い娘たちは、〈十六夜堂〉の座敷に腰を据えて、興奮しきっていた。

「ご覧なさいませ、薫子さん。桜を象ったこの簪の素晴らしいこと」

「ほんに。こちらの簪は兎でしょうか。縁起のよい簪です」

などと言いながら、抽出簞笥から次々に取り出される簪に、嬌声をあげていた。

すかさず若い主が薦める。
「どうぞ挿してご覧になってください。こちらに鏡がございます」
「試してみるだけですよ」
薫子がちらりと二人に目をくれた。買ってほしいという合図であるのは言うまでもない。
老翁は顔を見合わせると、静かに〈十六夜堂〉の外に出た。
「やれやれ、なにもわかっておらぬ」
「開き直っておるのやもしれぬぞ。借財が多少、増えたところで今更、変わらぬではないか、とな」
「それにしても、あの主、妙に嬉しそうな様子をしておるが」
と、数之進は肩越しに見世を振り返る。
「あたりまえではないか。華絵と薫子は美人の部類に入る女子。主はせいぜい二十七、八じゃ。金持ちは江戸から逃げてしまい、残っているのは、どこへも逃げられぬ貧乏人の女房と商売女ぐらいよ。美人に逢うたのは、ひさかたぶりなのではあるまいか」
「なに？」

遅ればせながら、数之進は、若い主の下心に気づいた。

「雇い入れる旨、二つ返事で引き受けたのは、かような気持ちがあったからか。言われる前に言うが、わしは年を経ても恋道には疎いの。やはり、華絵たちは横浜に返して……」

見世に戻ろうとしたが、

「不粋な真似はよせ」

一角に止められた。

「華絵、あるいは薫子が、主に見初められれば重畳よ。厄介者がひとり、片づくではないか。目出度い話の少ない昨今、自分よし、相手よし、世間よしの三方よし、いや、三方目出度しやもしれぬがな。いずれにしても悪い話ではなかろう」

「うむ。確かにそうかもしれぬが」

「案外、商才があるやもしれぬ」

友は目で薫子を示した。もとは料理屋や仕出し屋、小間物屋といった商家に生まれた娘。三紗に武家の教えを叩きこまれたとはいえ、見よう見まねで育っているはずだ。しかし、数之進には別の心配事がある。

「あの主とうまくやっていけるかどうか」

「苦労性と貧乏性の業が疼きはじめたようじゃな。昔のおまえに戻る日も、そう遠くなかろう。楽しみなことよ」

愉しげに一角が笑った。

「胃ノ腑が痛くなるのなぞ、楽しゅうないわ」

「まあ、そう言うでない。こうやって、少しずつ勘働きを取り戻すのが肝要よ。お。なんぞ、騒ぎでも起きておるのか」

一角は背伸びするようにして、彼方を見やった。少し離れた場所で、もうもうと土煙があがっている。見世を開けていた菓子屋のあたりに、何人かの男が入って行くのが、数之進にも見えた。

「なんであろうな」

その言葉を、見世の中にいた主が聞き留めた。

「いかがなされましたか」

緊張した様子で立ちあがる。と同時に手で合図して、華絵たちを奥座敷に行かせていた。尋常ではない。

「いや、すぐそこの菓子屋に……」

「数之進」

一角が叫ぶように言った。ふたたび立ちのぼった土煙が、こちらに近づいて来る。走って来るのは、男たちの集団だった。総勢七名、中には匕首をこれ見よがしに、懐から覗かせている者もいた。

「なにやつじゃ」

一角が、数之進や見世を庇うように立った。

「どけ、爺」

「われらは御用盗よ」

頭と思しき頬傷の男が前に出る。

「徳川様にふたたび蜂起していただくための金を集めているのさ。爺さんたちも感じているだろう、ええ、新政府の世なんぞ、ろくなもんじゃねえや。少しでも徳川様の手助けをと思い、まわっているというわけさ」

「ふざけた真似を」

刀の鯉口を切った一角に、背後から制止がかかる。

「お待ちくださいませ」

主が飛び出して来た。

「お務め、ご苦労さまです」

紙包みを手渡して深々と頭をさげた。『ええじゃないか』の騒ぎによく似ていた。小悪党が騒乱に乗じて、強請り、たかりといった横暴の限りをつくす。泣くのはいつも弱い民だ。

男は満足げに唇をゆがめた。

「ありがたいことだぜ。おまえたちのような商人がいるのを知れば、徳川様もお喜びになるだろうぜ。力づけられるに違えねえ。よし、行くぞ」

「おう」

従った一行は、次の見世に向かった。なにか気にさわることでもしたのだろうか。歩いていた男に突然、襲いかかる。不気味な土煙の中では、強引に通行料が取り立てられていたのだった。連中の横を通るだけでも、幾ばくかの銭を支払わねばならないらしい。

「やめぬか」

数之進の制止が届いたとは思えない。が、倒れた男の懐を探っていたひとりが、財布を高く掲げると、賊はいっせいに離れて行った。

「白昼堂々の狼藉か」

「早う医者を」

数之進は〈十六夜堂〉の主に告げ、倒れた男に走り寄る。かなり激しく殴打されていたが、呻き声をあげながらも身を起こした。数之進は手拭いを出して、傷口にあててやる。その間に賊は早くも、押し入った見世から出て来た。

「ちっ、しけてやがるぜ」

頭と思しき頬傷の男が舌打ちする。

「金のある商人は、逃げちまいましたからね」

「そんな言い訳は通じねえんだよ」

手下の頬を音がするほど強く叩いた。腹立ちまぎれといった感じの一発だったが、逆らう者はいない。それなりに統制がとれているように見えた。頭と思しき男は、数之進たちに一瞥を投げるや、今度こそ、奥山の一郭をあとにする。

「堺を突き止める」

言い置いて、一角は、連中を追いかけ始めた。数之進は懐の手札を握りしめた。天璋院曰く『なんの役にも立たぬ手札』だが……懐の中でずしりと重みを増したように思えた。

「あとは頼む」

倒れた男を託して、立ちあがる。痛む腰を撫でながら、懸命に盟友を追いかけた。

御用盗の賊が行く先はどこなのか。土煙の中に巣くう小悪党の群(むれ)を、老翁たちは退治できるのか。

夕闇が迫っていた。

第四章　ままよの竜

一

痛む腰に鞭打って、延々、走り続けなければならないかと思ったが……御用盗の賊の塒は、意外にも奥山からほど近い場所だった。

「武家屋敷じゃ」

数之進は、壊された長屋の跡に足を踏み入れる。煮炊きにでも使うのか、瓦礫の類は見事に持ち去られていた。次第に闇の色が濃くなってくる。若いときから鳥目の数之進には、苦手な時間帯となっていた。

「屋敷は一部、残っておるようじゃ」

一角が小声で告げる。闇に目を凝らすと、炎らしき色が目に入った。

「焚き火か」
「そうであろうな。台所がないのやもしれぬ。建物を壊した木をくべながら、庭で酒宴を始めるのではあるまいか」
「そういえば」
数之進は、消えかけている記憶を探った。
「〈十六夜堂〉の主が、言うていたな。幽霊が出るだのなんだのという屋敷は、もしや、ここでは」
悪寒が背筋を這いのぼる。鳥肌立っていた。鬼火が飛ぶのではないかと、つい首をめぐらせている。
「幽霊話は、彼の者たちが広めた噂に相違ない」
一角が断じた。
「さすれば、この屋敷に近づく者がいなくなるではないか。おお、我ながら冴えておるわい。五両智恵の復活じゃ。じゃが、こういう考えは、おまえの口から出そうなものだがな。幽霊話にあてられて、まともな考えができぬと見ゆる」
「然り。今にも現れそうで落ち着かぬ」
「静かに」

不意に盟友が片手で制した。しばし耳を澄ませていたが、
「足音じゃ」
隠れろ。と促されて、数之進は、壊れた塀の陰に隠れる。ほどなく幾つかの人影が、闇の中から現れた。五、六人といったところだろう。無言で屋敷の中に入って行く。
「仲間か」
「わしが言うたとおりよ。やつらはここを塒にしておるのじゃ。ゆえに、幽霊話を広めて、人が近づかぬようにした。小判でも隠しておるのやもしれぬ」
「引きあげよう、一角。市中取締隊に知らせるのが得策よ。われらでは、いささか手にあまる」
「寝言もたいがいにせい。彼の者たちが動くと思うか。知らせたとしてもだな、鼻であしらわれるのが……」
「だれに知らせるって？」
ふとひびいた問いかけに、数之進は応えていた。
「捕亡方よ」
振り向いたとき、背後を取り囲まれていることに気づいた。幽霊屋敷に消えたは

ずの男たちが、冷ややかに二人を見おろしている。御用盗の頭と思しき先刻の男が、不思議そうに首を傾げていた。

「でかい声で話していたな。居場所を教えているようなもんだぜ」

「きっと耳が遠いんでさ、小頭。本人たちは囁き声で話しているつもりだったんじゃねえんですかい」

「違えねえや。爺だからな」

ひゃひゃひゃひゃと甲高い声で笑った後、

「連れて来い」

小頭と呼ばれた男は命じた。

「われらが従うとでも……」

一角の勇ましい言葉は最後まで続けられない。刀を抜く前に押さえつけられていた。数之進も羽交い締めにされて、素早く後ろ手に縛りあげられる。

「ええい、放せ、放さぬか、うぐっ」

「一角！」

殴られた一角を庇って、数之進は覆いかぶさる。我が身を捨てて庇う姿になにか思ったのか、

「やめろ」
小頭は、蹴ろうとした男を止めた。
「爺を痛めつけても、おもしろくねえ。それに、だれの命令でここを探っていたのか、吐かせなきゃならねえからな」
顎を動かして、ふたたび連れて行くよう示した。幽霊屋敷の塒、小頭の男、つまり頭は他にいる、だれの命令で探っていたのか吐かせる。
それらの事柄を、数之進は頭に叩きこんだ。老耄始めている身にとって、忘れないようにするのは至難の業。ぶつぶつと繰り返している。
「念仏を唱えてやがるぜ」
「いい心がけじゃねえか。ほら、立て」
数之進と一角それぞれに、ひとりずつの男が付いていた。後ろ手に縛った縄を持ち、屋敷の奥に行けと促した。
「大丈夫か」
歩きながら一角に問いかける。唇が切れて血が滲んでいた。夜空に輝く月と星が、盟友の横顔を照らし出している。近ければ、なんとか表情を確認できた。
「なんの。おまえとは鍛え方が違うわ。頭がしゃきっとして、気分がようなったぐ

らいよ。猫にさわられたほどにしか感じぬ」
「爺。なんだったら、もう一発、くれてやってもいいんだぜ」
むきになった男を、数之進の後ろにいた男が宥める。
「相手にするんじゃねえよ。どうせ明日の朝までの命だ。末期の酒でも飲ませてやろうじゃねえか」
「けっ、お優しいことで」
などと話しているうちに、拓けた場所に出た。中庭だった所かもしれない。中途半端に壊された母屋が、青白い光の中に浮かびあがっている。今の侍のようだった。商人にもなれず、侍としても生きられない。中途半端なまま、朽ち果てていく——。
「そこに座れ」
命じられて、仕方なく二人は地べたに腰を降ろした。焚き火のまわりには、十数人が集まっている。手下が大徳利を持って、小頭の欠けた湯飲みに酒を注いだ。
（頭はこれから来るのか？）
数之進は、霞む目の焦点を必死に合わせる。統制の取れた賊の上には、力を持つ頭がいるに違いない。しかも小頭は、かなり恐れている様子だった。強請った金子が少ないことを気にしていたあれに、彼の者の心情が表れている。

「まただれか来た」
隣の一角が呟いた。
「区域ごとに係が決まっておるのやもしれぬ」
数之進は、ますます興味が湧いていた。奥山に現れた一群は、おそらく奥山の係。他にも日本橋や神田、深川、本所などなど、係が決まっているのではないか。大勢の三下たちを束ねているのはだれなのか。
「へへへ、小頭。うまくいきましたね」
突如、耳に憶えのある声が飛びこんできた。一角も即座に察したに違いない。肱で突いている。それでも「まさか」と思ったが、
「おまえも慣れたもんじゃねえか、ええ、『ままよの竜』よ」
続いてひびいた答えが、疑問を確信に変えた。
「いや、おれは兄ぃたちに言われるまま、動いただけでさ。なんと言っても『ままよの竜』ですから」
「ははは、違えねえや」
「だいたい要領がわかりましたんで、明日はもっと……」
目を転じた『ままよの竜』こと、生田竜平は絶句した。その目はむろん数之進と

一角に向けられている。茫然自失の竜平を、小頭が振り返った。
「どうした？」
「い、いえ、なんでもありやせん」
慌てて目を逸らしたが、ちらちらと盗み見ていた。なぜ、ここにお爺様たちが、と、自問の嵐だったに違いない。おさまらない動揺が伝わってくる。
「三下とはな」
一角が呆れ顔で言った。
「せめて小頭ぐらいにはなれ」
「かような話ではないと思うが」
「わかっておるわ」
「なれど、われらにとっては重畳」
隙を見て逃がしてくれるであろうと、数之進は言外に匂わせた。ふんと一角が鼻を鳴らした。
「あてにならぬ」
「なれど」
「こ、小頭」

手下のひとりが、闇の中から現れた。用足しにでも行ったのか、はたまた、なまぬるい風のせいだろうか。尻はしょりしている。

「向こうに倒れてまさ。ふ、二人、や、殺られました」

と、背後の暗闇を震える指で示した。

「なんだと？」

奥山担当の小頭が、湯飲みを叩きつけて、立ちあがる。

「おい、確かめて……」

命令を遮るように絶叫が轟いた。

「うがっ」

「ぎゃあぁっ」

二度、続き、唐突に途絶える。あとには、身体が沈みこむような静寂が訪れた。

ひたひたと近づくなにかの気配、闇の中からだれかが凝視めている……。

「幽霊じゃ」

数之進は言った。

「噂はまことだったに相違ない。この屋敷で死んだ者の亡霊やもしれぬ。あるいは手打ちにでも遭うたか」

声が震えるのを止められない。孫の竜平も負けず劣らずの幽霊嫌い。真っ青になっていた。

「逃げた方がいいんじゃないんですか」

訴える声もまた震えていた。

「臆病風に吹かれやがって。とにかく、確かめて来い」

件の小頭の命令は、ふたたび絶叫に遮られる。断末魔のような叫び声が、続けざまにひびいた。闇の中にいた三下たちは、急いで焚き火のまわりに来た。何人、減ったのかはわからない。不安げに顔を見合わせている。得体のしれない薄気味悪さからだろう、しきりに足踏みしている者もいた。

「確かめて来い」

三度目の言葉に、三度、叫び声が重なった。男たちはすでに恐慌状態に陥っている。

「逃げろ！」

一角の叫び声で、いっせいに逃げ出した。匕首を抜き身構える者もいたが、逃げる男たちの波に呑みこまれる。

「待て、逃げるな、待て」

呼びかけながら、件の小頭も走り出していた。隙を縫って竜平が、二人の背後に来る。短刀で縄を切った。

「おれは連中と逃げる」

止める暇もない。竜平は闇に吸いこまれて行った。焚き火の中で木の弾ける音だけが、聞こえている。

「おまえはここにいろ。わしが確かめて来るゆえ」

「わしも行く」

慌て気味に友の袖を摑んだ。ひとりで置き去りにされるのは恐ろしい。一角の手を借りて立ちあがると、闇の中に足を踏み入れた。

「これは」

逃げるときに斬られたのか、思っていたより多い数の屍が、母屋の脇の小道に続いていた。同じ不安を覚えたのはあきらか。数之進よりも先に、一角が確かめる。

「案ずるな。竜平はおらぬ」

「道に出たところを斬られたやもしれぬ」

屍をすべて確かめるまでは安心できない。一体ずつ、慎重に顔を見ていった。

二

助っ人は、いったい、だれなのか？

「おそらく味方だろうが」

駕籠に揺られつつ、数之進は考えていた。ひとりの男の顔が脳裏に浮かんでいる。だが、「まさか」という気持ちの方が強かった。己の願望がもたらす夢ではないのか。無私の心で動く物好きが、自分たちの他にいるとは思えないが……。

「わからぬ」

続いて浮かんだのは、累々と連なる亡骸の図。もしや竜平もという懸念は消えたものの、賊と行動をともにする馬鹿な孫への不安は消えていなかった。

「子で悩まされることはなかったが、孫でかような思いを味わわされるとはの」

呟いたとき、駕籠が芝将監橋近くの藩邸に着いた。一角に支えられて、駕籠から降りる。未明の藩邸付近は、まだ闇に覆われていた。

音が聞こえたのか、

「ご隠居」

潜り戸が開いた。門番や雑用までこなす中間が、入りやすいように戸を開けておいてくれる。

「出迎えとは嬉しいのう」

数之進は先に入った。

「台所でごそごそと音がいたしまして。盗人が忍びこんだ気配はないんですが、ひとりでは、どうにも気味が悪くてたまりません」

「下働きの者たちがいるではないか。朝餉の支度をしているのであろう」

数之進は応えて、潜り戸から外を見る。なかなか入って来ない友に呼びかけた。

「一角。いかがしたのじゃ」

「うむ」

ようやく一角が入って来る。

「尾行けられているような気がしての。姿を見せるのではないかと思い、様子を見ていた次第よ」

「おぬしの勘違いか、それとも勘働きが戻ったか」

「後者じゃ。首筋のあたりが、ざわざわしておった。尾行けられていたのは間違いない」

「そうであれば重畳、いや、尾行けられていたのであれば、あまり喜べぬがな。おぬしの勘働きが戻ったのは、目出度きことじゃ」
「じきに、おまえの苦労性と貧乏性の業も戻るわい」
「それはあまり喜べぬな」
ははは、と笑い合う二人に、おずおずと中間が割って入る。
「あの、台所に」
「そうであったな。参ろうか」
「はい」
中間が先に立ち、数之進と一角が後ろに付いた。
「なんの話じゃ」
友が問いかける。
「人の気配がある由。わしは下働きの者たちが、朝餉の支度をしているのではないかと言うたのじゃが」
「彼の者たちは、昨日の朝、姿を消しました。何人か残っておられる藩士のかたがたは、まだ寝ておられる時刻。それでおかしいと思いまして」
歩きながら中間が振り返る。

「盗人か」
一角が早くも刀の鯉口を切った。血腥い場面を見たのは、つい先刻の出来事。血が騒ぐのかもしれない。
「二人はここで待て」
勝手口で告げたが、数之進は首を振る。
「いや、わしも参る。幽霊よりも盗人の方がよいからの」
「勝手にせい」
刀の柄を摑んだまま、一角はしのびやかに勝手口から台所へ入る。足音と気配を見事に消した姿は、一瞬、昔に戻ったかのよう。数之進も及び腰であとに続いた。が、真っ暗でなにも見えない。記憶によると、勝手口を入った土間の右手には竈や洗い場、左側には膳台が置かれているはずだ。
「鼠でもおるのか。ボリボリと、なにかを嚙む音がする」
鳥目の数之進は耳に頼った。
「あれは明かりではあるまいか」
一角が告げる。膳台の下に明かりでも置いてあるのか、うすぼんやりと明るくなっていた。数之進は友の背中に隠れるようにして、少しずつ前に進む。が、いきな

り一角は膳台の下にもぐりこんだ。
「い、一角」
「この盗人め」
友は盗人らしき者の首根っ子を摑んだ。
「うわっ、わわわわ」
膳台の下から引きずり出されたのは、白い寝間着姿の男。数之進は屈みこみ、膳台の下に置かれていた紙燭を取る。男の顔にそっと近づけた。
「どこの、だれじゃ」
寝間着は絹の光沢を放っている。年は二十四、五で、顔立ちはいささか間延びしているかもしれない。よく言えばおっとり、悪く言えば与太郎面だった。
「余は友春じゃ、友春じゃ」
と告げるときに、男の口から人参があふれ出した。膳台の下で生の人参をかじっていたのだろうか。右手に歯の痕が付いた人参を、しっかりと握りしめている。口のまわりには泥が付き、見ようによってはそれが不精髭のように見えた。
「はて、友春？　どこかで聞いたような」
「わしもじゃ」

顔を見合わせた後、ああっと、老翁は同時に大声をあげた。
「ご、ご無礼つかまつりました」
「よもや我が殿が、膳台の下に潜りこんでおられるとは思いませなんだ」
これまた同時に平伏している。
「苦しゅうない。面をあげよ」
友春は鷹揚に告げた。
「ははっ」
数之進と盟友は顔をあげる。美木藩芝山美濃守友春に、お目通りしたのは、大台所の土間、しかも膳台の下である。目を合わせるのは非礼なのだが、この近さでは四の五の言っていられない。友春はまたボリボリと人参をかじり始めた。二人の怪訝な眼差しに気づいたのだろう、
「腹が空いてしもうての。昨日からなにも食べておらぬのじゃ」
淡々と答えた。中間の男の話から考えると、賄方の下男や下女が姿を消して以来、食べていないことになる。数之進は訊かずにいられなかった。
「小姓はいかがいたしましたので？」
「昨日の朝、余が起きたときには、おらなんだ。胃ノ腑が痛むほどに腹が空いたゆ

え、食えるものはないかと探した次第よ。籠に人参があったのでな。ためしに食うてみたら、まあ、食えぬことはない」

「おいたわしや」

数之進の嘆きを、一角が受ける。

「沈没する前に船から逃げるという鼠のごとく、みな逃げるか」

「ほう。鼠は賢いの」

友春が言った。言葉どおりに受け止めると、なにやら自虐めいていたが、おそらく、なにも考えていないだろう。藩邸から逃げて行く家臣や奉公人を、鼠に喩えたとは、とうてい思えなかった。

「殿。人参を食されますときには、まず洗わねばなりませぬ。人参だけではなく、野菜と申しますのは、泥を落として食すものでござりますゆえ」

数之進の言葉に、「ほう」と驚きの声を洩らした。

「なるほど。やけに土臭いと思うたのは、泥が付いていたからか」

「いずれにいたしましても、殿。中奥の御座所にお戻りなされませ。ここから先は、われらがお世話をいたしまする」

一角の訴えには、気合いが入っている。元小姓役の本領発揮か。

「さようか」

裸足の友春は、立ちあがって、板の間にあがる。老翁たちの名や役職に、なんの関心を示さぬあたりもまた、世間知らずの藩主を表していた。

（『ぶらかし大名』は、傀儡大名か）

さらに人の気配がなくなった母屋には、鼠の鳴き声だけがひびいていた。

三

「鼠はおるのに、鼠は消えたか」

などと友春は呟いていた。老翁たちの世話によって、月代を剃り、身支度を調えている。一角は丁寧に御座所の掃除をし、庭の萩を伐って、赴きのある花器に美しく活けていた。むろん掃除は数之進も手伝っている。

「その萩はどこから持って来たのじゃ」

友春は脇息にもたれかかって、すっかり寛いでいた。障子はすべて開け放ち、秋の陽射しと爽やかな空気を取り込んでいる。過日までの蒸し暑さは消え去って、秋らしい日和となっていた。

「は。藩邸のお庭でございまする」

一角が答える。まともに庭を見たこともないのは驚きだった。小姓や家臣たちは、なにをしていたのだろうか。

「本日はまことに良きお日和。かような日には、のんびりと庭を眺めるのも一興ではないかと存じます。奥方様と散策なされては、いかがでございまするか」

数之進の提案に、友春は目をみひらいた。

「妙子とか」

「は」

「なれど、奥御殿に参るのは、奥泊まりのときだけであろう。日が高いうちから奥と過ごすのは、あまりよいことのようには思えぬ」

ここでも世間知らずぶりを露呈する。それとも美木藩では、藩主にこういった不自由を我慢させていたのだろうか。

「世は変わりましてございます」

数之進は遠慮がちに進言した。

「これからは、昼も夜も奥方様とお過ごしあそばされませ。奇異な眼差しを向ける者はおりませぬ。悪し様に言う者もおりませぬ」

「ふむ。確かに世は変わったやもしれぬが……その話はまたにしよう。今すぐ決めずともよい」

友春は、いかにも『ぶらかし大名』らしい答えを返した。すぐに結論を出さずに、先延ばしにするのは、側近によって育まれた悪癖のように思えた。

「殿」

ずいっと一角が前に出る。

「諸藩の殿様たちも、これからは普通の民のように、奥方様と仲睦まじゅう、一日をお過ごしあそばされるようになりますぞ。時の流れに乗らぬのは、時代遅れと笑われるやもしれませぬ」

「時代遅れ」

ぴくりと友春の眉が動いた。『ぶらかし大名』も、時代には乗り遅れたくないのだろうか。彼方を見やって、しばし考えこんでいる。

「明日にでも奥方様を、御座所にお招きしてはいかがでございまするか」

数之進の二度目の提案には、「うむ」と短く答えただけだった。無理もない。昨日までは美木藩流とも言うべき仕来りに従ってきたのだ。上野の寛永寺で戦が行われていたときも、藩邸内は別世界だったに違いない。ぎりぎりで新政府軍に加わる

と表明した美木藩は、幸いにも参戦せずに済んでいる。
世の中がどれだけ変わろうと、藩邸や下屋敷の外に出ない限り、藩主の日常が変わることはなかった。
「妙子は」
ぽつりと友春は言った。
「かように考えるであろうかの」
奥方の気持ちを知りたいと告げた。消極的ではあるものの、自分の気持ちを口にしたのは大変なことかもしれない。目出度き一歩と言えるのではないだろうか。
「文をお出しなさるのが宜しかろうと存ずる」
数之進の答えを聞くと、大きく頷き返した。
「書こう」
「ははっ」
一角がすぐに墨と筆と紙を用意する。それを横目で見ながら、数之進は静かに御座所を出た。
(勘定方の部屋に、帳簿の類はいっさい残っておらなんだ)
御座所や廊下の掃除を手伝いつつ、さりげなく帳簿の有無を確認していた。が、

藩の帳簿どころか、郷帳や領地の各村から届く明細帳といった帳簿さえ残っていなかった。つまり、ここは藩邸の抜け殻なのである。

「おじい様」

百合の呼びかけで庭を見た。植え込みの陰に隠れている。数之進は注意深く周囲を見た後、沓脱ぎ石の草履を履いて、庭に降りた。

「いかがしたのじゃ」

と、植え込みに屈みこむ。

「奥女中や台所の御用を務める下女たちが、みないなくなってしまいました。奥御殿に残っておりますのは、わたくしと奥方様の乳母だけでございます」

「奥御殿も同じ有様か」

数之進の呟きで察した。

「では」

「さよう。表にも人がおらぬ」

「下屋敷に行ったのでしょうか。先程、勝利様の使いがこれを」

百合は懐から文を出した。商人が入れ替わり立ち替わり出入りしている、浪士と思しき輩が荷を運ぶときに護衛役を務めている、荷がなんであるかはまだ不明、

引き続き調べると記されていた。
「あちらは賑やかなようじゃの」
「おじい様たちは、いつ、忍びこまれるのですか」
「それよ」
数之進は、肩越しに御座所を見やる。文を記している友春のそばにいるのは、一角のみ。他にはだれひとりいない。
「お世話をする者が、だれもおらぬ。殿は台所で泥付き人参を、生のまま食しておられたわ。とてもひとりにしておけぬ。明日、奥方様と庭を散策なさればと提言しての。今、奥方様への文をしたためておられるところじゃ」
「奥御殿にお渡りいただけば、宜しいではありませんか」
百合は、あっさりと言った。
「奥方様はお殿様を、心からお慕い申しあげております。前にもお知らせいたしましたが、傍目にもそれが見て取れるほどなのです。お渡りいただきますれば、わたくしと奥方様の乳母で、お殿様をお世話いたします」
数之進たちが動きやすいようにと心をくだいていた。このありがたい申し出を断るはずがない。

「頼めるか」
「はい。お待ちください。すぐに奥方様のご返事をいただいて参ります」
「待て。これを」
懐から紙片を取り出した。
「殿のご気質や、お好きなもの、ご趣味などを記しておいた。お世話して間がないゆえ、大雑把やもしれぬがな。なにかの役に立つやもしれぬ」
「御算用日記ですね」
「まあ、かようなものじゃ」
「では」
すみやかに百合は動いた。女子はならぬと手伝いを拒んだことが、今更ながら恥ずかしくなる。とらわれてはいけないと思った。
「殿に時代遅れとは言えぬの。老耄始めているこの頭を、柔軟にせねばならぬ」
さて、と、数之進は立ちあがった。友春は奥御殿にまかせられるとしても、やはり、女子だけでは心許ない。
「あの阿呆でも、おればの。猫よりはましじゃろうに」
御用盗の一味と消えた『ままよの竜』。賊の行方や頭がだれかを知るには、悪く

ない流れだったが、なんにしても人手が足りなかった。
「じゃが、昔もそうであったわ」
一角が庭に降りて来る。
「然(とか)り。潜入するときは、われら二人だったの」
「うむ」
と、友は御座所を振り返った。友春は脇息にもたれかかって、うつらうつらと舟を漕いでいる。
「わしは、大台所に行くゆえ、おぬしは、殿のおそばにおれ」
数之進は言ったが、
「いや、器や鍋の片付けがまだ済んでおらぬ。それこそ幽霊が、やってくれればよいがの。おるのは鼠だけよ」
一角は首を振る。
「確かに」
数之進は笑って、一角と大台所に足を向けた。これも昔からの癖なのだが、最低でも一日、二度は、台所に足を運ばないと落ち着かない。先刻、友春の朝餉の支度をしたときにいたのは鼠だけ。沈む船から逃げない阿呆な鼠は、もはや、いないと

覚悟していたのだが……五十嵐健之助を含む三人が、黙々と朝餉の後片付けをしていた。

四

「いたのか」

数之進の頬が、思わずゆるんだ。友春や数之進たちが使った器まで洗ってある。ひとりは板の間を磨きあげる作業に取りかかっていた。

「われらの分までですまぬ」

「いえ。飯を炊き、汁まで作っておいていただきました。片付け役を引き受けるのは、当然のことではないかと存じます」

健之助が畏まる。

「なにゆえ、下屋敷の主に仕えぬ」

数之進は皮肉をこめた問いかけを発した。下屋敷の主とは、まだ目通りしていない江戸家老、松本徳太夫のことである。徳太夫が事実上の藩主であるのはあきらか。友春に付いたとて得るものは多くないだろう。悪くすれば家老派に、始末されるか

もしれない。それでもここに残る真意が知りたかった。

「殿には御恩があり申す」

健之助は言った。

「家宝の花瓶を割ってしもうた折、『人の命と花瓶を較べれば、どちらが重いかは一目瞭然じゃ』と仰せになりまして、お許しいただきました次第。以来、命を捨ててお仕えする覚悟を決めた所存にござる」

「割ったのは、われらで……」

口を挟んだ仲間のひとりを鋭く遮る。

「言うな」

「健之助」

板の間を磨きあげていたひとりも手を止めていた。二人の罪を被って名乗り出た健之助に、口にはできぬほどの恩義を感じているに違いない。

(つまり、五十嵐殿は殿に恩義を感じ、この二人はその五十嵐殿に義理立てして、いや、感じ入って、ともに動いているというわけか)

五常——仁義礼智信を守るのが侍の務めと、数之進は常日頃から思っている。少なくともこの三人は、道を守っているように見えた。

（なれど、そう見せかけているのやもしれぬがな）

疑いも敢えて残している。老翁たちは新参者、もしかすると、国許の藩士がいて、怪しいと訴えているかもしれない。油断はできなかった。

「殿は、奥御殿にお移りいただくつもりじゃ」

数之進は、すでに藩邸はほとんど機能していないことを簡潔に説明した。三人は神妙な顔で耳を傾けている。この三人が刺客に変わらないことを祈るしかない。

「身のまわりのお世話は、奥女中が引き受けてくれよう。かたがたには、殿の護衛役をお願いしたいのじゃが」

と、健之助たちに目をあてていった。三人は真っ直ぐ見つめ返している。特に相談することもなく、健之助が即答した。

「承り申した」

「さようか」

「やれ、助かったわい」

一角がすかさず補足する。

「齢（よわい）七十九の年寄りには、ちと荷が重すぎるゆえ、かたがたにお願いした次第よ。野菜や魚の仕入れぐらいはできるがの。さよう、そろそろ明日の分を頼みに行かね

ばならぬ」

自然に藩邸を出るため、うまく話を作っていた。

（流石は一角）

数之進は目で称賛を告げる。怪しまれるのはすなわち、命を縮める危険に繋がりかねない。慎重のうえにも慎重に行動しなければならなかった。

「失礼いたします」

突然、百合が座敷に続く廊下に姿を見せた。

「奥方様付きの侍女、片倉百合と申します。奥方様よりお言伝を賜って参りました。お殿様を奥御殿にお迎えする旨、喜んでお引き受けするとのことにございます」

祖母方の姓、片倉を名乗って、老翁たちとは他人のふりをしている。むろん段取りどおりだったが、百合はいささか先走りしすぎているように感じた。

「先程、たまたま庭で百合殿に出逢うての」

数之進は、孫娘の未熟な部分を補った。

「つい好色心が起きてしもうてな。庭から奥御殿に続く戸を開けた次第よ」

「百合殿に見咎められてしもうた。謝罪のついでに、表の話をしたのじゃ。殿のご

不自由をなくすのが、われらの務め。百合殿はすぐさま奥方様にお知らせしてくれたというわけじゃ」

一角が話を合わせる。そこで初めて気づいたのだろう、百合がはっとしたように小さく息を呑む。詫びるように瞼を伏せた後、

「つきましては、お殿様を御座所までお出迎えに参りたいと、奥方様は仰せになられております。いかがでございましょうか」

目をあげて訊いた。

「否とは申されぬと思うが、念のため、殿にお伺いして参る」

数之進の答えを、健之助が継いだ。

「その御役目、それがしがお引き受けいたし申す」

袴に挟んでいた手拭いで手を拭き、板の間にあがる。百合と一緒に母屋の方へ行く形になった。百合は友春の答えを聞き、奥御殿に戻るつもりなのだろう。数之進は一角をともない、勝手口から庭に出る。

「五十嵐健之助め。百合の美しさに心を奪われたな」

友の呟きに、数之進は目を丸くした。

「なに？」

「気づかなんだか。いつもながら恋道には疎いの。あれはひとめ惚れした目よ。なれど、勝利が黙ってはいまい。五十嵐に果たし状を叩きつけるやもしれぬ」

「な、なに？」

二度目の驚きは、自問の嵐をもたらした。五十嵐健之助が百合にひとめ惚れ、それを知った早乙女勝利は健之助に果たし状を叩きつける。果たし状を叩きつけるのはすなわち、勝利が百合に惚れているから。

「まさか」

「今頃、気づいたのか。やれやれ、千両智恵も恋道だけには通用せぬな。ま、これも昔からのことじゃが」

「ゆ、百合は存じよるのか、勝利の気持ちに」

「気づいておらぬ」

一角は断言した。

「恋道に関しては、おまえによう似ておる。先程のように己の未熟さを、すぐさま察する鋭さはあるのにのう。いいのやら、悪いのやらじゃ」

呟きは見事に素通りする。

「そう、か。勝利が、そうか」

数之進は衝撃の事実を、懸命に受け入れようとしていた。
「悪い話ではない、それどころか良縁じゃ。生田家と早乙女家の絆が、ますます強くなる。目出度い話よ」
「得心できたか」
「うむ。よもや勝利が……お、中間じゃ」
玄関先に続く塀の戸が開き、さまざまな役を兼ねた中間が姿を見せた。今まで潜入した中でも、一番の人手不足藩。昔は協力してくれる者がいない人手不足だったが、此度はそもそも藩邸に人がいないという話になっている。
「いかがしたのじゃ」
数之進は一角と、中間の方に走った。
「御用人の坂野様が、お戻りあそばされました。すでに御座所の方においでになられております」
「承知した」
答えて、老翁たちは御座所の中庭に向かった。坂野清兵衛の留守をいいことに、友春が奥御殿へ移る話を勝手に決めている。怒りを買うことも考えられた。御座所の廊下には、友春と奥方らしき女性が立ち、百合が傍らに跪いている。

「殿」

そこに清兵衛が現れた。

「父上」

奥方――妙子の呼びかけで、清兵衛は跪いた。父娘は目のあたりと横顔がそっくりだった。清兵衛が型どおりの挨拶を告げる間、数之進と一角は御座所の前の庭に平伏している。妙子が奥御殿に移る話をしても、清兵衛は特になにも言わなかった。

「確かに母屋は人が少なくなり申した。殿におかれましては、ご不自由をおかけいたしまする」

詫びて、続ける。

「このうえは奥御殿でお過ごしあそばされるのが宜しかろうと存ずる。奥方様のお世話を受けるのは、慶ばしきことと存じまする」

「さようか」

友春は世間知らずな殿様らしく、淡々としていた。奥御殿に足を向けた友春たちを、数之進たちは平伏したまま見送った。清兵衛から言葉が出るかと思ったが……無言でその場をあとにする。勘定方の部屋にでも行くのだろうか。あるいは麻布の下屋敷に戻るつもりなのか。

足音が完全に消えたとき、
「おかしい」
数之進は言った。一角の頬が朱に染まる。
「おお、ようやく出たか、待ちかねたぞ、その言葉を。おまえの『おかしい』を聞くのは、半世紀ぶりよ。して、なにが『おかしい』のじゃ」
「坂野様よ。下屋敷の御家老様がじゃ、万が一、よいか、万が一じゃぞ」
「わかっておるわ。早う進めろ」
「御家老様が殿を始末しようと考えておられた場合、此度の奥御殿へのお移りは、まさに好機。刺客を送りこみ、殿を」
と、首を斬る真似をした。一角は何度も頷き返している。
「ありうることじゃ。それで？」
「にもかかわらず、奥方様を逃がそうとなさらぬのはなにゆえか。愛娘ぞ。危険きわまりない状況に、置き去りにするのはなぜか」
「これから逃がすつもりなのじゃ。あるいはまだ猶予があるのやもしれぬ。その日が決まったら即座に逃がすであろうさ。危険を察した鼠は逃げる。かように言うたではないか」

「うむ」
「なんじゃ。わしの考えは、お気に召さぬか」
「いや、ちとな。御用人の坂野様のご真意を、はかりかねておるところよ。もしや、殿のお味方なのではないか、と。百合の話によれば、殿と奥方様は仲睦まじいとか。まことの愛を抱く娘を、引き離すのは忍びないゆえ、坂野様はたったひとり、殿のもとに残ることにした」
「それはおまえの望みであろう」
一角は冷静な意見を述べる。
「情に流されてはなるまいぞ。さよう、先日、訪れた男が言うていたではないか、坂野様を『二心殿』だと。藩主派に付くか、裏切って家老派に加わるか。あっちに行き、こっちに行き、しているのであろう。優柔不断な臆病者よ」
「あの折、坂野様は、家老派のひとりと目配せをかわしておった。おとなしく引きあげろという命令だったように思えなくもない。殿を見放したのやもしれぬ」
「己の目を信じろ。老いたとはいえ、勘働きは鈍っておらぬ。まずは殿をお守りしつつ、ひとりでも多くの藩士に、明日への道を見つける手助けをしようではないか。われらには天璋院様のご加護がある。心強いことよ」

「わかっておる。では、行くか」
数之進は袴の土埃を払って、立ちあがる。家老派の本陣は、麻布の下屋敷。真実を知るために、藩邸をあとにした。

五

麻布は、御城の南西にあって、山あり、谷ありの南傾斜面をなしている。ここの山畑は麻を産し、それを玉川に晒して、調布を織っていた。村名は麻生、阿佐布とも書いている。大名家の中屋敷や下屋敷をはじめ、拝領武家屋敷が多く、また寺院の数も夥しかったが、壊された屋敷も少なくない。人の往来は少ない区域なのだが、美木藩の下屋敷だけは違っていた。
「酒はまだか」
「もっと気の利いた肴を持って来い」
「芸者と幇間を呼べ」
大広間に集まった藩士の数は、約五十人。雇われた若い浪士らしき者も交じっている。奉公人にいたっては、どれほどいるのかわからない。藩士の要望を満たすた

めに、台所と大広間を忙しげに行き来していた。

「いやはや、信じられぬほどの賑わいじゃ」

数之進は片隅に座して、様子を見ていた。老体を労りながら来たため、すでに夕餉の時刻となっている。酒と肴を調達して来た一角が、膳を置いて、隣に腰を降ろした。

「酒も肴も、まあ悪くない。適当に見繕って来た。そら、この茄子の揚げ浸しは旨いぞ。漬け物は糠床に、胡瓜、人参、茄子、茗荷と突っ込んであったわ。我が殿であれば、糠を付けたまま、食らいついたやもしれぬ」

「土よりは糠の方が、ましやもしれぬな」

杯を受け取って、友の酌を受ける。

「すまぬ」

「料理はなかなかの腕前ゆえ、板前に訊いてみたところ、かつては〈八百善〉に奉公していた由。じきに芸者も来るそうじゃ。賑わう場には、人が集うの」

「わしは、よけい殿がおいたわしく思える」

沈む船から逃げた鼠は、みな下屋敷の住人となっていた。泥付きの人参を生のままかじっていた友春の姿が、瞼に焼きついている。口のまわりは泥だらけ、着替

えもろくにできない殿様は、騒乱にまぎれて抹殺されてしまうのではないか。

「ならぬ、それはならぬ」

ぶるぶるっと身震いした。一角が苦笑いで応える。

「出たな、おまえの悪い癖が。心の中で自問して、己のみが得心する。長い付き合いゆえ、考えていることはだいたいわかるがの。わからぬときは、いつも蚊帳の外であったわ。お、蚊帳の外も懐かしい言葉じゃ」

手酌しようとした友から、銚子を取って、注いでやった。どこか浮かない顔をしている。一角ではないが長い付き合いゆえ、憂悶を読み取っていた。

「なにか気になることでもあるのか」

数之進は訊いた。

「うむ。藩邸を出てここに着くまでの間、ずっと尾行けられていた。昨日もそうだったが、此度も間違いない。人の気配が背後に在った」

「われらを助けてくれた『謎の助っ人』ではあるまいか。案じて、護衛役を買って出てくれたのやもしれぬ」

「そういうことにしておこう」

友はにやりと笑った。おまえの心がそれで落ち着くなら、という感じだった。尾

行者がだれであるのか、気にならないわけではないが、気にしてどうなるものでもなかった。

「考えすぎぬがよし、よ。それにしても」

と、あらためて大広間を見まわした。

「なにゆえ、かように人が大勢、集まって宴を開いておるのか。横浜の一郭にいるようじゃ。酒宴を催せること自体が不思議でならぬ」

声が聞こえたわけではないだろうが、

「ご隠居。楽しんでおられるか」

銚子を手に、二人の藩士が来た。年は三十前後、ここに集まっている中では、年配になるかもしれない。玄関先で数之進が挨拶したときに、取次役となった藩士である。江戸家老の松本徳太夫は、国許から出て来たという年寄りに、なんの興味も示さなかったのだろう、すんなり訪問を許されていた。

「楽しまいでか。かたがたのお口添えのお陰で、われらはご相伴に与ることができた。ささ、お飲みになられよ。遠慮は無用じゃ」

「われらが買うた酒ではないがの」

一角の言葉で、二人は愉しげな笑い声をあげる。この屋敷の詳細をつかむべく、

あたりさわりのない会話を続けた。維新の風が吹き荒れる中、不安をいだかぬ者はいない。

「殿は遅かれ早かれ美濃にお帰りあそばされる」

ひとりの呟きを、もうひとりが継いだ。

「われらは江戸詰でござったゆえ、美濃のご領地は遠い場所でござった。なれど、そうも言うてはおられぬ。扶持を賜れぬ場合は、自力で稼がねばならぬ」

「百姓をするしかあるまいな」

「あるいは、美濃紙でも作るか」

目を合わせて、二人同時に吐息をついた。農民か、職人か、商人か。侍の身分がどうなるかわからない以上、他に生計の道を求めるしかなかった。

「シャボンはどうじゃ」

数之進は提案する。

「シャボン？」

「聞いたことはあるが、さて、使うたことがあるかと言えば、ござらぬ」

「すぐに作るのは、無理やもしれぬ。なれど、時がくれば必要な材料が揃うはず。いまだにわれらは洗濯する折、ムクロジの実やサイカチの莢を使うておる。灰汁を

用いるときもあるが、今、言うたものを使うのは、汚れがひどいときのみじゃ。ほとんどは洗濯板と手で洗うだけよ」

簡潔に説明した。石鹸は戦国時代に輸入したとされるが、その数はごくわずか。八代将軍吉宗公の時代には、旧幕府が長崎奉行にシャボン製造法の調査を命じている。また黒船で来航したペリーが、『香けん』として、化粧石鹸を関係者に配ったりもした。

「しかし、われらが手に入れるのは至難の業。高価でとうてい手が届かぬ」

「ご隠居は、やがて、シャボンが、民の間でも使われるようになるとお考えなのでござるか」

ひとりの問いかけに頷いた。

「さよう。なれど、それが無理なうちは、今までどおりのやり方でしのぐしかない。煙草を育てるのも、ひとつの策じゃ。煙草として売れるうえに、煙草の茎を焼いた灰汁は、汚れを落とす役割をはたすゆえな」

「煙草か」

「育てるのは、いかがでござろう。むずかしゅうござるか」

二人の目は真剣だった。見ると、五、六人の藩士が、いつの間にか集まっている。

みな年は三十から四十前後。切羽詰まった表情をしていた。

（なるほど。この者たちは、美木藩の藩士じゃな。おそらく藩主派だったに違いない。そして、若い浪士ふうの者たちは、雇われた臨時藩士か）

心の中で大きく二つに分けた。彼の者たちをうまく取りこめば、藩邸に戻って来るかもしれない。友春の側近をひとりでも増やさなければならなかった。

「煙草はいささか手がかかる。なれど、野菜や米もみな同じじゃ。子を育てるように、手をかけてやれば、すくすくとよう育つ」

「たまに駄目なものも出るが」

一角は、孫の竜平のことを暗にほのめかした。数之進はちらりと冷ややかな目を投げる。よけいなことを言うでないと告げた。

「確かに駄目なものも出る。たとえば十本の苗があったとしよう。そのうち一、二本、駄目なものが出るのは致し方ない。慣れてくればその数が減るようになる。よければ、わしが指南して進ぜよう。藩邸の庭では、すでに野菜を育てる準備を始めておるゆえ」

「おぬしら、横浜に行ったことはあるか。国許から出て来るついでに、われらは横浜見物もして来た。面白い話があるぞ」

後押しした一角に続いた。

「『金がなければ智恵を出せ。智恵がなければ汗を出せ』と言うではないか。商いをするのであれば、努力と工夫が大事よ。たとえば扇は、唐から入った品じゃがの。それを我が国の職人は、折り畳める扇子に変えた」

「え、唐の扇は、畳めない扇だったのでござるか」

ひとりの驚きに、大きく頷き返した。

「さよう」

「商いでは『自分よし、相手よし、世間よし』の三方よしも忘れてはならぬ。わしの生家は畳表や蚊帳を扱う近江商人でな。幼い頃より、いや、正しくは年老いたこの盟友からじゃが、何度も心得を教えられたわ」

「一角の父御は、美濃に出店をしていたのじゃ」

さりげなく助け船を出した。近江と美濃は近いが、念のためと思っている。怪しまれてはならない。

「さよう。わしは生家から武家に養子として入った。たいそうな額の小判が動いたのであろうさ。はるか昔の話ゆえ、よう憶えておらぬがの」

友もうまくごまかした。領地に行ったことのない者ばかりなのは幸いといえた。

が、どこに綻びが出るかわからない。気を張り詰めている。
それでも表情と口調は明るさを装った。
「まあ、気が向いたら藩邸に来て……」
「われらは、藩邸こそが家と考えておりまする」
ひとりが早口で遮る。
「手伝いがいると言われたため、ここに来ただけのこと。用が済めば、すぐに戻るつもりでおります」
「いかにも」
「殿の御用と伺うたゆえ、参った次第」
口々に声をあげた。鵜呑みにはできないが、さりとて偽りとも思えなかった。家老派に取りこむべく、呼びつけた可能性もある。主君の御用となれば、みな素直に足を向けるだろう。突然、藩邸から藩士が消えた理由を、遅ればせながら悟っていた。
（そこそこ使える者がおるようじゃの）
数之進は、あらためて問いかける。
「して、その御用とは？」

「……」

藩士たちは顔を見合わせて、首を傾げるばかり。数之進の周囲に集まった者の中に、理由を知る者はいなかった。

「殿のお世話をする者が、ひとりもおらぬようになってしもうた。及ばずながら、われらが名乗りをあげた次第よ。よけいなことやもしれぬがの。少しの間、藩邸を、農作業や職人の技、あるいは商いを習得する場にするのが宜しいのではないかと、言上申しあげるつもりじゃ」

「そのうえで、殿にご同道するか否か、決めるのがよいのではないか？」

一角が投げた問いかけに、藩士たちは即答する。

「願ってもないことよ」

「是非、言上していただきたい」

強張っていた表情が、わずかではあるものの、やわらいだ。不安で不安でたまらなかったに違いない。自分たちの明日はどうなるのか。江戸に残るべきか、はたまた殿に付いて行くべきか。各々、まだ答えは出ないだろうが、少なくとも明日への道を探す手伝いぐらいはできる。

（われらでもお役に立てるではないか）

胸に、熱いものがこみあげてくる。不安なのは数之進たちも同じだった。思うような働きができるかどうか。天璋院の想いに応えられるか。藩士や民を手助けできるだろうか。

（大丈夫じゃ、やれる）

手応えを感じていた。

「そういえば、御家老のお姿が見えぬようじゃが」

「われらのような老いぼれに、御家老はお目通りなさらぬわ」

一角が答えたとき、

「御家老のお出ましじゃ」

藩士のひとりが駆けこんで来た。

数之進たちは、その場に畏まる。

六

ほどなく家老の松本徳太夫が姿を見せた。年は四十と憶えているが、いささか老けていた。五十ぐらいに見える。若党を何人か引き連れていた。恰幅（かっぷく）のいい男で、

福々しい顔は穏やかな印象を受けた。
（悪人面ではないが）
見た目だけでは判断できない。徳太夫は、畏まる一同をしばらく見まわしていたが、若い一群に目を留めた。
「今宵、荷が届く。十人ほど手伝いが要るのじゃ」
その要請に、すぐさま十二、三人が立ちあがる。二十歳前後の若者ばかりだった。重い荷なのか、それとも遣い手が要るのか。後者の場合、相当、危険な荷ということになる。徳太夫は十人、選んで、広間をあとにした。
「われらは用無しか」
藩士のひとりが言った。
「なんのために呼ばれたのであろうな」
藩主の友春を孤立させ、すべての藩士を家老派に取りこむためだったが、よけいなことは口にしない。生計をたてる術を見つけるとともに、ひとりひとりが、考える力を身につけねばならなかった。
「呼ばれた理由を考えてみるのがよかろう」
と、老友を見やる。

「わしはちと用足しじゃが、おぬしはいかがじゃ」
「参る。年を取ると、近うなってかなわぬわ」
二人一緒に立ちあがり、広間を横切って行った。あれで家老の用は終わったのか、雇われ藩士といった様子の者たちもまた廊下に出る。広間に残ったのは、下屋敷に呼ばれた理由を考える藩士たちだった。
「はじめは二つに分かれているように見えたが、実は三つじゃな」
数之進は、一角に囁いた。
「ひとつは家老派、ひとつは雇われ藩士派、そして、もうひとつは藩主派か」
「いかにも。ここに呼ばれた理由を考えこむあたりは、頼りないことこのうえない。なれど、ろくに働かずとも飯だけは食えていたからのう」
「ここからが意地の見せどころじゃ。真の侍になるか、飼い犬のまま朽ち果てるか」
「飼い犬とは、手厳しいの」
「そうか。これでも遠慮しておるのじゃが」
参ろうか。と、一角が軽く肩を叩いた。早く下屋敷の様子を調べなければならない。のんびり酒を飲んでいる暇はなかった。いちおう厠に足を向けたが、廊下の

いたるところに見張り役のような者が立っている。
「ものものしいことよ」
「阿呆めが。みずから露呈しているようなものではないか」
かまわず歩を進めたが、前方を塞がれた。家老の徳太夫に従っていた若党のうちの三人が、通すまいと廊下に立っていた。
「ご隠居。おとなしく広間にお戻りいただけぬか」
ひとりの言葉に、数之進は顔をしかめる。
「いや、ちと、もよおしてしもうてな」
「わしもじゃ。厠に行くのが駄目だと言うならば、廊下で用を足すしかない」
「う、いかん。漏れそうじゃ」
「我慢できぬ。わしはここでする」
袴をさげようとした一角を、若党たちは慌てて押さえつけた。
「待て、ならぬ」
「ここは厠ではない」
「厠はどこじゃ」
数之進は、あくまでも老耄(ぼけ)かけた年寄りのふりをする。示された方向に、一角と

歩いて行った。背中に若党たちの視線が張りついている。ひとりはなにげなさを装いながら、付いて来た。

「厳重じゃの」

一角の言葉に、小さく頷き返した。

「あの中におると、われらはいやがうえにも目立つ。年寄りはおらぬからの。国許から来たという話にも、疑いをいだいているやもしれぬ」

「はて、我が孫、勝利はいずこにおるのやら」

「大広間にはおらなんだな」

数之進は先に厠へ入った。用を足しながら、次の動きを考える。見張りがいては思うように探れない。

「深更では、なにも見えぬ。出入りしている商人だけでも、わかればよいのじゃが」

厠を出ると、一角が手水鉢のところで待っていた。

「この屋敷の広さは、約五千五百坪。藩邸の二倍以上じゃ。造りはだいたい同じだが、蔵の数が多いように思える」

差し出された手拭いで手を拭いた。一角はここに着いた時点で、素早く屋敷内の

配置を確かめている。
「蔵の位置はわかるか」
「むろんじゃ」
「とにかく蔵を調べて……」
数之進の目は、前方の座敷に向けられた。障子が開いて、だれかが出て来る。年は三十前後、商人と思しき風体をしていたが、商人を装っていることも考えられた。数之進はつい見つめている。
（はて、あの横顔。だれかに似ているような気が）
育ちのよさそうな品のいい顔立ちをしていた。こめかみのあたりが、ちりちりと疼いている。
「早く広間に戻れ」
若党に告げられたが、動かなかった。廊下に出て来た商人ふうの男は、座り直して、丁重に辞儀をする。
「では、てまえは、これで失礼いたします」
「〈吉田屋〉さんをお送りしろ」
座敷から憶えのある声が応えた。家老の徳太夫だった。廊下に控えていた数人の

若党が、護衛のような顔をして、〈吉田屋〉を玄関まで送って行く。
「大仰なことじゃ」
数之進の呟きに、一角は問いかけを返した。
「なにを商っている〈吉田屋〉であろうな。聞き憶えはあるか」
「いや、憶えはない。商人も『現れては消える』の繰り返しじゃからの。あるいは屋号を変えて、以前とは別の商いをしているのやもしれぬ」
「尾行けるか」
自信たっぷりの友に、小さく首を振る。
「われらに尾行者の役目は、もはや、できぬ」
「なにを申すか。おまえはともかくも、わしは……」
「〈吉田屋〉を調べるとしよう。そこから家老の行状や、この屋敷の賑わいぶりを調べるのが得策よ」
「では、横浜じゃな」
「わざわざ行くまでもあるまい。江戸でも話を得られる場所があるではないか」
数之進は意味ありげな目を向けた。昔を髣髴とさせる厠の密談となっていたが、いまや二人の会話を盗み聞く者などいない。見張り役は少し離れた場所で様子を

窺(うかが)っていたが、近づいて来る気配はなかった。

「ははあ、なるほど。あそこか」

それでも一角は警戒して、地名や巷の俗称を口にしない。数之進は頷いて、続けた。

「ついでに新しい話を得るとしようか。とにかく、いったん本材木町の家に戻るのがよかろうな。勝利が来るやもしれぬゆえ」

「百合は藩邸の奥御殿から離れられぬであろうの。勝利の連絡役は無理やもしれぬ」

「うむ」

答えて、数之進は、玄関に歩を進めた。見張り役は相変わらず目を光らせている。二人が玄関で履き物を履き、表門の潜り戸から外に出るまで付いて来た。自尊心を刺激されたのだろう、

「われらが、かように恐ろしいか」

一角は満足げだった。背後では見張り役が、潜り戸から顔を突き出している。戻って来るのではないかと懸念しているようだった。

「自惚(うぬぼ)れもたいがいにせい。老いぼれを恐れる者などおらぬわ」

歩き出した数之進を、盟友が慌てて制した。

「恐れる者がいるようじゃ」
「なに？」
闇に目を凝らしたとたん、黒い人影が襲いかかって来た。一角は数之進を後ろに押しやり、前に出る。すでに刀を抜いていた。
鈍い激突音がひびきわたる。
一角は相手が突き出した匕首を刀で受け止め、弾き返していた。幾度となく修羅場をくぐり抜けている。老いたりと雖も、実戦となれば気合いで勝っていた。右側から突き出された匕首は、持ち主の手首ごと斬り捨てる。
「あぎゃっ」
手首から先を失った男は、尻もちをつくように座りこんだ。それで怯むかと思いきや、背後の闇からも二人が出現する。遅ればせながら数之進も刀を抜いた。一角と背中合わせになって応戦する。
「かたがたお出合いめされい。御家老に仇なす不届き者でござるぞ」
匕首を受けながら叫んだ。だれを狙った刺客なのかはわからない。数之進たちを待ち伏せしていたように思えなくもなかった。が、狙いは家老だと断定されれば、助太刀しないわけにはいかなくなる。

「狼藉者じゃ」

先刻の見張り役が、叫びながら加わった。門番も若党に知らせている。にわかに表門の内側が騒がしくなってきた。

「御家老にお知らせしろ」

「生け捕りにして、命じた相手を吐かせるのじゃ」

形勢不利と察したに違いない。

「退け」

ひとりの命令で、刺客たちは闇に消える。手首を失ったひとりを捕まえようとしたが間に合わない。

(狙われたのは、われらか。それとも)

数之進は下屋敷を振り返る。

「追え」

「逃がすでない」

若党たちが、刺客を追いかけて行った。数之進たちを狙ったのか、あるいは家老の松本徳太夫だろうか。

「ここも戦場か」

と、刀を鞘に収める。斬り落とされた右手が、月明かりを受けて、置物のように転がっていた。

第五章　築地の梁山泊

一

「狙われたのは、おそらくわれらであろう」

数之進は言った。

「腰の曲がった年寄りが出て来るのを、待っていたように思えてならぬ。名を問いかけるでもなし、いきなり襲いかかって来たからの。おぬしの言うていた『尾行けていた者』は、彼の者たちに相違ない」

ひと晩、下屋敷に泊まったため、思いのほか無駄な時を使ってしまった。屋敷を出たのは七つ（午前四時）の鐘が鳴る頃だったが、駕籠を呼んでもらい、一度、藩邸に帰る形を取っている。騒動の経緯をいちおう健之助たち三人に告げていた。

〝御家老を狙うた刺客でござるか？〟

五十嵐健之助の問いかけに、「わからぬ」と答えて、藩邸を出ている。美濃守友春の警護に力を入れるよう、助言したのは言うまでもない。できれば本材木町の家に寄りたかったのだが、それは断念して、真っ直ぐ築地に向かっていた。昨夜も一角に鍼を打ってもらったお陰で、今はだいぶ恢復している。駕籠を使わなくても、どうにか歩けた。

「数之進。はっきり言うておくが、腰の曲がった年寄りは、おまえだけじゃ。わしは曲がっておらぬ」

一角は歩きながら、わざとらしく背中と腰を伸ばした。

「見栄なのか、意地なのか。もはや、わからぬが、まあ、どちらでもよいわ」

数之進の呟きを、友は鋭く聞き咎める。

「なんじゃと？」

「いや、おぬしは若いと言うただけよ」

ごまかして、昨夜の騒ぎを反芻する。

「それにしても逃げ足の速い連中であったな。残された手がかりは、おぬしが斬り落とした右手首のみ。年寄りと思い、侮ったのであろうが、総勢、五人だったゆえ、

助かったわい。あれが十人であれば、危なかったやもしれぬ。次はどうなることか」

「なぁに、返り討ちにしてくれるわ。下屋敷の若党めが、助っ人など要らなんだものを、よけいな手出しをしおって」

一角の強がりには耳を貸さない。

「おかしい」

ふと出た言葉に、友は目を輝かせた。

「出たな、二度目の『おかしい』が。して、此度はなんじゃ。なにが『おかしい』と思うたのじゃ」

立ち止まった友につられて、数之進も足を止める。

「あの刺客は、おそらく御家老が放ったものではあるまい。仮にそうであったとすれば、若党はわれらを助けなかったはずじゃ。見て見ぬふりができたのに、すぐさま飛び出して来た」

「あたりまえではないか。われらが日本（やまと）御算用者であることは、だれにも知られておらぬ。美木藩の者とて、気づいてはおらぬであろう。刺客を放つわけがない」

「いや、待て。こうも考えられるな。刺客を放ったのは、江戸家老の松本徳太夫。

なれど若党たちには、知らせが行き届いていなかった。見て見ぬふりをせよという命が、伝わっていなかっただけやもしれぬ」

「考えすぎであろう。襲われた話を聞いた家老は、青ざめていたではないか」

「わしが偽りを述べたからな」

数之進たちは騒ぎの後、徳太夫に目通りを許されていた。その場で賊は家老の名を出したと、虚言を告げたのである。

〝まことか〟

徳太夫は、みるまに顔色を変えた。あのときの狼狽えぶりが、脳裏にやきついている。よほど後ろめたいことがあるのではないか。襲われる心当たりがあるのではないか。数之進はそう感じた。

「やはり、家老ではないな」

「違うであろう」

「では、だれじゃ？」

一角の目を真っ直ぐ見据える。

「われらを狙うたのは、だれであろうの」

「わからぬ」

あっさり答えた。

「おまえにわからぬことが、わしにわかるわけがない。相手はわからぬが、狙われているのは確かであろうな。なんぞ、こう、わくわくしてくるではないか、ええ、数之進よ。血がたぎるような気持ちを覚えぬか」

「能天気な爺じゃ」

数之進はぼそっと告げ、ふたたび歩き出した。時刻は午近くだろう。二人は相引橋を渡って、築地の一郭に足を踏み入れた。

明暦三年（一六五七）の江戸大火の折、横山町二丁目にあって焼失した西本願寺を、木挽町の干潟を埋め立てたところに翌年、遷している。これが築地の草創であると言われていた。大きな武家屋敷があるためか、さほど景観が変わっているようには見えない。

延々と続く海鼠塀が崩れている箇所もあるが、母屋までは遠くて、屋敷の様子は窺えなかった。江戸湾から吹きつける風が、潮の香を運んでくる。

「おまえは用心深すぎるのよ。能天気なぐらいでなければ、此度の御役目は務まらぬわ」

隣に並んだ友の言葉は耳に届かなかった。

「静かじゃのう」
白かった海鼠塀には、早くも汚れが目立ち出していた。人が住まなくなったとたん、屋敷は命を失い、荒れ始める。武家屋敷の先、東の海辺には町屋がもうけられているのだが、子らの声やざわめきはいっさい聞こえて来なかった。みな逃げてしまったのかもしれない。
「だれもおらぬのであろうか」
心細げな問いかけが出た。
「おらぬ方が、われらは安心できる」
一角は、意味ありげな答えを返して、さりげなく背後を見やっている。数之進も危うく振り返りそうになったが、こらえた。
「また尾行けられているのか」
「うむ。気配が在る」
「このあたりに潜んで、待ち伏せるか」
早くも手に汗が滲み出ていた。昨夜に続いての襲撃となれば、平静ではいられない。対する一角は鷹揚に構えていた。
「案ずるな、わしが付いておる。昨夜の働きを見たであろう。抜く手も見せずに、

見事、賊の右手首を斬り落としたではないか」
「抜く手は見えたぞ」
「なんじゃと？」
「気にするな、年寄りの独り言じゃ。おお、あれは鷗であろうか」
数之進は、露骨に話を変えた。青い空を気持ちよさそうに、鷗らしき鳥が飛んでいる。江戸湾が近いことを実感させる〝絵〟だった。
「水の便がよいからであろうな。海辺の町屋には、商人が見世や蔵を構えているとか。横浜を拠点にする新興商人やもしれぬ。下屋敷に現れた〈吉田屋〉も、鉄砲洲に出店を持っておるやもしれぬ」
「早う調べねばならぬ。行こう」
一角に促されて、目的地に足を向けた。江戸を歩く度、見たくない現実を突きつけられる。知りたくない事実を思い知らされて、絶句することもしばしば。今も言葉を失い、うちひしがれていた。
「受け入れなければならぬ」
一角が諭すように言った。いつになく優しげなひびきを帯びていた。
「われらには、まだ御役目があるではないか」

「わかっておる」
答えて、ともすれば重くなりがちな足を心の中で叱咤する。一角が思い出したように言った。
「そういえば、『謎の助っ人』。昨夜は現れなんだな。わしの腕を知るがゆえに相違ない。斃せるのがわかっていたのじゃ」
「おぬしの腕前を知る者、か」
数之進の言葉で気づいたのか、
「む」
一角はふたたび足を止めようとしたが、数之進は歩き続けた。友が慌て気味に追いかけて来る。
「やはり、あのお方か」
早口で問いかけた。
「そうであってくれれば、かように嬉しいことはない。なれど、危険な道に引きずりこんでしもうたのではないかという、後悔もある。申し訳ないことを……」
「おお、ようよう苦労性と貧乏性の業が戻ったな。それでこそ、数之進じゃ。我が盟友が復活したわい」

友の揶揄で、思わず笑みが浮かんだ。

「一角」

「悪い方、悪い方に考えるのもまた、おまえの悪い癖よ。出たとこ勝負が、わしの持ち味じゃ。能天気と言われようとも、この心持ちは失わぬ」

「然り」

力強く答えた。盟友の明るさに、どれだけ救われてきたことか。これも昔と変わっていなかった。

「では『築地の梁山泊』に、いざ、参ろうか」

「おう」

数之進は拳を固く握りしめる。目指す屋敷はすぐそこだ。自然に足が速くなっていた。

二

『築地の梁山泊』とは、佐賀藩士から新政府の高官となった大隈重信に与えられた屋敷である。西本願寺の北西側、道を隔てた場所にある屋敷だが、もとは旗本の屋

敷として使われていた。

伊藤博文、井上馨、山縣有朋といった者をはじめとして、新国家建設に大志をいだく青年たちが数多く出入りしていた。その中にあって数之進と一角は、異色の『昔の青年』だったかもしれない。

「生田殿、早乙女殿」

訪れた二人を、若い書生――守谷総司が出迎えた。

「かれこれ十日ぶりではございませんか。生憎、本日も大隈先生はお留守です。残念がられると思いますよ。お二人と話がしたい、色々ご意見を伺いたいと、仰せになっておられましたから」

親しげに言った。数之進は恐縮するばかりだった。

「ご意見を伺うのは、それがしの方でござる。大隈先生とは、一度、お目にかかっただけだというのに、快う屋敷への出入りを許してくだされた。ありがたいことと思うておりまする」

突然、横浜の家に連絡が来たのは、二か月ほど前だったろうか。一角とともに訪れたのだが、日本の明日について、熱く語る姿が印象的だったのを憶えている。

「先生は、お助け侍の噂を耳にしておられたのです。武器は無私の心と千両智恵。

民を助けるために己を捨てて、取り組む。かつて幕府御算用者としてご奉公なされた話が、心に残っていたとか。是非、一度、お目にかかりたいものよと仰せになられましたので、使いをやった次第です」

「遠い話でござる」

偽りだったが、今、打ち明ける気持ちはなかった。日本御算用者として、天璋院の命を受けた。

(どこまでやれるかわかりませぬが、お助け侍の気概を持ち、取り組む所存でござる)

と、心の中でのみ告げた。

「玄関先で失礼いたしました。どうぞ、おあがりください」

「は」

二人はすぐに奥の座敷に案内された。敷地の広さは約千五百坪、もとは火事場見廻りの職を賜っていた三千石の旗本の屋敷である。母屋は三百坪ほどもあるが、ほとんどが明け渡されたときのままだった。

「ご隠居」

奥の座敷にいた若者たちが、二人を歓迎してくれた。

「お待ちしていました」
「いつおいでになるか、いつおいでになるかと、首を長くしておりましたよ」
「さっそくですが、政府が民に兎を飼うよう薦めたあれは、いかがお考えですか」
書生見習いを含む三人の若者に取り囲まれる。一角は苦笑して、さっさと縁側の方に移動した。茶の支度をするためだろうか、守谷はいったん席を外した。
「兎か」
数之進は言い、逆に問い返した。
「さて、政府はあの兎を、いかように扱うつもりなのか。毛は毛皮に使い、肉は食べるというような考えあっての政策か」
守谷との会話よりも、くだけた口調になっている。それとともに逃げた兎を追いかけて来た者の姿が甦っていた。飼うのを奨励しているからには、当然、用途も決まっていると考えるべき状況だったが……。
「それなのです」
兎の問いかけを発した若者が答えた。
「わたしも大隈先生にお訊ねいたしました。ところが、まだなにも決まっていないというお答えが、返って参りまして」

「世の中すべてが、混乱しておるからの」
「ひと言で片付けないでください」
他のひとりが声をあげる。
「武家屋敷を壊した後に、一刻も早く田畑を作るべきだと、わたしは考えております。田圃で米、畑で野菜を作れれば、とりあえず、食うには困りませんから」
「ふむ。よいことを言うた。まさに『作れれば』よ」
愉しげに告げた数之進を、一角が皮肉な笑みを浮かべながら見守っている。意味ありげな言葉に不審を持ったのだろう、
「どういう意味ですか」
ひとりが訊いた。
「田畑の育成を簡単に考えておるようだがの。今まで屋敷が建っていた場所を、田畑にして、すぐさま作物が実ると思うておるのか」
「それは……わかりません」
声が小さくなった仲間を助けるように、もうひとりが意見を出した。
「肥料を、そうだ、下肥を撒けば、よいではありませんか。肥料さえ撒けば、土地は肥えるでしょう」

「考えは悪くない。それでは下肥とは、かようにして撒くものか」
数之進が訊き返すと、
「肥溜に溜めた人糞を撒きます」
自信たっぷりな答えが返った。
「溜めた人糞をそのまま使うのか」
さらに訊いた。
「はい。いや、薄める、かな？」
「間違ってはおらぬ。なれど、薄める話はあとにしよう。まずは肥溜じゃ。人糞と雨水、またはどぶの水でもよい。これを混ぜるのじゃ。人糞と雨水などの水は、同量にしなければならぬ。これを雨が入らないように作った肥溜に入れて、混ぜる。ときどき掻きまわしながら、発酵させること六十日」
「六十日」
驚きの声をあげたひとりを、別のひとりが継いだ。
「二か月もかかるのですか」
「さよう。百姓は、小便は人の胃ノ腑で醸造される酒、大便は酒の粕だと言うておるほどじゃ。きちんと発酵させ、夏と冬に合うた薄め方をすれば、これ以上の肥料

はない。田畑にはなくてはならぬ命のもとよ」
「夏と冬では、薄め方が異なるのですか」
と、薄める云々を口にした若者が問いかけた。
「むろんじゃ。夏は薄める水の量を多くする。暑さで疲れておる稲や野菜に、強すぎる下肥はご法度よ。説教くさくなるやもしれぬが、人を育てるのと変わらぬ。一に真心、二に気遣い、三に余裕じゃ」
「余裕とは？」
即座に問いかけが返る。数之進はこのやりとりが、たまらなく好きだった。一角は刀の戦いで血がたぎるようだが、数之進は若者との会話で血が熱くなる。
「年がら年中、きりきりしておっては、人も作物も育たぬ。人はむろんじゃが、作物も氣を感じるからの。世話をしなければ、雑草は生え放題、世話をしすぎれば、下肥のやり過ぎで枯れる。たやすいことではない」
「なるほど」
「下肥を作るだけでも、二か月だからな」
「政府が掲げている『東京の土地を田畑にする』という案も、兎同様、うまくいかんかもしれんな」

三人の会話を、数之進は受けた。

「兎よりは、牛の方がよい。肉は牛鍋、乳は牛乳になる。牛乳は旨い。もっとも、わしと一角は、雪菓子（ゆきがし）の方が好きじゃがな」

「流石はご隠居。雪菓子をすでに味わっておられるとは」

ひとりが感心したように言った。雪菓子とは、アイスクリームのことである。数之進は一角と横浜で何度もこれを味わっていた。

「シャボンはいかがですか。お使いになりましたか」

別の若者が訊いた。

「一度だけじゃが買うた。確かにさっぱりするが、いかんせん、値段が高すぎる。シャボンは他でも話したが、我が国ではまだまだよ。なれど、いずれ売れるようになるのは間違いあるまい」

「目の玉が飛び出るような値段であったわ」

一角が話に割りこんでくる。

「わしは、糠袋（ぬかぶくろ）で充分よ。亡き女房も糠袋だけじゃったが、それはそれは美しい肌をしておった。化粧をしなくとも、綺麗であったわ」

「惚気（のろけ）ですか、早乙女殿」

茶を運んで来た守谷も話に加わった。

「さよう。わしも数之進も、良き女房に恵まれた。みなも早う所帯を持て。子ができれば、働くことにより強い生き甲斐を覚える。また良き女房は、明日への道を開く手助けもしてくれよう。論戦するのもよいが、伴侶を得るのも大切じゃぞ」

「相手がいないだけです」

「相手にしてもらえないだけの間違いであろう」

「確かに」

笑い合った後、

「それで、本日の御用は、なんですか」

守谷がさりげなく訊いた。二人の様子から察したに違いない。大隈が書生の纏め役に使うだけあって、頭がきれた。

三

「気になる商人がいるのじゃ」

数之進の返事に、守谷はすぐ問い返した。

「なんという者ですか」
「屋号は〈吉田屋〉よ。名はわからぬ。なにを商うておるのかも定かではない。年は三十前後だったかの」
年の割に目がいい友に、より正しい答えを求めた。
「さよう。年は三十前後、右の唇の横、このあたりに、黒子があった」
と、指で黒子の位置を示した。
「はて、黒子などあったか」
「おまえの霞む目では、無理だったやもしれぬがな。間違いなく黒子があったわ。忘れてはなるまいと、頭に刻みこんだゆえ、確かじゃ」
「生田殿の商いに、関わりのある話ですか」
守谷が一歩、踏みこんだ。
「そんなところよ。思うところがあって、本材木町に家を借りたのじゃ。新しい商いをと思うていた矢先、〈吉田屋〉の話が耳に入った次第。なにを商っておるのか、ちと気になってな」
「屋号だけは聞いたことがあるな」
ひとりの言葉に、もうひとりが同意する。

「吉原で派手に遊んでいると耳にしました。こういうご時世ゆえ、吉原通いは目立ちますからね。道具屋と聞いた憶えがありますが、今ひとつ、自信が持てません」

「調べましょう」

守谷が請け合ってくれた。

「どの程度、わかるかは保証できませんが、とにかく調べてみます。生田殿と早乙女殿には、なにかとお世話になっておりますから」

横浜の話や珍しい付け届けが、思いのほか、功を奏していた。それでも数之進は申し訳なさでいっぱいになる。嘘をつくのは得意ではないし、できれば真実を話したいと思っている。

「すまぬ」

心からの謝罪が出た。

「いえ、気になさることはありません。大隈先生にも、お二人からなにか相談されたときには、力になるようにと、申しつけられております。お助け侍には、きっと考えがあるはずだから、と」

「なんと」

「身に余る光栄じゃ」

一角は立ちあがって、深々と辞儀をした。大隈がそこにいるかのごとき敬意の表し方だった。数之進も座したままで一礼する。

「そういえば」

腰をさすりながら話を続けた。

「先日、御用盗なる賊に出くわしてしもうてな。年を考えずに後を尾行けたのが間違いのもとよ。危うく始末されるところであった」

「後ろ手に縛りあげられての。尾行けるのを命じたのがだれか、まずは吐かせてから、などと言うていたわ」

言葉を継いだ一角に、守谷が疑問を投げた。

「つまり、御用盗の一味を、調べている者がいるのですか」

自問のひびきがあった。

「警戒しているだけやもしれぬが、探っている者がおらぬとは言いきれぬな。普通に考えれば、捕亡方の役目じゃが、彼の者たちが真面目に取り組むとは思えぬ。はてさて、だれが賊を探っているのか」

「わしは、警戒しているだけという説を取る。今少し時を待つべきだったのではあるまいか。さすれば、頭が現れたやもしれぬ」

「その前に、われらの首が飛んでいたわ」
二人の会話に、守谷が割って入る。
「どうやって逃げたのですか」
「それよ。謎の助っ人が現れての。ばった、ばったと斬り捨てた後、幽霊のように消えた次第。まことの幽霊だったのでは……」
「幽霊嫌いゆえ、なんでも幽霊のせいにするのじゃ」
友が小声で遮った。小さな笑いが広がる。
「東京のあちこちに、幽霊屋敷が現れています」
「ここも噂にのぼっているとか」
「一番の出没場所は、寛永寺でしょう。なんと言いましても、あそこは……」
最後のひとりを、守谷が制した。
「やめないか」
語気の強さに、見習いの書生はうなだれる。
「すみません」
「血腥い騒ぎは、江戸から奥州に移った由。榎本武揚が率いる海軍が、江戸を発った話は聞いたがの。会津の様子は、いかがであろうか」

数之進はさりげなく情報収集をする。ここに来るさまざまな理由のひとつがこれだった。最新の正確な戦況が、素早く入手できるのだ。

「政府軍は、会津鶴ヶ城の城下まで攻め入ったそうです。激しい戦闘で、城下は火に包まれたとか」

守谷の言葉を、見習いのひとりが継いだ。

「その火を見て城が陥ちたと勘違いしたのでしょう。二十人の少年隊士が、集団自決したと聞きました」

世に言う白虎隊の悲劇である。ここまでの話は、数之進も入手していたが話の腰を折るつもりはなかった。

「鶴ヶ城も陥ちたのか」

一角が膝の上の拳を、ぐっと握りしめる。知りたいのは、そこから先の話だった。会津藩主、松平容保は、幕府を支え続けた忠臣中の忠臣。江戸城無血開城の後、すぐさま会津に立ち戻って、庄内藩と手を結び、徹底抗戦の構えを取っていた。

「いえ、城はまだ無事なようですが」

曖昧な守谷の言葉には、早く降伏すればいいのにという、願いのようなものが感じられた。同族同士の争いを、これ以上、続けるのは得策ではない。

数之進とて同じ思いだった。

「籠城戦か」

「長引くやもしれぬの」

一角がぽつりと言った。

「榎本殿が率いる艦船は、どのあたりであろうか」

数之進は訊かずにいられない。旧幕府軍の者に、『殿』をつけてはならぬと、頭ではわかっているのに敬称をつけていた。簡単には割り切れない。

「そろそろ仙台に着く頃かもしれません」

「米沢藩と仙台藩は、いまだ降伏しておらぬ。そうなると、次は会津から仙台に移るやもしれぬな」

複雑な思いにとらわれた。会津から戦場が移るのはすなわち、会津が降伏したことを意味する。戦火が仙台に移ったとなれば、榎本武揚の一行は、そこに艦船を停泊させ、決戦となるだろう。

「仙台兵はいかがでしょうか。善戦しますか」

ひとりの問いかけに、数之進は首を振る。

「駄目であろうな。仙台兵の渾名は『ドンゴリ』じゃ。ドンッと大砲が一発、撃た

れると、五里、逃げると言われるほどよ。すぐさま逃げ出すであろう」
「対する薩摩兵は、関ヶ原の折、いざとなれば、『すてかまり』という戦い方をするほどの豪胆な気質。時は変われど、気構えは変わらぬ。戦えば、官軍の勝ちとなるのは間違いあるまい」
「『すてかまり』とは、戦場で退却するとき、一部の兵を残しておき、近づいて来る敵兵を遠矢や鉄砲で狙撃させるという、捨て身の戦法よ」
数之進は、友の言葉を補足した。
「その話は聞いたことがあります」
守谷が告げる。
「残った兵が全滅したときには、さらにまた何名かが『すてかまり』として敵兵を狙撃するとか。凄まじい戦法だと思いました」
「いずれにしても、血で血を洗う戦は、まだ終わらぬ」
思わず深い吐息をついていた。
少しの間、奥座敷は沈黙に包まれる。自決した会津の白虎隊は、今、ここにいる若者たちよりも年下だったかもしれない。彼の者たちが守りきれなかった会津の鶴ヶ城が陥ちれば、戦いはさらに北へ移るは必至。そこに榎本艦隊が加われば、はた

して、どうなることか。軍艦の大砲が炸裂し、大勢の死者が出る――。

「われらに力の出る言葉をいただけませんか」

守谷が不意に申し出た。

「正直、気が滅入ることも、しばしばです。明日に向かって道を切り開くべく、日々、精進しておりますが」

旧幕府軍と新政府軍の戦は、だれにとっても辛い戦でしかなかった。たとえ新政府軍が勝ったとしても、ここにいる若者たちは喜ぶまい。早く終わってくれと、みな心の中で祈っている。

「ふうむ」

数之進は、守谷が差し出した矢立と紙を受け取った。ふと頭に浮かんだ孟子の語を、さらさらと記して、手渡した。

「窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くす」

守谷が読みあげた語の訳を、ひとりが口にする。

「困窮したときは自分のありかたをしっかりとさせ、地位を得たときは自分だけではなく他人のありかたもしっかりさせる、か」

「まず自分、そして、次は他人か」

「『天下を善くす』。うん、いい言葉だ」

継いだ二人もまた満足げに頷いている。暗くなった心に、わずかではあるものの、光が射したに違いない。数之進に向けられた眸には、希望の灯がともっていた。

「われらも心がけようと思います。薩摩兵のように、我が身を捨てられるほどの覚悟があれば別ですが、かような覚悟までは持てません。まずは自分をしっかりさせ、次に他者を助ける。それが『天下を善くす』ことに繋がるのではないかと思います」

守谷の言葉に送られて、二人は大隈邸を出た。

四

本材木町の家へ近づくにつれて、数之進は不吉な胸騒ぎを覚えた。つい胸に手をあてている。その姿に気づいたのだろう、

「おお、とうとう目覚めたか」

一角が揶揄するような言葉を投げた。

「不安げなその表情には、苦労性と貧乏性の業が浮かびあがっておる。して、いか

がしたのじゃ。業が疼いた理由はわかるか」
「いや、読み取れぬ。心ノ臓がどきどきするばかりではのうて、首筋のあたりも、なにやらざわざわしてきた。おぬし、ちと様子を見て来てくれぬか」
「承知」
やけに張り切っていた。爺なりの弾むような足取りで、今は〈にしき店〉となった長屋の木戸口を通って、路地に入る。が、すぐに引き返して来た。
「われらの家には、だれもおらぬぞ。向かいの家は人の気配があるがの。華絵と薫子が、戻っているのやもしれぬ」
「さようか」
答えて、家に足を向けたが、不吉な胸騒ぎはおさまらない。一角が開けたままにしておいた家の土間に、おそるおそる足を踏み入れた。
「早うあがれ」
友に押されるようにして、手前の座敷にあがる。差し出された手拭いで足を拭き、三畳間に腰を落ち着けた。
「ふう。気のせいであったか。いまだ苦労性と貧乏性の業は、勘働きを取り戻しておらぬようじゃ」

「まだわからぬぞ。油断するでない。まあ、とりあえず、茶を淹れるゆえ、一服しようではないか」

「脅かすな、一角。寿命が縮まるではないか。いつお迎えが来ても、不思議ではない身じゃ。わずかな事柄が命取りに……」

はっとして言葉を切る。向かいの家の戸が開き、華絵と薫子が出て来た。傾きかけた陽を受けて、髪に挿した銀の簪が鈍い輝きを放っている。消えかけていた不吉な胸騒ぎが、ぐわーっと身体中に広がった。

「い、一角」

いつもの座りくらみを覚えた。差し出した手を、一角が握りしめる。膝で座敷にあがって来た。

「しっかりせい。傷は浅いぞ」

「いや、思うているよりずっと深い。あれを見よ」

皺だらけの細い指で、娘たちを指した。華絵はもじもじしながら、そして、薫子はつんと顎をあげている。それぞれの気質を表すような態度だったが、髪に銀の簪を挿しているのは同じだった。

「ややややや！」

一角が大声を張りあげる。
「華絵、薫子。その簪はいかがした、ええ、まさか買うたわけではなかろうな」
ぽんと膝を打って、続けた。
「なるほど、得意の色香によって〈十六夜堂〉の主から、せしめたか。でかしたぞ、二人とも。無料ならば言うことはない」
厭味たっぷりだったが、二人はさも不満げに訴える。
「いやな角翁様」
すねたような華絵を、薫子が受けた。
「わたくしたち、無料でいただいたりはいたしません。お金はあとでお支払いいたしますと申しました」
「お安いんですのよ、わたくしのが一分。薫子さんのが一分二朱」
「あら、わたくしのも一分でよいと言いましたわ」
「そうでしたっけ？」
「ええ。いずれにしても、破格のお値段。ここまで安くすることはないそうです。似合う方にこそ、挿していただきたいと言われました。それゆえのお値引きだとか」

ねえ、と、小首を傾げて顔を見合わせる。このうえなく可愛らしい仕草だった。数之進が五十若くて、赤の他人であれば、多少、心が動いたかもしれない。しかし、今はただ呆れ返っていた。

「一角よ」

「苦労性と貧乏性の業、甦ったようじゃの」

「うむ。喜べる状況ではないが」

目眩を振り切るように、軽く頭を振って、目をあげる。とたんに二人が、座敷にあがって来た。

「数翁様。お願いします」

「簪も、わたくしたちに挿してほしいと言うております」

「たわけ！」

数之進は恫喝した。びりりと空気が震えた。二人同時にきゃっと小さく悲鳴をあげて、首をすくめた。

「そなたたちの家は、横浜の生田家より、それぞれ百両ずつの借金をしておる。かようなときに、簪なぞ、買えるわけがない」

「でも、あれは父上が」

「そうです。わたくしたちが作った借金ではありません」
ふたたび「ねえ」と顔を見合わせそうになったが、
「馬鹿者！」
仁王立ちになって恫喝した。
「かようなときこそ親子は、力を合わせねばならぬ。それを無関係だと言い放つその心根が……」
ふらりとよろめいた数之進を、一角が慌て気味に支えた。
「数之進」
「だ、大事ない。立ったのが、ようなかった。座りくらみであれば、なんなくやり過ごせたものを」
座り直して、気持ちを落ち着かせる。華絵は窺うような目をしていたが、薫子はつんとそっぽを向いていた。
（悪いと思うてはおらぬな）
我知らず吐息をついている。苦労性と貧乏性の業が復活するとともに、奈落に沈みそうな吐息も甦っていた。
「なんぞ、商いをするがよい」

提案したが、
「できません」
二人同時に答えた。
「人のいないこの東京で、なにをやればよいのですか。ただ漠然と『商いをせよ』と仰せになられましても困ります。鯉のいない池で釣りをするようなものではありませんか」
猛然と反論した薫子に、数之進は笑みを向ける。
「今の喩えは面白いの。確かに人は少ないが、魚河岸や青物市場で働く者がいる。また品物を仕入れるために客も集まって来る。いかがであろうな。彼の者たちに弁当を売るという商いは」
「流石は数之進。良き考えじゃ」
同意したのは一角のみ。二人は頬をふくらませていた。
「料理など、したことがありません」
「わたくしは、おばあ様に教えていただきました。作れますが」
「作りたくないか」
薫子の言葉に、問いかけを返した。

「いえ。作ったところで売れるかどうか」
「旨ければ、売れる。不味ければ、売れぬ。それだけのことよ。ははあ、なるほど。薫子は、腕に自信がないと見ゆる」
挑発すると、きつい目で睨みつけられた。
「自信はあります、おばあ様直伝の技ですから。それに『薫子は舌が鋭い』と、いつも褒められて……」
「よし、では決まった」
数之進は手を打った。
「すまぬが、一角。材料を揃えてくれぬか」
「まかせておけ」
「飯は握り飯でよかろうが、総菜を入れる総菜箱のようなものは、どうしたものか。折詰では材料が高すぎて、儲けが出ぬからな」
「煮物は汁を切り、漬け物は水気を取って、竹の皮で包むしかあるまい」
「うむ。屋号はそうじゃ。小町娘が商うゆえ〈小町屋〉にするか。〈小町屋〉の小町弁当というのは、いかがであろうの」
「閃き始めると、次々に出るの。名案じゃ」

盛りあがる二人を置いて、華絵と薫子はそっと出て行こうとした。抜き足、差し足という感じだった。

「待て」

数之進は手を広げて「渡せ」と催促する。華絵は俯き、薫子は気づかぬふりをしていたが、二度目の催促で、ようやく簪を渡した。

「まずは生計をたてることよ。材料にかかる金子は、いっとき、わしが用立てる。なれど、借用書を書いてもらうぞ。まずは腕だめしじゃ。一角が材料を仕入れて来るゆえ、ためしに夕餉を作ってみるがよい」

なにも答えずに、二人は向かいの家に戻る。

「ご立腹のようじゃ」

一角は、にやりと笑い、立ちあがった。

「さて、わしは魚や野菜を仕入れて来よう。ついでに魚河岸や青物市場の様子も、見てくるとしようか」

「頼む」

かなり暗くなって来たが、もったいないため、行灯は点けていない。が、向かいの家には、早くも灯が点いている。

「贅沢に慣れた者が、どこまで変わるか」
「いや、変えられるのは、われらの方やもしれぬぞ」
言い置いて、一角は出て行った。入れ替わるようにして、大屋の彦右衛門が戸口に姿を見せる。

五

「生田様に、お客様です」
彦右衛門は、長身の男を紹介した。
「捕亡方の与力、高樹十郎様です」
「高樹です」
と、頭をさげて、土間に入って来た。辞儀だったのか、頭がぶつかるから下げただけなのか、よくわからない。
年は三十なかば、制服なのだろうか。上着に筒袴という格好をしている。荒んだ暮らしをしているのかもしれない。野良犬のような嫌な目をしていた。江戸から東京に変わるという激変の後、市中取締隊として、町奉行所の役職のまま、新政府

に奉公している。が、楽ではないのかもしれなかった。
「生田数之進でござる」
数之進は挨拶しながら、大屋に席を外してよいと目顔で示した。やりとりが聞こえたのだろう、薫子が少しだけ戸を開けて覗いていた。
（またか）
苦笑いして、告げる。
「狭いところでござるが、おあがりくだされ。今、茶を淹れますゆえ」
「お気遣いは無用でござる」
一礼して、三畳間にあがって来た。大男にありがちな猫背だったが、座高は数之進とほとんど変わらなかった。つまり、足が長いわけである。
「して、いかような御用でござろうか」
いちおう茶を淹れて、促した。
「奥山の騒ぎを扱いました。同心の者より報告は受けましたが、念のためと思い、確かめに来た次第です」
口調は淡々としていたが、やけに気を張り詰めていた。肩にぐっと力が入っている。人見知りする気質なのだろうか。

「それは、わざわざ足をお運びいただきまして」
数之進もまた身体に力が入るのを感じた。これも半世紀ぶりの感覚だった。人は人を映す鏡。相手が緊張すれば、こちらも肩に力が入る。
「経緯は、同心の方に話したとおりでござる。御用盗の一味に出くわしましてな。よせばいいのに後を尾行けた次第。危うく始末されかけ申したが、それがしの相棒は剣の達人でござってな。あっという間に斬り捨て申した。年寄りと思い、連中が侮っていたのはあきらか。剣鬼と化した相棒を見て、先を争うように逃げた次第」
騒ぎを聞いて駆けつけた同心たちに、二人は虚実ないまぜの話をしている。『謎の助っ人』が判明していない以上、よけいなことを言うつもりはなかった。
不審が消えなかったのか、
「十一人、斬られておりました」
疑惑の目を向け、訊いた。
「本当にひとりで斬ったのでござるか」
「いや、二人はわしが突き刺した。死に物狂いだったゆえ、あのときはわかりませなんだがな。あとで思い出し申した」
うまく辻褄を合わせた。つもりだったが、高樹の眼差しは冷ややかだった。

「さようでござるか」

信じていないと表情で語っていた。気も強そうだが、自尊心も強そうに見える。人手が足りず、忙しいはずの捕亡方の与力が、奥山の騒ぎに興味を持つ理由はなんなのか。いったい、なにを知りたいのか。

「頭（かしら）と呼ばれていた男がいたのだが、亡骸（なきがら）の中には見あたらなんだ。逃げられてしもうたのは、残念無念よ」

数之進はさりげなくカマをかけた。

「いや、逃げたのは小頭ではないかと」

高樹は即座に答えた。かかったと思ったが、顔にはいっさい出さない。

「なるほど。高樹殿におかれては、御用盗を追い続けておられるご様子。彼の者が小頭だったとすれば、やはり、奥山や神田、深川、本所といったように、地域ごとに分かれているのでござろうか。それぞれの割り当て区域があるのでござろうか」

「そういう話を聞いています」

「ふむ。賊を束ねる頭はいずこに、でござるな」

数之進の呟きには無言で頷き返した。よけいな話をしないのは賢いやり方といえる。重い口を開かせるには、揺さぶりをかけるのがいいのではないか。

「もしかすると、昨夜、われらを襲ったのは御用盗の一味やもしれぬ」
独り言のような呟きを発した。ぴくりと高樹の眉が動いたのを見のがさない。さらに揺さぶりをかけた。
「流石は捕亡方の与力でござるな。すでにご存じか」
「ちらりと耳にはさみましたが……いったい、いかような用件で、美木藩の下屋敷においでになられたのでござるか」
開き直りか、はたまた案外、凡愚なのか。『ちらりと耳にはさんだ話』どころではない事実を、自ら告げていた。むろん、数之進は素知らぬ顔を決めこんでいる。表情を変えることなく、答えた。
「知り合いがおるのじゃ。酒宴を開くと誘われてな。のこのこ出かけて行った次第よ。相棒がしきりに背後を気にしておったわ」
「尾行けられたと？」
「おそらくは」
数之進は、一角が戻って来たのを見た。が、妙な雰囲気を察したのだろう、友は向かいの家に入る。
「今のが」

高樹の言葉を継いだ。

「さよう。相棒の早乙女一角じゃ。わしはもう鍛錬などせぬが、一角は今でも剣や槍の稽古を怠らぬ。頼もしいことよ」

「昨夜の騒ぎですが」

と、高樹は話を戻した。

「顔をご覧になられましたか」

時折、侍言葉になるものの、大隈重信の書生同様、東京人らしい言葉づかいをする。数之進は首を振った。

「わしは夜目が利かぬ。一角がひとりの右手首を斬り落としたがの。大江山の酒呑童子ではあるまいに、右手首だけでは相手はわからぬ」

笑いを取るつもりだったが、

「酒呑童子」

高樹は怪訝そうに呟きを洩らした。知らないのか、思い出せないのか。定かではなかったが、簡潔に説明する。

「大江山の鬼退治の話よ。渡辺綱を含む四天王が、現れた鬼の腕を斬り落とした。鬼はそれを取り戻すべく、女に化けて、腕が置かれていた屋敷を訪れる。いつの世

でも若い女子の魅力に男は勝てぬ。まんまと腕を取り戻した鬼は、屋敷から飛び去って、逃げた」

話しながら、しみじみ思っていた。

（件の話に、よう似ておるわ）

ちらりと見たそれをどう思ったのか、

「確かに御用盗の行いは、鬼の所業としか思えません。見廻りの回数を増やしたいのですが、なにしろ人手が足りないもので」

言い訳がましいことを口にした。

「にもかかわらず、高樹殿は、こうして足を運んでくだされた。ありがたきことと感謝しており申す」

数之進は一礼する。皮肉だったのだが、通じなかったようだ。

「いや、当然のことです。十一人、斬り捨てた侍とは、いかような方であろうかと興味を持った部分もあります。同心たちの話を信じないわけではありませんが、念のためにお訪ねいたしました次第」

訪問理由を遅ればせながら告げた。幾つかの疑問は解決されないままだが、むろん話すつもりはなかった。

「わしは、昨夜の騒ぎが気になっておりまする。捕亡方の与力には、関わりのない騒ぎでござるが、心に留め置いていただけるとありがたい」

あたりさわりのない言葉で締めくくる。

「承知いたしました。では」

と、高樹は腰をあげた。数之進は三畳間の上がり框で見送る。木戸から出て行くのを待っていたに違いない。

「今のはだれじゃ。役人か」

一角が向かいの家から出て来た。土間では薫子が相変わらず様子を窺っている。数之進は高樹が捕亡方の与力である旨を告げて、続けた。

「大江山の鬼退治の話を知らなんだわ」

「ほう」

友はきらりと目を光らせたが、

「なれど、右手はついていたぞ」

今ひとつ理解できていないようだった。首を傾げて、考えるような仕草をしている。大江山の鬼退治はわかったのだろうが、そこから一歩、話を進められないのだろう。

「おぬしも変わらぬな」
「ちっ、わしは蚊帳の外か。なれど、今は二人きりゆえ、蚊帳の外もなにもないがの。まあ、鬼退治の意味を知る楽しみは、先に延ばすとするか」
繰り言には耳を貸さない。
「薫子」
数之進は、向かいの土間に向かって声をかけた。
「小町弁当の稽古じゃ。夕餉はまかせたぞ」
「わたくしは総菜屋ではございませぬ」
つんと横を向いた顔が、不意に輝いた。視線は木戸の方に向いている。会釈をした後、料理の支度に取りかかった。
「なんじゃ、今の表情は」
数之進の呟きに、呼びかけが重なる。
「お爺様」
早乙女勝利が姿を見せた。下駄を履いた姿は、いやでも昔の一角を思い出させる。寡黙な気質はともかくも、容姿は本当によく似ていた。

六

「あがれ」
数之進の招きに、一角が続いた。
「おまえが来るのを待っておったのじゃ」
立ちあがって、すぐに茶の支度を始める。勝利は一礼すると、刀と脇差を外して座敷にあがって来た。その姿を薫子がちらちら盗み見ている。
(ようわからぬ。おかしな態度をするものよ)
今度は数之進が首を傾げた。友はにやにやしながら、戸を閉める。開けておいた方が気持ちはいいが、なるべく人に話を聞かせたくない。
「それで」
さっそく切り出した。
「なにかわかったか。荷が届くと聞いたが、中身を見たか」
「新参者にまかされたのは見張り役。荷の中身まではわかりませなんだ。なれど、美木藩は築地鉄砲洲に蔵屋敷を持っております」

勝利はいつものように淡々としている。侍らしい言動に、どこかほっとするのは、単なる郷愁だろうか。今ふうの話し方をする与力と会ったため、よけいそう思うのかもしれなかった。

「鉄砲洲か」

「出入りしている商人、〈吉田屋〉の蔵屋敷ではないのか」

と、一角が茶を運んで来る。

「わかりませぬ。わたしはその商人には、まだ会うておりませぬゆえ」

茶をひと口、飲み、勝利は訊いた。

「それはそうと、お爺様。襲われたと聞きましたが」

二人を交互に見やる。顔にはいっさい表さないが、心配だったのだろう。いてもたってもいられず、訪ねて来たように見えた。

「危うく、これじゃ」

数之進は刺す真似をして、騒動の顚末を告げた。やくざふうの五人、おそらく尾行けられていた、ひとりの右手首を斬り落としたが逃げ足は速かった。

「手慣れた様子であったわ。匕首の遣い手がおらなんだのは幸いよ」

「なぁに、遣い手がいたとしても大事ない。わしが全員、あの世に送ってやったわ。

手応えがなさすぎて、物足りなかったほどじゃ」
「また負け惜しみか」
「なんじゃと？」
熱くなりかけた老翁たちに、やんわり勝利が割って入る。
「刺客にお心あたりは、ござりまするか」
「うむ」
「奥山でも騒ぎが起きてな」
今度は一角が語り役となる。御用盗の一味と、此度の騒ぎの間に、繋がりがあるかどうかはわからない。が、尾行けられていたという感覚は、あの後に始まっている。意趣返しと考えるのが、自然なように思えた。
「竜平が賊に交じっておったわ」
数之進は渋面にならざるをえない。
「御用盗の一味に、でございますか」
流石に勝利も驚いたようだったが、それはすぐに苦笑へと変わる。おもしろがっているのが伝わってきた。
「笑い事ではないぞ」

「使いっ走りの三下というのが気に入らぬ。せめて小頭ぐらいにはなれと、わしは思うたのじゃがな。数翁には、かような話ではないと怒られてしもうた。そら、今も仏頂面をしておるであろう」

顎で指した友を、軽く睨みつける。

「一角」

「ああ、言い過ぎた、わしが悪かった。邪魔者は退散するとしようか」

立ちあがって、友は土間に降りる。

「勝利。飯は食うて行けぬか」

肩越しに問いかけた。

「はい。なるべく早く鉄砲洲の蔵屋敷に戻らねばなりませぬゆえ」

「さようか。では、小町弁当を急ぎ、作らせよう。勝利は、一番最初の毒味役よ。薫子も張り切るであろう」

またにやにやして、向かいの家に行った。数之進はわけがわからない。

「さいぜんから、ひとりでにやにやしおって。弁当作りよりも、話し合いの方が重要ではないか。まったく、なにを考えておるのやら」

ふと勝利を見る。凛々(りり)しい若侍といった風情だが、真面目すぎるのが玉(たま)に瑕(きず)、か

もしれなかった。

（まさか百合に惚れておるとは）

茶を飲みつつ、しみじみ凝視めたとき、

「百合殿はおいでになられましたか」

勝利が言った。茶がおかしなところに入ってしまい、むせ返る。苦しげに咳をする数之進の背を、勝利が撫でてくれた。

「す、すまぬ」

「いえ」

「百合とは、藩邸で会うておる」

藩主の友春が奥御殿で過ごすようになった話などを、これまたかいつまんで話した。世間知らずの『ぶらかし大名』、奥方の妙子とは仲睦まじい様子、藩士や下男、下女といった奉公人が、姿を消した藩邸において、藩主の世話をするのは百合と乳母しかいない。

「美濃守様のお世話を」

勝利の目にかすかな憂いが浮かんだ。ふだんは表情を見せない若者だけに、大きな変化に感じられる。恋道に疎い数之進でも、百合を案じる想いが見て取れた。

（殿のお手がつくのではないかと、不安に思うておるのか）

いかにも若者らしい嫉妬を、盟友の孫が持つこと自体、意外だった。一角から話を聞いていなければ、わからないままだったかもしれない。心の中でのみ、応援していると言った後、

「〈吉田屋〉のことじゃが」

数之進は話を戻した。

「以前は、どこで商いをしていたのであろうな。なにか話を聞いているか」

「昔につきましては、わかりませぬ。ただもとは美木藩の藩士だったと、耳にした憶えがありまする」

「ほほう、変わり種じゃな。それとも、やむにやまれず商人になったのか」

そこで首をひねった。

「あの主、どこかで見たような気がするのだが、思い出せぬ」

目をあげて、訊ねる。

「藩士や用心棒たちは、噂話をしておらなんだか」

「いえ」

と、勝利も目をあげた。

「薫子殿は、総菜屋でも開くのですか」
「華絵と一緒にまずは弁当屋をやらせようと思うてな。いずれは〈小町屋〉として見世を構えられればよいが、姉様、華絵にとっては大叔母、薫子にとっては祖母じゃが、姉様には遠く及ばぬやもしれぬ」
「案外、うまくいくかもしれませぬ。数翁の閃きは、良き結果を導くというのが、お爺様の口癖でございますゆえ」
答えた勝利は、刀と脇差を握りしめた。
「行くか」
「は」
「われらもあとで様子を見に行く。忍びこめれば重畳となろうが、老体では無理であろうな。届いたという荷の中身を知りたいものよ」
「わたしが調べます」
「逸るでない。そなたには、まだ用心棒役を務めてもらわねばならぬ。さよう。われらが騒ぎを起こすゆえ、その間にというのはどうじゃ」
「承知いたしました」
勝利は土間で下駄を履いたが、畳を歩くとき、ほとんど足音をたてなかった。下

駄は昔の一角を真似ているのか、はたまた稽古のためと称して、一角が履かせているのか。一礼して路地に出たときも、足音らしきものは聞こえなかった。

（わしの耳が遠くなっただけやもしれぬが）

耳が遠くなったのは、数之進だけではないようだ。

「勝利はいかがしたのじゃ」

向かいの家から出て来た一角が、座敷を見まわしている。後ろでは薫子が、首を伸ばすようにして、木戸の方を見やっていた。

「鉄砲洲の蔵屋敷に戻った」

「なぜ、引き止めぬ。せめて弁当だけでも持って行けと、言えばよかったではないか」

後ろ手に戸を閉めて、友は座敷にあがって来る。

「花見に行くわけではないぞ、一角。弁当を持たされる用心棒がおるか。仲間と飯を食いながら、見張り役を務めるのが用心棒じゃ。それにしても、おかしなことを言うものよ。なぜ、かようにこだわるのじゃ」

「やはり、恋道には疎いのう」

「なに？」

「よいか、耳の穴をかっぽじってよう聞け。薫子よ。薫子は、勝利にホの字なのじゃ」

「……」

一瞬、座りくらみを覚えた。あの気の強い薫子が、勝利に惚れている。しかし、勝利が惚れているのは百合。百合はと言えば、数之進同様、恋道には疎い娘。勝利の想いにまったく気づいていない、はずだ。

「わかったか、鈍い男めが。わしが気を利かせてだな、薫子の作った弁当を持たせてやろうとしたものを」

「百合はどうするのじゃ。勝利が惚れていると教えたのは、おぬしではないか。二人の仲を取り持つのではなかったのか」

「なびかないとなれば、勝利は薫子に鞍替えするやもしれぬ」

「愚かな」

数之進は一蹴した。

「勝利は、百合一筋よ。他の男のもとに嫁ごうとも、想い続ける男じゃ。百合が駄目ゆえ、薫子にとはならぬ」

「うるさい。やる気のない薫子を、その気にさせたというに」

「下手に気をもたせるのは、酷ぞ。勝利の気持ちを伝えれば、薫子は別の男に嫁ぐことも考えよう。われらがしっかりと手綱を……」

「うるさい、うるさい、うるさーい」

「うるさいのは、おぬしではないか。さて、わしはちと仮眠をとる。今宵はひと騒ぎ起こさねばならぬからの。年寄りには充分な休みが必要じゃ」

手枕で横になる。

運ばれて来た荷の中身がなんなのか。もたもたしていると、どこかに移送されてしまうかもしれない。

時がなかった。

第六章　二心殿（にしんどの）

一

鉄砲洲河岸――本湊町（ほんみなとちょう）の蔵屋敷は、厳重に守られていた。

時刻は九つ半（午前一時）頃だろうか。十数人の用心棒が見世の前に立っている。何度か近づこうとしたものの、果たせないまま終わっていた。

「いつまで、ここにいるつもりじゃ」

一角が囁（ささや）いた。旅籠（はたご）の窓のそばに、ぴたりと張りついている。二人は蔵屋敷の並びにある旅籠の二階に陣を構えていた。数之進には見えなかったが、勝利の姿も友が確認していた。

「今少し用心棒の数が減ってくれぬことには動けぬ。この旅籠から出たとたん、取

り囲まれるのは間違いない」

「ふん、臆したか」

鼻を鳴らした一角を睨みつけた。

「頃合いを見計ろうていると言うたではないか。用心棒も人の子よ。明け方あたりに交代するであろう。それが好機じゃ」

数之進は、闇に沈んだ江戸湾に視線を投げた。無意識のうちに懐の手札を握りしめていた。天璋院から授けられた葵の御紋が入った手札。

これを掲げて強引に押し入り、荷の中身を調べるべきだろうか。いやいや、まだ時期尚早なのではないか。なれど、もたもたしていたら、どこかに運ばれてしまうやもしれぬ。だが、天璋院様の手札に荷を開かせるだけの効力があるだろうか。などなど、自問自答の嵐となっていた。

「その独り言はよせ。念仏のようで気が滅入るわ」

一角に言われて、顔をあげる。

「念仏？」

「のように聞こえると言うたのじゃ。おまえは心の中で呟いているつもりやもしれぬが、実際は声に出しておるのよ。われらは天璋院様の命を守るのみ。ひとりでも

多くの民や藩士を手助けするのが使命。悩んでいる暇はない」

「わかっておる。なにも見えぬゆえ、ついな。暗い気持ちにとらわれてしもうた」

と、ふたたび江戸湾を見やった。佃島と石川島があるはずなのだが、見えるのは暗闇ばかり。明るい気持ちになれと言う方が無理な風景だった。

「石川島の人足寄場は、罪人の収容施設になっている由」

ぼそっと呟いた。

「罪人が増えすぎて、収拾がつかぬとも聞いた。はてさて、本当に悪いのはだれであろうな。敗れた者がすなわち悪人とは、あまりにも短絡すぎるように思えなくもない」

「それが戦じゃ」

「ひと言で終わりか」

「からむでない。そういえば、伊勢津藩藤堂家の下谷にあった藩邸を、大病院と改めたとか。確かこの間までは、医学所と言うていなかったか」

「さよう。当初は医学所であったが、今は戦の負傷兵を収容し、治療する場所になっているようじゃ。くるくると変わるゆえ、めまぐるしゅうて、よう憶えられぬ。なれど、大病院は必要であろうな」

「旧幕府軍の兵士も治療してもらえるのか」
「治療される前に自決するやもしれぬが……中には降伏する者がいるやもしれぬ。敵味方に関わりなく、助けてほしいものよ。それはそうと、一角」
話を変えた。
「ここに来るまでの間、われらを尾行けていた者はいるか」
「気配は在ったが、殺気は感じられなんだ。向こうも警戒しているのか、あるいは敵ではのうて味方なのか」
「あのお方か」
かすかな望みに縋ろうとする。奥山騒動のときに現れた『謎の助っ人』は、数之進たちが考える男なのか。つい期待に満ちた目を向けていた。
「さあて、いかがであろうな。わしはおまえがいれば充分じゃ。二人の方が身軽でよいではないか」
「勝利と百合もおるぞ」
「二人はまだ『お助け侍』の見習いよ。仕込み甲斐はありそうじゃが、われらがおらねば動けぬ。して、どうするのじゃ。まだ騒ぎは起こさぬのか」
「こらえよ。必ず交代のときが……」

「む？」
不意に一角の横顔が緊張した。
「いかがしたのじゃ」
「用心棒の動きが変わった。荷をどこかに移すのやもしれぬ」
「警戒しておるのか」
数之進は、窓から退いた一角のあとに座る。用心棒たちが忙しげに出入りしていた。確かに今までとは違う動きだった。
「やはり、火事騒ぎを起こすか。火附けはご法度じゃが、連中もただ騒ぐだけでは持ち場を離れまい。壊された瓦礫にでも火を附けるしかあるまいな。その隙に勝利が、荷の中身を確認するであろう」
振り向いたが、そこに友の姿はない。愛刀もなくなっていた。早くも階段を駆け降りている。
「短気なところは変わらぬの」
やや遅れて、数之進も階下に降りた。とうに走り出ていると思ったのだが、一角は旅籠の潜り戸の前で足を止めている。少しだけ開けて外を盗み見ていた。数之進は宿の主や奉公人が起きて来ないのを確かめてから、土間に降りる。

「いくらか用心深うなったではないか。昔のおぬしであれば、後先、考えずに飛び出していたものを」

「死地に飛びこむほど耄碌しておらぬわ」

見ろ。と、一角は身体をずらした。覗き見るまでもない、外では刃鳴りがひびいている。刀の激突音や叫び声が、夜気を切り裂いていた。だれとだれが戦っているのかはわからないが、斬り合いが始まっているのは確かだった。

荷を移すために用意したのだろう、提灯を持っている者もいた。戦いの最中であるにもかかわらず、用心棒たちは大八車に荷を移している。

「幕府軍の残党じゃ」

だれかが大声を張りあげた。

「荷を渡してはならぬ。行け、早う行け」

聞き憶えのあるその声は、美木藩の江戸家老——松本徳太夫だった。二台の大八車に積んだ荷を、早く運べと叱責している。美木藩の用心棒たちもまた二つに分かれていた。大八車を守る者、幕府軍の残党と戦う者。勝利がうまく大八車に付いていればいいのだが、そうではない可能性も考えられる。

「一角」

以心伝心、その呼びかけだけで通じた。

「尾行けるぞ」

一角は言い置いて、潜り戸から忍び出る。数之進も友のあとに続いたが、突然、だれかが倒れかかって来た。

「うわっ」

「来い」

いち早く一角に腕を引かれた。背後に倒れた男の頭からは鮮血が噴きあがっている。路上では激しい斬り合いが続いている。できるだけ見ないようにして、数之進は一角の後ろに張りついていた。

(幕府軍の残党とすぐに察したな)

松本徳太夫は、襲撃を懸念していたに違いない。それゆえ腕のたつ浪人を用心棒として雇い入れた。そして、予想どおり、襲われた。しかも賊の正体は、旧幕府軍の残党だと断定した。

(もしや、大八車の荷は……)

考えは否応なく中断させられた。ひとりが斬りつけて来たのである。どちらの兵士かはわからないが、一角は素早く弾き返した。

「おまえは先に行け」
数之進を逃がそうとしたが、その声を聞きつけたに違いない。もうひとりが刀を突き出した。
「死ね！」
「そうはいかぬ」
数之進もやむなく刀を抜いた。突き出された刀を、気合いもろとも弾き返すや、すかさず逆袈裟斬りをお見舞いする。相手は一瞬、のけぞって、後ろによろめいた。最期を見届けている暇はない。一角と背中合わせになって応戦する。襲いかかって来た男に真っ向斬りを叩きつけた。
が、右側から別のひとりが刀を振り降ろそうとする。目の端にそれをとらえているのに身体の動きが遅れた。数之進の額に男の刀が届く寸前、
がつっと鈍い衝撃音がひびいた。
「ここは、それがしが」
勝利が男の刀を受け止めていた。弾き返しざま、それを真っ向斬りに変化させる。二人を庇うように勝利が立った。
「かたじけない」

一角の返礼に、数之進も続いた。

「この御恩は終生、忘れませぬ」

どこか他人行儀な言葉は、勝利を慮（おもんぱか）るがゆえのもの。この後も勝利は、用心棒役を務めなければならない。関わりのない老人を助けただけなのだと、聞いているかもしれないだれかに告げていた。

二人は振り返りつつ、大八車を追いかける。

行く先は美木藩の下屋敷か。あるいは、荷の中身を売る相手の屋敷だろうか。また痛み出した腰を叱りつけながら、数之進は盟友とともに闇の中を走った。

二

大八車が着いた先は、美木藩の下屋敷ではなかった。

「場所は麻布ゆえ、てっきり下屋敷に運ぶのかと思うたが」

数之進は、周囲を見まわした。取り壊された屋敷の跡を、朝陽が照らし出している。中小の武家屋敷は、ほとんどが壊されてしまい、雑草の生えた野原となっていた。が、大大名家の大きな屋敷は、まだそのまま残っている。

時刻はそろそろ五つ半（午前九時）になろうという頃か。紀州家や松平姓の武家屋敷を囲む海鼠塀は、いまだその白さを失っていない。手入れが行き届いていた。

「荷が入って行ったのは間違いない。あの屋敷よ」

一角が顎で御成門を指した。念のために携帯用の武鑑を出して、数之進は確かめている。そこに載っていたのは……。

「萩藩の下屋敷じゃ」

吐息まじりの言葉が出た。長門国萩藩を治めるのは、松平大膳太夫敬親。松平の姓よりも、毛利姓の方がなじみ深いかもしれない。石高は三十六万九千石、実高は二倍以上の九十八万八千石とも言われる外様の大藩だ。

下屋敷の総面積は、約三万三千坪。押しも押されもせぬ大藩の下屋敷に相応しい外観と広さをそなえている。

「長州藩か」

一角も珍しく重い吐息をついた。姓同様、藩名も長州藩の方が通りがいいだろう。薩摩と土佐に列ぶ倒幕派の藩だった。

「荷の中身は、おおかたあれであろうな」

友の問いかけに、渋面で答える。

「うむ」
「鈍いわしにもわかるわい。どうやら美木藩は、諸藩が必要としている品(あれ)を用立てておるようじゃ。仲介役であろうな」
「おそらくは」
数之進は自分なりの考えを口にする。
「家老の松本は、幕府の残党の動きを知っていたのではあるまいか。ゆえに、われらを狙うたと思われる賊について、『御家老の名を出し申した』と虚言を告げたとき、顔色を変えたのやもしれぬ」
目通りを許された二人は、やくざふうの賊が狙(ねら)ったのは御家老やもしれぬと匂わせた。そのとき徳太夫は、
〝まことか〟
と、みるまに顔色を変えたのだった。
「なるほど。思いあたるふしがあったというわけか」
「さよう。なれど、そこでまた、ひとつ疑問が浮かぶのよ」
「『おかしい』か？」
口真似をして、にやりと唇をゆがめる。

「茶化すでない。美木藩が扱っている品のことを、旧幕府軍の残党が知ったのはなぜなのか。家老派の中に間者をもぐりこませたか、あるいは」

「美木藩の中に、旧幕府軍と通じている者がいるのか」

一角が素早く継いだ。

「うむ」

無意識のうちに口が重くなる。

疲れた様子を見て取ったのか、友は、腕に抱えていた木箱を道端に置いた。示されたそれに、数之進は腰をおろした。

「通じている者がいるとすれば、だれなのか」

自問するように言った。ひとりの男の顔が甦(よみがえ)っている。家老派に寝返ったように見せかけながら、実際は藩主のために孤独な戦を続けているのではないか。

「おまえは彼の者を思い浮かべているようじゃが、わしは、旧幕府軍が噂を聞きつけて、家老派の中に間者をもぐりこませた説を取る。いずれにしても、あれは美しい女子(おなご)によう似ておるな。人を狂わせるわ」

「女子と一緒にするとは、いかにも、おぬしらしいの」

苦笑いに、一角も苦笑を返した。

「あっちでも、こっちでも引っ張りだこじゃ。売れっ妓よの。長州藩にしてみれば、終わらぬ戦にそなえるためであろうが、諸藩の例に洩れず台所は火の車、借財だらけと聞いたがな。よう金があるものよ」

「わしは、いつでも幕府を倒せるよう、財宝を蓄えていたのではないかと、かねてより思うていた」

数之進は説明する。

萩藩――長州藩の七代目藩主、毛利重就は、破綻した藩の財政を立て直すため、藩政改革に着手。宝暦十一年（一七六一）の検地による新増石高四万石あまりを別途会計として、元号の変わった明和元年（一七六四）に撫育方を設置した。

以後、撫育方は、港の建設、新田・塩田の開発、会所の設置に乗り出し、瀬戸内米穀市場を創設するとともに、他国廻船相手の倉庫・金融業を営む越荷業務を行うなどして、利益を追求したとされる。

「この利潤により、世に『長州の三白』と言われる紙・塩・蠟などの殖産振興を促して、後年、国事に貢献する財源の基礎を作ったように思えなくもない」

「説得力のある話よ。藩内では新年の挨拶として、毎年、同じ会話が繰り返されていたとか。重臣が問う。『殿、まだでございまするか』。藩主が答える。『いや、ま

だじゃ』とな。これは幕府を倒すために決起するのはまだか、という問答である由」

愉しげな一角の言葉を受ける。

「いっとき、さよう、文久三年（一八六三）の下関攘夷戦の折であったか。幕府への恭順を示したときもあったが」

「翌年の元治元年（一八六四）十二月に、下関に挙兵した高杉晋作らの勝利で、藩論は統一されたのであろう。いまや倒幕派の急先鋒よ」

「可愛い女子は、高い銭を払うてもほしい、か」

数之進は竹筒の水を飲み、立ちあがる。御成門の潜り戸が開く音が聞こえてきた。荷を運び入れた一行が、出て来るのかもしれない。目顔で一角に告げると、木箱を壊れた塀の陰に運んだ。そのまま二人も塀の陰に隠れる。

ほどなく藩士や用心棒たちが現れた。

「商談成立か」

「静かに」

友を制して、物陰から一行を見送る。総勢十二人、家老の徳太夫はまだ屋敷に残っているのか、姿が見あたらなかった。

「帰るのを待つか」
一角が言った。
「われらが荷の中身を確かめる前に、これの中身を家老に確かめられると、まずい。おまえの閃きに従い、苦労してここまで運んで来たのじゃ。なんとしても成功させねばならぬ」
これの部分で木箱を示した。家老たちが屋敷に入るのを確認した後、一角が近くの町屋だった場所に走って、一行が運んだ木箱に似た箱を調達していた。その中に手頃な石を詰めこみ、釘でしっかりと蓋を打ちつけている。
火を放たれたのか、町屋があった区域は、かなり焼け落ちていた。それでも何軒か残った家がある。一角はそこから木箱や道具を調達して来たのだった。さほどの距離ではないとはいえ、年寄りにとっては、かなりの重さになる。友の訴えも無理からぬことといえた。
「屋敷は広いゆえ、裏門から取り次ぎを頼めば、すんなり通してくれるやもしれぬ。いちいち美木藩の家老に確かめぬのではなかろうか」
「慎重派のおまえにしては、大胆な策ではないか。年をとると、まことに気が短うなるわい。ま、わしも待つよりは攻める策じゃ。さっさと片付けて、藩邸に戻らね

ばならぬ。頼りない『ぶらかし大名』を放ってはおけぬからの」
「なにやら胸が騒ぐのよ」
「苦労性と貧乏性の業が疼くか」
よし、と、一角は気合いを入れた。木箱を担ぎあげるや、先に立って走り始める。
数之進は慌てて追いかけた。
「若いふりをするでない。わしも手伝う」
「また腰が痛いだの、肩が痛いだのと愚痴をこぼされるのはご免じゃ。力仕事はわしにまかせて、おまえは頭を使うがよい」
「あれは愚痴ではのうて、身体の訴えじゃ」
答えながら、つい懐の手札を握りしめている。心細さを感じたのかもしれない。
「屁理屈をこねずに策を纏めろ。これは賭けぞ。わしは涼しい顔で嘘をつけるが、おまえは今も嘘が苦手じゃ。さて、いかようにこの木箱で下屋敷に入りこむか。お手並み拝見といこうではないか。むろん後ろには、わしが控えておるがな」
励ますように一角が告げた。そこで初めて数之進は、手が震えていることに気づいた。友の頼もしい守りを受けて、不安が一瞬のうちに消える。
「まかせておけ」

答えて、両頬をぱんっと叩いた。賭けに負ければ、だれに命じられたのかと拷問された挙げ句、始末されるは必至。

数之進は何度も深呼吸してから、裏門の潜り戸で呼びかけた。

「お頼み申す」

三

「だれだ？」

すぐに潜り戸が開き、三十前後の男が顔を出した。大大名家ゆえ、東京が混乱の坩堝と化していても、ちゃんと専用の門番がいる。

「美木藩の生田数之進でござる。これは早乙女一角」

木箱を担いでいる友を紹介して、続けた。

「お国の一大事と思い、国許から江戸、いや東京に駆けつけました次第。麻布の下屋敷にて、御家老の松本様のお手伝いをさせていただいており申す。此度は荷の積み残しがござりましたゆえ、鉄砲洲の蔵屋敷より運んで参りました次第」

考えていたとおりの口上を述べた。

「蔵屋敷の前では、賊に襲われましての。みな急いでおりましたゆえ、積み残しが出たのではないかと存ずる」

一角が言い添える。

「なんの騒ぎだ」

もうひとりの門番が、潜り戸のところに来た。二人が告げた内容を仲間が繰り返すと、

「そういえば」

思い出したように言った。

「鉄砲洲で賊に襲撃されたという話を聞いた。旧幕府軍の残党であるとか。用心棒が何人か斬られて命を落とした由」

「くわばら、くわばら。戸は早いところ閉めるがよしだな。ご隠居たちは、とりあえず、中に入られるがよい」

はじめに顔を出した門番が、潜り戸を大きく開いた。二人が中に入るのを見届けるや、注意深く外の様子を確かめる。旧幕府軍の残党がいないか、念入りに確かめた後、ようやく潜り戸を閉めた。

「怪しい人影は見えぬ」

「して、蔵はどちらでござろうか。この荷を納めましたならば、われらはすぐに引きあげますゆえ」

数之進は訊いた。これ以上の会話は、御法度。ボロが出るだけだ。運びこまれた荷の中身を確認することだけに気持ちを向ける。

「案内しよう。屋敷は広いため、迷うと大変じゃ。なんというても萩藩よ。敷地は三万坪以上あるからな」

門番は、仲間に役目を託して、案内役を買って出た。退屈しきっているに違いない。ぶらぶら歩きがてらという様子が見え隠れしていた。

「ご隠居。荷はおれが担ごうか」

ちらりと後ろを見て、訊いた。一角は小さく首を振る。

「お気遣い、ありがたく存ずるが、大丈夫でござる。下手に扱うと危のうござるゆえ、それがしが蔵に納めまする」

いささか大仰な物言いは、男を怯えさせるに充分だった。

「そ、そうだな、うん、そうだ。慣れている者の方がよい。おれは慣れていないゆえ、ご隠居にまかせた方がよかろうな」

中身を知っていると告げたも同然。ここで数之進は、確信した。

（やはり、な）

運びこまれた荷は、あれに違いない。企んだのは、家老の松本徳太夫だろうか。現藩主、美濃守友春を退けて、己が次期藩主になろうという企みか。必要な資金を作るための危険な商いか。

「まだ我が藩の御家老は、おいでになられるのか」

数之進は探りを入れる。三人は延々と続く板塀沿いの小道を歩いていた。白い砂利が敷きつめられた小道は、やけに美しく感じられる。荒れ果てた屋敷や町を見慣れてしまった者にとっては、懐かしいとさえ思える風景だった。

「さて、どうであろうか。裏門からはお出入りなさらぬゆえ、ようわからぬ。なれど、昨夜から〈吉田屋〉の主が来ているのは確かだ」

驚いたが、顔には出さない。

「此度の立役者じゃ。では、御家老は〈吉田屋〉の主と、話しこまれているに相違ない。この後は吉原やもしれぬな」

うまく話を合わせた。なぜ〈吉田屋〉の主までもが、長州藩の下屋敷にいるのか。仲介役として重要な役割を果たしたため、長州藩の重臣に目通りしているのだろうか。しかも男の話からすると、昨夜はここに泊まった様子である。

（ちと引っかかるな）

歩きながら心に留めた。吉原と聞いて、好色心をそそられたのか。

「その話は噂になっている。〈吉田屋〉の主は、派手に遊んでいるとか。どの見世かは知らないが、花魁を落籍せるという話だ」

男は話に乗ってきた。羨ましげな様子が、横顔にも表れている。

「わしは国詰の藩士だったゆえ、〈吉田屋〉のことはよう知らぬがの。もとは我が藩の藩士だったとか」

「うだつのあがらぬ下級藩士に、早々と見切りをつけたのが、吉と出たのやもしれぬ」

一角が同意する。

「それが今では、吉原の花魁を妾にするほどのお大尽よ。我が藩に出入りする〈小倉屋〉も、似たようなことをやっておるが……そうそう、今、思い出したが、〈小倉屋〉も来ていたな」

男の言葉に、

「〈小倉屋〉がここに」

数之進は、一角と顔を見合わせていた。〈小倉屋〉は下関で海運業を営む豪商だ。

商人ながらも尊皇攘夷の志を持ち、長州藩の金主として力添えしている。その豪商までもが、なぜ、この屋敷にいるのか。

（もしや、〈吉田屋〉の主は、〈小倉屋〉に商いのイロハを学んだか）

自分なりの考えをふくらませる。もと美木藩の藩士という〈吉田屋〉の主は、〈小倉屋〉に奉公したのかもしれない。下関で海運業を営む見世であれば、戦に必要な品も簡単に入手できるだろう。それを見越して奉公し、美木藩に小判をもたらす役目を担うことになった。

二人が黙りこんだのを不審に思ったのか、

「〈小倉屋〉がどうかしたのか」

男が問いかけた。馴れなれしい口調だったが、そんなことでいちいち腹をたてていられない。

「いや、主の白石正一郎は、有名な商人でござるゆえ」

数之進の答えを、一角が補った。

「一度、会うてみたいと思うていたのよ。数之進は勘定方に奉公していたのでな。商いには色々と興味があるのじゃろう」

「なるほどな。〈小倉屋〉はいつも長屋の小門から出入りするようだ。おれは会う

たことはないが、小門の門番によれば、柔和な表情をした男だとか。これといった特徴のない普通の男だと言うていたが」

門番は、のんびりと歩を進めていた。三人は相変わらず板塀沿いに歩き続けている。三万坪を超える広さの下屋敷は、それだけで厄介な代物だった。家老や〈吉田屋〉の動きを探りたくても、密談している建物まで辿り着けるかどうか。

「ここだ」

男が不意に足を止め、板塀にもうけられた木戸を開けた。庭らしき場所に出たが、母屋の庭なのか離れの庭なのかさえわからない。また板塀沿いに歩き続けると、蔵が立ち並ぶ場所に出た。人のざわめきが感じられる。

「まだ蔵にいるようだな」

先にたった男のあとに続いた。ずらりと並んでいる蔵のうち、手前から二つ目の蔵の戸が開いている。長州藩の藩士らしき二人が、ひとつの箱を開けていた。

（銃だ）

数之進は小さく息を呑む。推測は間違っていなかった。箱に詰められていたのは、英吉利のミニエー銃のように見えた。命中精度が飛躍的に向上したと言われる銃で、幕府軍はもちろんのこと、長州や薩摩も喉から手が出るほどほしい銃であるのは確

かだろう。

美木藩の御用商人〈吉田屋〉は、表向きは道具屋の看板を掲げているが、実体は銃を扱う闇の商人。美木藩は銃がほしい藩に用立てて、仲介料を取っているに違いない。

（殿はご存じなのか）

自問が湧いた。おそらく『ぶらかし大名』の耳には、届いていないだろう。家老の独断で密かに売買を決め、仲介役を買って出た。有名になりすぎた〈小倉屋〉は、思うように動けない面が生まれているのかもしれなかった。

ちなみにこの頃、日本には、外国官以外にも、商人を中心として多くの外国人が訪れている。特に植民地獲得競争で対立する英仏は、対日対策でも対抗し合っていた。主に英吉利は雄藩に近づき、仏蘭西（フランス）は旧幕府軍を支援している。

代表的な商人には、長崎を拠点として薩摩・長州両藩に武器を販売した英吉利のグラバーや、開港前の新潟を拠点として長岡（ながおか）藩にガトリング砲購入を斡旋（あっせん）した阿蘭陀（オランダ）のスネル兄弟などがいた。

いずれにしても、美木藩の商いは、危険極まりないものだった。

数之進が茫然としている間に、門番の男は藩士たちに二人の来意を告げていた。

積み忘れた荷をわざわざ運んで来た老人というのは、やはり、不自然すぎただろうか。一角が担ぎあげている木箱を、ひとりがちらりと見やる。

「中に運べ」

「は」

一角は会釈して、蔵の中に入る。友好的ではないものの、疑いをいだくにはいたらなかったようだ。

「国許というと」

ひとりが発した言葉に、すかさず答えた。

「美濃国恵那郡でござる。美濃紙のほか、櫛や酒、生糸、麻といった特産品がござる。それがしは、ご奉公の合間に、紙を作っており申した。年寄った今では、腰が痛くて、ちと無理でござるがな」

行ったこともない国だったが、頭の中に〝絵〟を広げている。美濃はゆたかな国だ。旨い米が採れるため、酒は灘に負けないほどの出来となる。美木藩は一万石程度の小藩だが、石高は倍以上。とはいえ、戦火の渦からはのがれられなかった。

「村も戦の波に呑まれたのか」

ひとりが問いかける。それゆえ、東京に出て来たのではないかと、考えたのかも

しれない。齢八十を超えた年寄りが、馳せ参じたことに興味を持ったようだった。

「さようでござる」

頷いた数之進に、蔵から出て来た一角が続いた。

「それでも近頃は、ようやく野菜が採れるようになり申した。じきに紙漉きも再開できるのではないかと存ずる」

引きあげるぞ。と、目顔で合図する。数之進も長居するつもりはなかった。

「それでは、われらはこれにてご免つかまつる」

一礼したとき、

「あいや、しばし待て」

不意に声がかかった。

四

江戸家老、松本徳太夫がこちらに走って来る。後ろには、裏門のもうひとりの門番が付いていた。数之進たちに不審をいだいた様子は見えなかったが、念のために知らせたのかもしれない。

（逃げ遅れたか）

舌打ちする思いで、盟友とともに、その場に畏まる。蹲踞した二人の年寄りを、徳太夫が見おろした。

「生田数之進と早乙女一角であったな」

左手に脇差を握りしめている。屋敷に入るとき、刀と一緒に外していたのだろうが、とっさに脇差だけ摑んで来たように思えた。

「は」

数之進は短く答えた。こういうとき、一角は問答役を数之進にまかせて、万が一にそなえるのが常。最悪の場合、騒ぎになるのもやむなしと、静かに気合いを高めている。身体が熱くなるほどの氣が、友の身体から発せられているのを感じた。

「鉄砲洲の蔵屋敷において、積み残した荷があった由。それを運んで来たとのことじゃが、まことか」

と、徳太夫が訊いた。

「は」

「なぜ、そのほうらが、鉄砲洲の屋敷にいたのじゃ。そもそも蔵屋敷があることを、どうやって知ったのか」

投げつけられた問いかけは、不審と疑惑に満ちていた。下屋敷における襲撃騒動の後、二人は徳太夫に目通りを許されている。顔と姓名を憶えられてしまったのは、得策とは言えない。が、数之進は天璋院の命を受けたときすでに、肚をくくっている。

「雇われた藩士たちが、話をしているのを耳にいたし申した。やつがれでも御役にたてるのではないかと思い、駆けつけました次第」

偽りを返した。

「その藩士たちの姓名は？」

「存じませぬ」

「隠し立てするとためにならぬぞ」

徳太夫は、腰を屈めて、囁いた。

「もしや、幕府軍の間者ではあるまいな。わしの名を出したという刺客の話も怪しいわ。下屋敷に導き入れるつもりだったのではないのか。さらに鉄砲洲の蔵屋敷における荷の運び出しを教えたのは……」

「めっそうもない」

数之進は、強い口調で遮る。

「われらは御家老の御役にたちたいと思うておりまする。なれど鉄砲洲の騒ぎにおいては、加勢できませなんだ。せめて、なにかお手伝いできぬかと見まわしたときに、木箱が落ちているのを見た次第」

「その木箱を開けてみよ」

立ちあがって、命じた。長州藩士のひとりが、すぐに蔵の中に入る。箱を開けられれば、贋の木箱であることを知られるは必至。

（万事休すか）

それでも懸命に策を練る。諦めた瞬間、すべてが終わる。中身は与り知らぬこと、しらを切りとおすしかなかった。

「なにをしておるのじゃ」

苛立ちまじりの催促に、蔵から出て来た藩士が応じた。

「どの箱かわかりませぬ」

「それがしが」

一角がすかさず名乗りをあげる。徳太夫は渋面になったが、「行け」と小声で言った。数之進は思わず、にやりとしかけたものの、慌てて口もとを引き締める。

（流石は一角。運び入れたとき、やけに時がかかったと思うたが、かような仕掛け

をしておったか）

頼りになる友が長州藩士の手を借りて、木箱を運び出して来た。釘抜きで釘を抜き、木箱の蓋を開ける。中から出て来たのは……まぎれもなくミニエー銃だった。

「むぅ」

徳太夫の口から、忌々しげな嘆息が洩れた。一角は運び入れた際、本物の間に贋物の木箱を、うまく紛れ込ませたのだ。積み重ねられた木箱は、そっくりで見た目には判別できない。素知らぬ顔で本物を取り、蓋を開けたというのが真相である。

それでも得心できなかったのか、

「鉄砲洲のことを教えたという藩士はだれじゃ」

徳太夫はさらに追及した。

「かような藩士を奉公させておくわけにはいかぬ。軽々しく他言しおって、許せぬ。わしが成敗してくれるわ」

怒気をあらわにしている。はからずも性根を露呈する結果になっていた。代々家老職を世襲してきた家に、たまたま生まれただけの男だ。まともに相手をすると馬鹿を見る。

「憶えておりませぬ」

「なさけないことに近頃、老耄が進みましてな。昨日の話どころか、今朝の話さえ憶えておられませぬ。綺麗さっぱり忘れてしまうのでござるよ」

一角がおどけたように、頭を左右に揺らした。いかにも小馬鹿にしているように見えた。その様子にかっときたのだろう、

「おのれ。わしを愚弄するか」

徳太夫は腰を沈めて、脇差の柄を握りしめる。

「お斬りなさるか」

数之進は言った。

「ここは萩藩の下屋敷。そこで刃傷沙汰を起こせば、萩藩にまで塁が及ぶは必至でござる。御家老のご覚悟はいかがか。わしと心中なさる覚悟がおありか」

日本御算用者として、死ぬ覚悟はできている。恐れるふうもなく、家老を見あげた。肚をくくった人間ほど強い者はいない。

「く」

家老は、血が滲むほど強く唇を噛みしめるばかり。萩藩の藩士たちは、困惑したように二人の老翁と家老を交互に見つめていた。

「御家老」

母屋の方から、あらたな人影が近づいて来た。数之進たちを案内して来た門番が、呼びに走ったらしい。御用人の坂野清兵衛を連れて来た。

「坂野殿」

徳太夫は複雑な表情を見せる。来てくれたお陰で、抜きかけた刃(やいば)を引けるものの、仲裁役が清兵衛であるのはおもしろくない。というような顔をしていた。

(坂野清兵衛まで来ていたとは)

驚きを覚えたが、二人のやりとりを見守っている。

「この者より知らせを受け、参った次第。二人を鉄砲洲の蔵屋敷に行かせたのは、それがしでござる」

清兵衛は驚くべき言葉を発した。

「なに?」

「積み残した荷があるやもしれぬと思い、念のために調べさせ申した。一箱でも幕府軍に渡れば、われらの立場が危うくなりかねませぬ。最新式の銃で狙われるのは、御家老も避けたいのではござらぬか」

そこそこ点数をつけられる言い訳だった。老翁と清兵衛の繋がりに、多少、不審はあるだろうが、否定できるだけの材料がない。

「まことか」
と、数之進に確かめるのがせいぜいだった。
「は」
頷けば、それ以上、なにも言えなくなる。
「こそこそと動くのは、いかがなものか。わしはいまだに坂野殿の真意がわからぬわ。二心なしという証をたててほしいものよ」
徳太夫は、八つ当たりのような怒りを叩きつけた。
「証をたてる術はありませぬ」
清兵衛は軽く受けた後、
「御家老はいかがでござるか。二心なしという証をたてられまするか」
さらりと切り返した。これはおそらく長州藩に二心ないかどうかの問答なのだろう。美木藩の重臣とすれば、通常、美濃守友春に対して証をたてるものなのだが、違っているように思えた。
「……」
家老は睨みつけることしかできない。
(たいした男よ)

数之進は心の中で称賛する。友春が清兵衛を重用するのは、能吏であるのを知っているからではないのか。清兵衛は寝返ったように見せかけているだけではないのか。心は今も友春のそばにあるのではないか。

（一角には、それはおまえの願望じゃ、と言われそうだが）

疑問は心に秘めて、成り行きを見守っていた。

「この二人は、殿のお世話役を務めております。我が藩の藩士や奉公人は、ほとんどおらぬようになってしまいましたゆえ、みずから名乗りをあげました次第。昔話がおもしろいのか、殿はいたくお気に召したご様子。かような場に足止めすると、我が殿のご不興を買いかねませぬ」

清兵衛はまたしても曖昧な言葉を口にする。美濃守友春を暗殺するためには、数之進たちがそばにいた方がやりやすいではないか。それを匂わせているようにも思えたが、皮肉を言っているだけのようにも感じられた。

清兵衛がどちらの味方なのか、数之進にもよくわからない。

「殿のもとに行くがよい」

促されて、二人は立ちあがる。

「は」

「待て」

徳太夫が制した。

「坂野殿にはかわされたが、そのほうらには、わしへの誠を示してもらうぞ。殿のご行状を、逐一、わしに知らせるのじゃ。まあ、お出かけなさることはあるまいが、念のためよ。近々、毛利様が小さな宴を催されることになったからの。我が殿にもお誘いがかかるやもしれぬゆえ」

すわ、謀(はかりごと)か。

数之進は、首筋の毛が逆立つのを覚えた。毛利家の名を出されれば、友春は応じるしかない。うまうまと誘い出して、始末する。徳太夫は晴れて美木藩の次期藩主に、という筋書きではないのか。

「承(うけたまわ)り申した」

数之進は一礼して、一角とともに裏門の方に向かった。ごく自然に案内して来た門番が先導役となる。

(いまや美木藩は、長州藩の親藩か)

表向きは道具屋を名乗っている〈吉田屋〉は、海運業を営む豪商〈小倉屋〉と密な繋(つな)がりを持っているようだ。鍵になるのは、御用人の坂野清兵衛。数之進の背中

に、彼の者たちの視線が張りついていた。

五

「鰊は旨いが、二心はまずいな」

一角が笑えない掛詞を口にする。じきに芝将監橋近くの藩邸という場所まで来ていた。相変わらず尾行者の気配がするのか、友は背後への気配りを怠らない。肩越しに何度も見やっていた。

年寄りゆえ、休憩を取りながらの道行きとなっている。時はすでに七つ半（午後五時）をまわっているかもしれない。夕闇が迫っていた。

「坂野様か」

数之進も振り返ったが、苦労性と貧乏性の業は疼かなかった。

「幕府軍に銃の話を洩らしたのは、坂野様やもしれぬ。われらをお助けくださったあれが、ご真意なのではあるまいか」

「おまえの読みは、この羊羹のように甘い」

一角は、途中で買い求めた羊羹にかぶりつく。

「坂野清兵衛は、食えぬ男よ。殿と毛利家を両天秤にかけながら、どちらにでも付けるように動いているではないか。小賢しいやつじゃ」

「たとえ、それが真実であったとしても、だ。だれが坂野様を責められよう。諸藩は今、嵐のただ中に在る。右に転ぶか、左に転ぶかわからぬ以上、万が一にそなえるのは致し方あるまい」

「かようなときだからこそ、ではないか。殿の御為に五常をつらぬくのが侍ぞ。わしは、あやつを今後、『二心殿』と呼ぶことに決めた」

「その異名は御家老にこそ、相応しいのではないかと、わしは思うがの。あくまでも美木藩の家老として過ごしながら、なかば公然と長州藩に出入りするとはな。まことに面の皮の厚い男よ」

「二人の『二心殿』か。『ぶらかし大名』では、とうてい太刀打ちできぬわ。頼りないことよ」

差し出された羊羹を、要らぬと首を振って、続ける。

「まさか豪商の〈小倉屋〉が、〈吉田屋〉の後ろ盾になっているとは思わなんだ。主は奉公したことがあるのやもしれぬ」

数之進の脳裏には、〈吉田屋〉の主の、どこか品のいい顔立ちが浮かんでいた。

だれかに似ていると思うのに、どうしても思い出せない。もどかしくて、小さな苛立ちがつのるばかりだった。

「ええい、この老耄頭めが」

軽く叩いた様子を、一角が冷ややかに見やる。

「だから羊羹を食えと言うたのじゃ。甘いものは、心を穏やかにするゆえ」

「おぬしは食いすぎであろう。それでよう歯がなくならぬものよ。わしはとうに入れ歯じゃというに」

「身体を鍛えてきたお陰であろう。歯も丈夫になるのよ」

もう一度、後ろを振り返って、一角は藩邸の長屋の小門を開けた。迎える者など、だれもいない。与えられた部屋に寂しく戻るしかないと思ったのだが……。

「ご隠居」

「お戻りになられたか」

五十嵐健之助たち三人が、長屋の廊下に姿を現した。他にも何人かの藩士が見える。ちゃんと膳が用意されると知って、戻って来たに違いなかった。

「いかがしたのじゃ。殿の身になんぞあったのか」

数之進は色めきたつ。家老の徳太夫から発せられた不穏な空気が、今もまとわり

ついていた。

「いえ、殿は奥御殿にて、機嫌ようお過ごしあそばされておりまする。お戻りが遅いので、なにかあったのではないかと」

健之助の遠慮がちな答えには、二人を案ずる心が表れていた。日本御算用者として、不安をいだき、悩むこともしばしば。下級藩士の純な想いにふれると、つまらない考えが一気に霧散する。

「すまなんだ。ちと知り合いの家に寄ったものでな。遅うなってしもうたのよ」

「数之進。この者たちは、われらの仲間ぞ。まことの話をした方がよい」

一角は座敷に入って、鉄砲洲の蔵屋敷から長州藩の下屋敷に至った経緯を話した。三人だけでなく、いつの間にか他の藩士も集まっている。三人を含めて総勢十人。銃の密売を口にしたときは、どよめきが起きた。

「やはりな。下屋敷には異様な活気があったわ」

「噂には聞いていたが」

「御家老の専横ぶりは、いささか目にあまる」

健之助が言った。

「われらが殿をお守りするしかない。いかがであろうな。賛同できぬ者は、遠慮な

く出て行ってくれ。それぞれの考えだ」

投げられた重い問いかけを受け、二人が無言で部屋を出て行った。そのまま下屋敷に駆けこむかもしれないが、無理強いはできなかった。

「棺桶に足を突っ込みかけている年寄りを入れて、十人か」

「わしはまだ入れておらぬぞ。おまえだけじゃ」

「また若いふりをしおって」

「なんじゃと？」

無意味な口争いを、健之助が止めた。

「結束を固めねばならぬときに争いは禁物でござる。われらは殿の警護役として、ご奉公いたす所存にござる。侍らしく生き、侍らしく死にたいと思う次第。殿のおそばに侍ることこそが、侍の道に繋がるのではないかと存ずる」

「よう言うた」

膝を打った数之進に、一角が続いた。

「侍の道か。ただ一心にご奉公すれば、侍の道じゃと思うていたが、それだけではないのやもしれぬ」

「ふうむ。おぬしにしては、ましな言葉じゃ」

「しては、とはなんじゃ、ええ、またからむつもり……」
「そういえば」
と、健之助が静かに遮る。
「ご隠居たちがお戻りになられたら、奥御殿に来るようにという、殿からのお言伝をあずかっており申した。すぐにおいでなされよ」
「殿が」
「それを早く言わぬか」
先に一角が立ちあがって、数之進に手を貸した。互いに半身のようなもの。口争いはご愛嬌だった。
「それがしが案内いたしまする」
健之助が急ぎ、紙燭に火を点け、付いて来た。藩邸内とはいえ、油断はできない。二人を慮るがゆえの申し出を、断る理由はなかった。
「造作をかける。なれど、そろそろ夕餉であろう。支度はよいのか」
部屋を振り返った数之進に、藩士たちが応えた。
「おまかせくだされ」
「殿は、奥御殿におられるゆえ、われらの分だけでよいからな」

口々に言い、部屋を出ると、長屋の小門から庭に出て行った。数之進たちは庭には出ないで、廊下伝いに奥御殿へ向かうことにする。

藩邸としてはさほど広くないのだが、藩士のいない屋敷は、深閑としていた。健之助の紙燭がなければ、歩くのもままならなかっただろう。六つ（午後六時）を告げる前の捨て鐘が、やけに物悲しく響いた。

「ひとつ、お伺いいたしたき儀がござる」

不意に健之助が足を止めた。

「なにゆえ、鉄砲洲の蔵屋敷や、長州藩との繋がりといった事柄を調べておられるのか。だれかに命じられてのことでござるか」

振り向いて、問いかける。

「……」

一瞬、数之進は迷った。天璋院の手札を見せて、すべてを話すべきではないか。だがしかし、健之助がまことの味方だという証はない。土壇場で裏切ることも考えられた。ここは慎重のうえにも慎重にと、己に言い聞かせる。

「だれにも命じられてはおらぬ。殿を案じるがゆえよ。われらはすでに充分すぎる時を生きた。命を惜しいとは思わぬ」

「最後のご奉公じゃ」
一角が継いだ。
「小禄ではあったが、国許でそこそこの暮らしを得られたのは、他のだれでもない、殿のお陰よ。おぬしも言うていたではないか。御恩をお返ししたいのじゃ」
「そのためには、御家老の動きをつかんでおかねばならぬ」
「ゆえに、いささか危ない調べをした次第。案ずるでない。われらは『二心殿』ではないわ」
一角の言葉に、不審げな表情を見せる。
「坂野様への皮肉でござるか」
「御家老と坂野様のことじゃ。五十嵐殿は腹がたつやもしれぬが、坂野様もどっちつかずで心許ない。鰊は旨いが、二心はまずいと、一角が言うていたのじゃ」
隣の盟友を見て、促した。
「さて、殿がお待ちであろう。参ろうではないか」
「は」
健之助は答えて、ふたたび廊下を歩き始めた。完全に疑惑が解けたかどうかはわからない。が、数少ない美濃守友春の忠臣は、それ以上の問いかけは発しなかった。

（すまぬ）

心の中で詫びる。あと少しの辛抱だ。そう遅くない日に、必ずや家老の徳太夫は仕掛けて来る。どこまで友春に話したものか。

（『ぶらかし大名』だからのう）

大きな悩みがあった。

六

しかし、奥御殿の廊下に足を踏み入れたとたん、

「お」

数之進は、盟友と顔を見合わせた。座敷から明るい笑い声がひびいていた。夕餉の最中なのだろうか。煮物のいい匂いが、廊下に流れ出ていた。

「庭のぶらぶら歩きが、かように面白いとは思わなんだわ。米を撒いただけで、たくさんの雀が舞い降りるとはの。さて、明日はいかがしたものか」

友春の大声が聞こえた。

「殿がお決めなされませ。先延ばしは駄目でございますよ。決めるのはわたくしで

はのうて、殿でござります」

答えたのは、奥方の妙子に違いない。数之進が渡した覚書を見て、百合がなんらかの助言を与えたのではないだろうか。決断できない『ぶらかし大名』を、奥方の手を借りて、少しでも変えようとしている印象を受けた。

「それがしは、これにてご免」

案内役を務めた健之助が、数之進に紙燭を渡して、踵を返した。火を吹き消した後、数之進は友と並んで廊下に平伏した。

「殿。生田数之進と早乙女一角、お召しを受け、まかりこしましてござります」

「来たか」

友春は鷹揚に応えた。

「かまわぬ。面をあげよ」

「は」

顔をあげた数之進は、はっとした。おっとりとした品のよい顔立ち、眉や目もとのやさしい雰囲気が、ある男を想起させたのである。

（〈吉田屋〉の主じゃ）

同じことを感じたのだろう、一角が肱で腕を突いた。これは、もしかすると、も

しかするかもしれない。主は友春の異母兄弟ではないのか。家老の徳太夫は、それを知っているがゆえ、次期藩主として担ぎあげることを決めた。自分は人形使いの役目にとどまるのが得策と判断したのではないか――。

「いかがしたのじゃ。直答を許すゆえ、答えよ。余の顔になにか付いておるか」

怪訝な表情の友春に、数之進は慌てて首を振る。

「ご無礼つかまつりました。ずいぶんお顔が明るくなられたと思い、見惚れてしもうたのでござります」

「無理もない。そのほうらと会うたのは、大台所の膳台の下だったからの。口のまわりは土だらけ、腹を空かせていたゆえ、生の人参も旨く感じるほどであったわ」

友春の左には、奥方の妙子が座している。右には百合と乳母が控えて、酌をしたり、小鉢をさげる役目を担っていた。祖父と孫娘は双方ともに、敢えて目は合わせないようにしている。距離が近いため、気づかれる懸念があった。

「ご無礼つかまつりました」

今一度、頭をさげて、目をあげる。

「して、殿。われらをお召しになられましたのは、いかな御用でござるか」

「うむ」

躊躇う素振りを見せた。藩士と直答するのにも慣れていないうえ、決断は重臣にまかせてきた。元々おとなしい気質なのだろう。なかなか言葉が出ない。

「殿」

奥方に促されて、ようやく口を開いた。

「二人は国許から駆けつけた由。我が藩の一大事と思い、余のために馳せ参じたと言うていたが、あれはまことか」

まことか、の部分で、ずきりと胸が痛んだ。が、こらえる。

「は」

人参騒動の折、国許から出て来た理由を友春に話していた。偽りが露見したのかと、内心、ひやりとする。だが、そうであれば百合がなんらかの知らせをくれるはず。そう思って心をしずめた。

「なにゆえじゃ」

友春は率直だった。

「その気概は買うが、今ひとつ、わからぬ。老いた身を押して、なにゆえ、駆けつけてくれたのか。国許におれば、贅沢はできぬまでも、それなりに穏やかな日々を過ごせたのではないのか。幸いにも我が藩の領地は、さほど戦火の影響を受けてお

らぬ。危険なこの東京に、わざわざ出て来たその理由を余は知りたい」

熱い言葉だった。なにひとつ自分では決められず、重臣にまかせたまま、先延ばしにしていた『ぶらかし大名』は、間違いなく変わり始めていた。年老いても数之進は、人一倍、感じやすい気質である。

（殿）

目の奥がじんわり熱くなった。

「おそれながら申しあげます」

平伏して、告げる。

「申せ」

「窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くす」

ただこれに尽きると応えた。困窮したときは、自分のありかたをしっかりさせ、地位を得たときは自分だけではなくて世人のありかたもしっかりさせる。まずは自分、そして、余力が出たときは他者を助けようではないか。それが『天下を善くす』ことに繋がるのではないか。

「孟子か」

友春は呟いた。少しの間、目を瞑って、口の中で繰り返している。やがて、ゆっ

くりと目を開き、感じ入ったように二人を見つめた。
「よき心がけじゃ。二人はよき漢じゃ。まことの侍よ」
「ありがたきお言葉を賜りまして、恐悦至極に存じまする」
「奥に聞いたのじゃが、余は『ぶらかし大名』と呼ばれておる由。そう呼ばれていたことも、その意味さえも知らなんだわ」
ついと友春は目を逸らした。
「知らなんだわ」
と、小声で繰り返した。うつろな響きがあった。諸藩や重臣が己をどう見ていたか。初めて知った衝撃が、まだ消えていないようだった。
(いささか荒療治だが、耐えていただかねばならぬ)
数之進はあらためて告げる。
「おそれながら、言上いたしたき儀がござりまする」
「なんじゃ」
「藩邸において、藩士たちに百姓や商人、職人の技を身につける手助けをいたしたく存じます。米作りはすぐには無理としても、野菜作りを憶えて、損はありませぬ。また商人の才がありそうな者には、商いへの道を開くのが宜しかろうと存じます。

さらに手先が器用な者には、職人への道を開いてやるのが宜しかろうと」
「かようなことが、できるのですか」
奥方が横から口を挟んだ。思わず言ってしまったのだろう、
「申し訳ありませぬ」
すぐに頭をさげた。
「気にするでない。余はまことに『ぶらかし大名』であった。そちが教えてくれねば、今も知ることはなかったに相違ない。気づいたことがあれば、かまわず意見を述べてくれぬか。余のためにな」
「殿」
奥方の目に、うっすら涙が滲む。友春はさながら純白の絹。気質が素直であるため、どのような色にも染めあげられる。美木藩の明日は、案外、明るいかもしれなかった。
「先程のお答えでございまするが」
遠慮がちに述べた。
「申せ」
「百姓、商人、職人と、藩士には大きく分けて三つの道がございまする。他にも新

政府にご奉公する、あるいは医師や学問の指南役といった道もございまするが、これは特殊な才を必要としますゆえ、省きまする。東京に残ろうとも、国許に帰ろうとも、道は三つしかございませぬ」

「侍の道は」

そう言いかけて、友春は止めた。

「すまぬ。続けよ」

「は。それがし、国許にては、百姓の真似事をしており申した。農閑期には紙漉きや生糸の生産なども行っており申した。買いに来た商人とのやりとりで、商いにもいささか通じておりまする。僭越ながら指南役が務まるのではないかと思います次第」

「こやつは商いの才があり申す」

一角が後押しする。

「一番の高値で売りつけるのが常でござった。蚕を育てるのも巧みでござってな。そこそこ指南役が務まるのではないかと存ずる」

「国許には、擬革紙という、美しい紙がございます。美濃の丈永奉書に油引きして、文様を打ち出した紙でございまするが、おそらく藩士の中にも器用な者がいる

はずでござる。かような者には、国許より職人を呼び、指南させるのが宜しかろうと」

「なるほど。本物の職人に指南させるのか」

「は」

「素晴らしい考えだと思います」

奥方が言った。軽い興奮で頬が紅潮していた。

「みな明日への道を見失い、気持ちが暗く沈んでおります。商人や職人への道が開けば、希望が生まれましょう。藩邸を指南場にして、藩士の生計（たつき）がたつように、できるだけ手助けしてやるのが宜しいと存じます」

あの父にこの娘あり、だろうか。あるいは百合が、あらかじめ告げておいたのか。数之進にとっては、心強い口添えだった。

「奥の言うとおりじゃ」

友春は、大きく頷き、二人を見やる。

「生田数之進、早乙女一角」

「ははっ」

二人の声が揃った。

「藩邸に指南場を急ぎ、作るのじゃ。そのほうらを指南場の頭役に命ずる」
「承りました」
数之進は答えたが、
「おそれながら、それがしも申しあげたき儀がござる」
一角が訴えた。
「言うてみよ」
「は。旧幕府の時代には、士農工商の制があり、侍は民を守る者として、一番上に考えられており申した。今、士（さむらい）は消えつつあるやもしれませぬが、侍の心は持ち続けるべきではないかと存じまする。せめて剣術と槍の稽古だけは、続けさせるべきではないかと存じます次第」
「むろんじゃ。民を守るという心を忘れてはならぬ。助言、ありがたく思うぞ」
「ははっ」
ふたたび二人が平伏したとき、
「殿」
御用人の坂野清兵衛が、廊下に姿を見せた。

第七章　侍の道

一

（来たか）

数之進はさっと緊張する。が、顔には出さず、一角と座敷の脇に退いた。清兵衛が入って来て、畏まる。短く挨拶の口上を述べた後、続けた。

「長州藩の御家老より、是非一度、内々にお目にかかりたいとの申し出がございました。殿がご承諾くださるのであれば、明日にでもかような場をもうけたいとの仰せにございます。いかがいたしましょうか」

予想どおりの流れだったが、友春にとっては、青天の霹靂だったに違いない。

「毛利様が？」

と、腰を浮かせた。一角であれば蚊帳の外を口にしただろう。まさに蚊帳の外に置かれていた『ぶらかし大名』は、驚愕のあまり、ぽかんと口を開けている。なぜ、長州藩が会いたいと言って来たのか、美木藩とはどこでどう繋がっているのか。自問の嵐になっているのが見て取れた。

「大膳太夫様ではござりませぬ。会いたいと仰せになられているのは、長州藩の江戸家老でござる」

清兵衛の答えは、果たして、心に届いたかどうか。

「いったい、余にいかような御用があるのであろうな」

ぽつりと呟いた。自問がつい声になったのかもしれない。相手は三十六万石の大大名家、しかもなにかと大きな騒動に関わっている。吹けば飛ぶような一万石の小大名家としては、戸惑うばかり。とはいえ、断ることはできなかった。

「殿。わたくしもお供いたします」

奥方が申し出る。数之進は素早く清兵衛を見た。ぴくりと眉が動いたのを見のがさない。やはり、と思った。

(謀は着々と進んでおるな)

暗殺の可能性大だった。おそらく庶子であろう〈吉田屋〉の主を、次期当主に担

ぎあげて、傀儡藩主に仕立てあげる。長州藩の方も、わずか一万石と雖も親藩のような藩ができるのは悪くない話だ。味方の数は多いほどいい。そのうえ〈吉田屋〉は、豪商〈小倉屋〉と浅からぬ繋がりを持っている。

（まことの話をお知りになられたら、殿はいかがなさるであろうか）

銃の売買に手を染めていた重臣たち。美木藩の庶子と思われる商人が、その頭役を務めて、すでに商いは終わっている。あまりにも重い事実が、眼前に横たわっていた。

「そなたが同道してくれるのであれば心強い」

友春は安堵したように言った。奥方の父である御用人に目を向ける。

「奥も同道する。清兵衛、その旨、長州藩に伝えよ。奥の同道が認められぬのであれば、余は行かぬとな」

訊ねるのではなく、命令口調になっていた。友春の変化を感じたのだろう、微妙な間が空いた。

「清兵衛」

二度目の呼びかけで我に返ったのか、

「は。さっそくお伺いいたして参りまする」

平伏して、座敷を辞した。思いもかけない娘の申し出や、友春の変わりように驚きを感じたのはあきらか。最後にちらりと投げた目に、隠しきれない当惑が浮かんでいた。

「長州藩とはの」

友春もまた当惑の渦に落ちている。

「なにゆえ、この時期に余と会うのであろうか。お招きくだされたのは、大膳太夫様ではないようだが」

数之進と一角に、問いかけの眼差しを向けた。気が逸る、懐の手札を思わず握りしめている。しかし、早計すぎると判断した。友春暗殺の謀は、おそらく間違いないだろうが、この段階では断定できない。

「我が藩の商いを学ばれるのが宜しかろうと存ずる。及ばずながら、この爺めが、できる限りのご指南をいたしまするゆえ」

あたりさわりのない答えになったが、

「ありがたい」

友春の顔が輝いた。

「余は、藩や藩士について、なにひとつ、知らなんだ。『ぶらかし大名』と呼ばれ

ても当然よ」

心からの言葉が出た。またもや胸が熱くなる。

「学ぶのに、遅いということはありませぬ。『民富めば国富む、民知れば国栄える』と申します。殿は幸いにも暮らしに困ることはありませぬ。ゆえに」

「達すれば則ち兼ねて天下を善くす」

先程の言葉の後半だけを続けた。目が合うと、にっこり微笑する。もとからやさしげな面立ちが、よりいっそう柔和になった。仏のように見えた。

「御意」

目をしばたたかせて、数之進は平伏する。

「つきましては、殿。長州藩への訪いは、それがしと一角もお供いたしまする。お許しいただきたく存じます」

「頼む」

友春が告げたとき、

「失礼いたします」

健之助が現れた。

「長屋の小門に、生田殿にお目にかかりたいという男が来ております」

「さようでござるか」
「わしも参る」
一角が手にした紙燭に、百合が、行灯の下にあった火打ち石で火を点ける。数之進は一礼して、廊下に出た。待っていた健之助が、一角から紙燭を受け取る。美木藩の藩邸を訪ねて来た客に、数之進は不審が湧いていた。
「名は訊かなんだか」
歩きながら訊いた。
「とにかく言伝を頼むと」
「だれであろうな」
「竜平やもしれぬ」
一角が、不出来な孫の名を出した。
「華絵と薫子、あと大屋の彦右衛門は、われらの居場所を存じておるからの。二人に聞き、来たのやもしれぬ。金の無心ではあるまいか」
「ありうることよ」
老翁たちの会話を、健之助が聞いていた。国許から年寄りだけで出て来たのではないのか。そんな眼差しを肩越しに向けた。

「孫も付いて来たのじゃ。東京に行ってみたいと言うてな。わしの倅(せがれ)たちも年寄りだけで行くよりは、ましと思ったのやもしれぬ。お供付きの面倒な旅よ」

数之進は虚言で対応する。無意味な不審と不信は、いだかせぬのが得策。いざとなったとき、助っ人を拒まれぬよう、細心の注意をはらっていた。

「生田家の男孫は、出来が悪うてのう。頭を悩ませておるのよ」

話を合わせたつもりの一角を小声で制した。

「よけいなことを言うでない」

「出来が悪いから悪いと言うただけではないか。ははあ、あれだな。まことのことを言われると、腹がたつというやつか。馬鹿な子ほど可愛いと言うからの」

「うるさい」

「本気で怒るな」

肩を叩いて、一角は先にたった。どんな場合でも数之進を守る点は変わらない。長屋の廊下に入ると、友は健之助の手から紙燭を取った。

「あとはわれらだけで充分じゃ」

「なれど、名も名乗らぬ輩(やから)でござる。生田殿の身内であれば、かように告げるはず。ご油断なさらぬのが宜(よろ)しいのではないかと」

「仰せに従おう、一角」
「おまえは、わしの腕を信じておらぬな」
舌打ちまじりだったが、受け入れた。三人は小門の土間に降りる。健之助が開けた戸から、まず一角が外に出た。
「早乙女殿」
「守谷殿ではないか」
「なに？」
数之進はそのやりとりを聞き、健之助から紙燭を受け取って、外に出る。紙燭で守谷総司の顔を照らし出した。大隈重信の書生を務める若者が、人懐(ひとなつ)っこい笑みを浮かべていた。
「お二人とも、かようなところでなにをしておられるのですか」
小声で訊いた。
「それはこちらの台詞じゃ。なにゆえ、われらの所在を知ったのか」
数之進の問いかけに、すぐさま答えが返る。
「〈にしき店〉の大屋です。どこにいるのか訊ねましたら、あっさりと教えてくれました。もっとも幾ばくかの銭を渡しましたが」

「あやつは金子で転ぶか」
一角は腹立たしげだったが、数之進は他のことが気になっていた。
「われらの向かいに、姉上の孫たちが住んでおるのじゃが、おらなんだか」
「はじめに訪ねたのですが、留守のようでした。それで、大屋に訊いたのです」
「さようか」
ちりりと胸が疼いた。不吉なざわめきを抑えて、本題に入る。
「して、守谷殿。わざわざ足をお運びいただいたのは、なにゆえでござるか」
「〈吉田屋〉の主のことです。お知らせするのがよかろうと……」
「美濃守様とは、異母兄弟か」
先んじて言った。守谷は目をみはる。
「すでにご存じでしたか」
「先程、美濃守様にお目にかかって、もしや、と思うた次第。なれど、守谷殿の話でより慥かなものとなった。かたじけない」
「いえ、あまり御役にたてたとは思えません。そうそう、もうひとつ、面白い話を得ました。〈吉田屋〉は長州藩に……」
「出入りしておるな」

遮った数之進を、一角が受ける。

「さらに言うと、〈吉田屋〉の後ろには、下関で海運業を営む豪商の〈小倉屋〉が控えておる。美濃守様の異母兄弟は、〈小倉屋〉に奉公していたのやもしれぬな。そこで商いを憶えた」

「まことですか。〈吉田屋〉の主は、〈小倉屋〉に奉公していたのですか」

守谷は心底、驚いた様子だった。老翁たちに問いかけの眼差しを投げている。数之進は大きくなった声を仕草で窘め、囁いた。

「定かではない」

「なるほど。次はそれを調べろという仰せですね」

「いや、時がないゆえ」

「竜平か？」

不意に一角が問いかけを発した。闇が動くように、ひとつの影が現れる。数之進が掲げた紙燭のかすかな光が、竜平の青ざめた顔を浮かびあがらせた。刹那、心ノ臓が早鐘のように脈打ち始める。

ごくりと唾を呑み、訊いた。

「なにがあったのじゃ」

「華絵と薫子が、御用盗に捕らえられた。お爺様たちが怪我をしたという、贋文を届けて誘き出したんだ」

「なに!?」

数之進は察した。守谷が向かいの家を訪ねたとき、二人が不在だった理由を。それを聞いたとき、妙な胸騒ぎを覚えた理由を。

「人を集めます」

守谷の申し出が、どこか遠くでひびいている。たとえ無事だったとしても、華絵と薫子は陵辱されているに……。

「無駄じゃ。二人とも自害しておろう」

「数之進よ。いつも言うているのは偽りか」

一角が鋭く切り返した。

「諦めたとき、すべてが終わる。おまえの口癖よ。もうひとつの口癖を実行した方がよいのではあるまいか」

「今、できることを、やる」

数之進の呟きに、友は力強く応えた。

「さよう。しっかりせい。助けに行くぞ」

二人の無事を願い、四人は闇の中を走った。

二

竜平が案内したのは、奥山近くの賊の隠れ家だった。

数之進は友と捕らえられたときを思い出している。あのときと同じように、焚き火をしているのだろう。壊れた塀に囲まれた敷地内は、ほの明るくなっている。時刻はそろそろ七つ（午前四時）頃だろうか。守谷が腕のたつ仲間を集めるのを待っていたため、夜明け近くになっていた。老翁が二人、竜平、助っ人の守谷たち四人と、総勢七人の奪還部隊である。

「無事であろうか」

自分でもわかるほどに声が震えていた。此度の拐かしは、間違いなく数之進たちへの意趣返し。二人の親になんと詫びればいいのか。東京に住まわせるのではなかった。小町弁当など作らせるのではなかった。

「二人になにかあったら、わしのせいじゃ」

激しい後悔と自責の念に襲われている。

「諦めるな」

一角はまた同じ励ましを口にした。先刻から幾度となく、同じやりとりをかわしている。恐怖に近い不安を覚える数之進を、懸命に支えていた。

「じきに竜平が戻って来る。二人の居所を調べておるからの。不出来なやつじゃが、かようなときは役に立つわい」

「頭を仕留めねばならぬ」

数之進の言葉に、守谷が問いかけを返した。

「顔をご存じなのですか」

後ろには三人の仲間をともなっている。本当は勝利も呼びたかったのだが、家老派の用心棒役を降ろすわけにはいかない。いささか心もとなかった。

「断言はできぬが……大江山の鬼退治よ」

数之進流の掛詞（かけことば）だったが、

「え？」

当然、守谷は理解できない。

「右手を斬られた鬼が、様子を見に来たのじゃ。迎え撃つわれらは、四天王ならぬ、七天王か。いや、若い守谷殿たちは四天王じゃの」

「わしは蚊帳の外か」
「おぬしは采配を振る大将じゃ」
「ふむ。では、おまえは智謀をめぐらす参謀か」
ふだんなら嬉しい褒め言葉だが、今はじわりと涙が滲む。
「参謀役は務まらぬわ。まことの参謀であれば、かような事態は招かなかったであろう。鬼どもを侮った結果がこれよ」
「自分を責めるな。それにしても、段取りがよすぎるの。鬼どもは、われらの様子を細かくつかんでおるようじゃ。本材木町の家におらぬのを、確かめたうえで華絵と薫子を誘い出した」
「二人はわれらを案じて出かけたのじゃ。それがよけいに不憫でならぬ」
「戻って来たようです」
守谷が気配を察して、腰を浮かせた。若き四天王は、みな腰に刀と脇差を携えている。守谷だけが洋装で、ベルトに二本、挟んでいた。ほどなく、竜平が姿を見せる。
「いたか」
数之進は訊いた。

「奥座敷に捕らえられている。裏口から入った方がいい。お爺様が持たせてくれた酒を、見張り役にも配っておいた。睡魔に襲われるのも時間の問題だろうぜ」

いつもどおりの、ちんぴらまがいの口調だった。それが不思議に心を落ち着かせる。竜平が賊に通じているという安堵感によるものだろうか。しかし、事はそう簡単ではなかった。

「それで二人の様子は？」

知りたくないが、問いかけねばならなかった。二人にもしものことがあったときは、賊と心中する覚悟を決めている。志（こころざし）なかばどころか、始めたばかりでこの有様。かえすがえすも己（おのれ）の不手際が口惜（くちお）しい。

「わからない。酒を注いでやりながら、それとなく探りを入れたんだが、なにも答えなかった。ただ相当、抵抗したらしいぜ。見張り役の四人は、傷だらけだったからな」

「見張り役のことなど、どうでもよい。無事なのか」

「ああ、生きてる。猿轡（さるぐつわ）を咬まされて、後ろ手に縛りあげられている姿を、障子の隙間から、ちらりと見た。自害しようとしたのかもしれない。小頭は手下に手を出すなと命じていたよ。武家の生娘（きむすめ）は、高く売れると」

「とりあえず、生きておるようじゃ」
一角が大きな吐息をついた。先にやられてしまい、数之進は怨めしげな目を向ける。
「わしの十八番を取るでない」
「お。多少、おまえらしさを取り戻したではないか。善哉、善哉。では、今一度、手筈を確認するぞ」
友は大将役を実行する。
「まずは見張り役を斃し、二人を逃がすと同時に、われらも逃げる。賊はざっと三十人ほど集まっておるゆえ、相手にせぬがよしじゃ」
「確認するほどの内容ではないな」
数之進がやり返すと、
「よし。その調子じゃ」
一角はにやりと笑い、若者たちを見まわした。
「さて尖兵役は」
「おれと守谷さんたちで行く」
竜平が名乗りをあげた。

「お爺様たちは、ここにいてくれ。下手に付いて来られると、足手まといになるだけだ。必ず華絵と薫子を連れて来る」

「足手まといじゃと」

数之進の不満は、完全に無視された。竜平は先頭に立ち、守谷たちがあとに続いた。むろん二人の老翁も追いかける。

「守谷殿たちは大丈夫だろうが」

不満の続きに、隣を走る一角が応えた。

「頼もしいではないか。いざとなると、竜平は目が違ってくる。まあ、かようなときに、血がたぎるのは困りものじゃがの」

「なにゆえ、気質がおぬしに似たのか」

「老耄(ぼけ)て忘れたか。幼い頃より、剣や槍の稽古をつけたのはわしではないか。漢(おとこ)の有り様(あり)が頭にやきついているのであろう」

夜がしらじらと明け始めている。夜目の利かない数之進には、助かる時が訪れようとしていた。が、それは賊にとっても同じこと。酒の効き目が表れていればいいが、この明るさで見つかりやすくなるのは間違いなかった。

(あのお方は、おられるであろうか)

ともすれば振り向きたくなる気持ちをこらえた。尾行けられていた気配はないと、一角は言っていた。『謎の助っ人』の助けはないと考えた方がいいだろう。縋りたくなる甘え心を叱りつけ、無言で竜平たちに続いた。屋敷を取り囲む長屋だった跡を、ぐるりとまわって裏門に着いたときである。

「待て」

竜平が立ち止まった。かなり明るくなっていたが、それでも数之進にはよく見えない。裏門の前にそろそろと近づいて行く竜平を、不安とともに見つめていた。

「だれか倒れておるな」

一角の呟きを、竜平が慥かなものにする。

「四人、死んでいる」

来いと手をあげた。倒れていたのは、やくざふうの男たち。竜平が不審げに告げた。

「さいぜん確かめたときには、裏門の見張り役はいなかったんだが」

「われらの襲撃を察したのであろう。一味の者か」

念のために問いかける。

「ああ。四人ともそうだ」

「遣い手ですね」
守谷が冷静に傷口を確かめていた。『謎の助っ人』だと思ったが、敢えて口にしない。数之進は若者たちを促した。
「行くぞ」
今度は一角とともに尖兵役となる。妙な昂ぶりを覚えていた。やはり、そうではないのか。あのお方ではないのか。そうだとすれば、なんと嬉しいことか。
雑草が生え放題の裏庭を走った。
「先に行くぜ」
竜平が追い越して、奥御殿だった建物にあがる。障子に飛び散った鮮血が目を射た。廊下に視線を転じると、そこにも数人の男が倒れていた。

三

「華絵、薫子」
よろめきかけた数之進を、一角が素早く支えた。
「あれは賊どもの血じゃ。二人は生きておる」

「な、なれど」
「お爺様」
障子を開けた竜平が、両手で丸を作った。それでも急いで廊下にあがる。奥座敷の一室に、娘たちは座していた。
「近づけば死にます」
薫子は喉に懐剣をあてている。
「わた、わたくしもです」
華絵も同じだった。縛られていたはずなのに、どうやって縄を切ったのだろう。畳に縄が落ちていた。あるいは『謎の助っ人』かもしれない。二人の娘の目は虚ろで、正気を失っていた。数之進たちを見ているのに、祖父だと認識できていないようだった。
「華絵、薫子。わしじゃ」
座敷に足を踏み入れたとたん、
「死にます！」
薫子が悲痛な声をあげた。喉に懐剣の切っ先が食いこんでいる。白くて細い首に、一筋の血が流れる。ぴんと背筋を伸ばして正座した姿は、まさに侍の女。陵辱さ

れたら死を選べと、今は亡き姉――三紗に教えこまれた様子が表れている。華絵は限界を超えてしまったのか、ふうっと意識を失い、倒れた。

「華絵」

近づこうとしたが、またもや声をあげた。

「なりませぬ。近づけば、華絵様を刺して、わたくしも命を絶ちます」

「じきに勝利が来る」

とっさに数之進は、薫子が想いを寄せる若者の名を口にしていた。薫子は怪訝そうに見あげる。

「え？」

虚ろだった目の焦点が、徐々に合ってきた。すかさず一角が薫子の懐剣を取りあげる。数之進はしっかり抱きしめた。

「よう頑張った、薫子。もう大丈夫じゃ」

「おじい、様？」

「さよう。そなたの祖父、生田数之進じゃ。賊は斬り捨てたゆえ、大事ない。そなたは我が身だけではのうて、華絵までをも守った。わしは誇りに思うぞ」

「あ、ああぁ、おじい様、おじい様」

薫子はようやく正気を取り戻した。泣きじゃくる二人を、数之進はいっそう強く抱きしめた。どうやら操は守り通したようである。勝ち気で我儘、権高で贅沢好きだが、勝利への想いは、まことのようだった。

「御成門の方で斬り合いが起きているようです」

守谷が告げた。『謎の助っ人』だけに、始末をまかせられない。

「すまぬが、二人を頼む」

数之進は、守谷の仲間のひとりに華絵たちを託して、立ちあがる。心が逸っていた。今、行けば逢えるのではないか。庭に降りて、懸命に走る。

「また腰を痛めるぞ」

追いかけて来た一角に揶揄されたが、竜平と守谷を含む数人はとうに先へ行っている。母屋だった建物の残骸越しに、御成門近くの戦いが見えた。しかし、哀しいかな、だれがだれやらわからない。ようやく斬り合いの場に着いたときには、累々と続く死骸の山があった。数人がやっとという感じで立っている。

「あらてか」

見覚えのある頬傷の小頭が、匕首を構えた。まわりにいる四人の手下は、血みどろだったが、目をぎらつかせている。ひとりの目が竜平に留まった。

「竜平。てめえ、裏切ったな」
襲いかかって来た男に、守谷が袈裟斬りを浴びせかけた。一瞬の躊躇いもない斬撃は、堂に入っている。人を斬ったのは初めてではないと思った。返り血を浴びた竜平は、飛びはねるようにして、さがる。紙のような顔色になっていた。
「残るは、四人か」
数之進は躊躇っていた。遺恨を残せば、また同じような騒ぎが起きるは必至。始末するしかないと、頭ではわかっているのに迷いが出た。人を斬るのが侍ではない、人を助け、生かす者こそが真の侍だ。
左手できつく鯉口を握りしめている。
(なれど、話が通じる相手ではない)
逡巡する様子を見て取ったに違いない。
「わしが斬る」
一角が刀を抜いた。匕首をかまえた四人を、じりじりと追い詰めて行く。守谷たちも隣に並び、間合いを詰めて行った。竜平は足が動かないのか、立ちつくしている。もとより賊は殺気立っていた。
「殺れ」

小頭が動こうとした瞬間、

「やめろ」

だれかが制した。捕亡方の与力、高樹十郎が近づいて来る。同心らしき者をひとり連れていた。だれが知らせたのだろうか。もしや、賊のひとりが知らせに走ったのではないか。数之進の胸には、疑惑が渦巻いている。

（〈にしき店〉の家を訪ねて来たとき、わしは高樹にカマをかけた）

思い出していた。

〝頭と呼ばれていた男がいたのだが、亡骸の中には見あたらなんだ。逃げられてしもうたのは、残念無念よ〟

という数之進の言葉に、高樹はこう返した。

〝いや、逃げたのは小頭ではないかと〟

会ってもいない賊が頭ではなく、小頭であるのを、高樹が知っていたのはなぜなのか。あのとき、数之進の胸には、御用盗の頭は高樹なのではないかという疑惑が湧いた。

さらに高樹は美木藩の下屋敷における襲撃騒動も、知っていたふしがある。そして、今また偶然、現れたこれはなんなのか。

「これは、高樹殿。見廻りでござるか」
数之進は先んじて言った。
「さようでござる。この廃虚が御用盗どもの根城であるのを知っておりました。気(け)取(ど)られぬよう、配下に見張らせておいた次第。わざと泳がせておいたとも知らずに、いい気なものです」
平然としらを切る。小頭は状況が読めないのか、数之進と高樹を交互に見やっていた。特に後者を見るとき、物言いたげな表情をしていた。
「ほう、わざと泳がせておいた、とな」
数之進は、大胆な大石を投じた。
「わしはてっきり高樹殿が、この者たちの頭なのではないかと思うたが」
賊を高樹に渡せば、また狙われるは必至。逃がすわけにはいかない。一角はむろんのこと、守谷たちも察しているのだろう。みな刀を鞘に収めていなかった。
「これは異なことを申される。わたしが御用盗の頭とは、これいかに。その理由はなんですか」
高樹はとぼけたが、従っていた同心は正直だった。かちりと刀の鯉口を切る。自分も仲間だと告げたようなものだった。

賊の生き残りは四人、高樹と同心を併せれば六人。数では同じだが、こちらは年寄りが二人、加わっている。そのうえ竜平は動転してしまい、金縛り状態になっていた。案山子のように茫然と突っ立っている。同心が勝ち目はあると思ったのはあきらか。自信満々な様子が顔に出ていた。

「理由はいくつかある。が、ここでは申せぬ」

意味ありげな答えを、

「新政府に訴えます」

守谷が継いだ。

「わたしは大隈重信先生の書生を務める者。先生は御用盗や踊り念仏の騒ぎに、かねてより心を痛めておられました。此度の騒ぎを、大隈先生に報告します」

賊を追い詰める言葉を発した。

（まずい）

数之進は思ったが時すでに遅し。

「始末しろ」

小頭の命に、三人の手下が動いた。

「このやろう」

が、匕首を振りあげたまま、身体を硬直させる。高樹が一刀のもとに斬り捨てていた。同心は驚きに目をみひらいたが、変わり身の早さは上役並み。ひとりの手下の腹を突いていた。守谷が新政府云々を口にした時点で形勢が逆転している。一角と守谷も同時に斬りつけた。

賊は全員、絶命していた。

「わたしが頭ではないという証をたてました」

高樹はさらりと言った。守谷が目顔で詫びている。新政府を口にしたがため、賊を四人とも斬る結果になった。他にもっといい策があったのではないか。できれば四人とも捕らえて、詮議するべきではなかったか。

〝申し訳ありません〟

四人の命を奪う結果になった発言を深く悔いていた。対する高樹は、相変わらず冷ややかな眼差しを向けている。

「あの者は？」

怪訝な目を、立ちつくす竜平にくれた。

「わしの孫でござる。御用盗の動きを知るべく、潜りこませており申した。娘たちが捕らわれたことを、いち早く知らせてくれたお陰で二人を助けられた次第。危う

いところでござった」
「そうですか」
顔を刻みつけるように、竜平を凝視めている。おそらく高樹こそが御用盗の頭であり、二人の拐かしを命じた首謀者に違いないだろうが……証はたてられなかった。
（食えぬ男よ）
数之進は心の中で舌打ちする。
「逃げも隠れもいたさぬ。なにかあれば遠慮のう、〈にしき店〉においでくだされ」
告げて、刀を鞘に収めた。一角と守谷たちもそれに倣った。
（荒れ果てた東京は、心までをも荒ませる）
嘆いている暇はない。
次は、美木藩の御家騒動だった。

四

二日後の早朝。
数之進と一角は、美木藩美濃守友春の行列に従っていた。行く先は美木藩の麻布

の下屋敷。家老の松本徳太夫が開く内々の酒宴とやらに招待されたからである。長州藩は加わるのを断ったのか、当初の話とは違う流れになっていた。

供の数は老翁たちを含めても総勢、二十人足らず。奥方の妙子と一緒に、奥女中として百合も同道しているが、非常に心許ない道行きとなっていた。

(おかしな動きがあると言上申しあげたものを)

数之進の頭には、昨夜、行われた友春との面談が甦っている。

〝殿。ようお聞きくださりませ〟

と、美木藩の危険な商いについて、事細かに説明した。銃の密売の仲介役、此度の買い手は長州藩、美木藩の江戸家老の松本徳太夫は、友春の異母兄――〈吉田屋〉の主を次期藩主にと目論んでいるふしがある。あるいは徳太夫自身が、名乗りをあげる可能性もあるのではないか。

〝余には、兄上がいたのか〟

友春は意外そうに呟いた後、

〝下屋敷に参る〟

きっぱりと答えた。固い決意が見て取れた。

〝危のうございます。それでも参られまするか〟

数之進の問いかけに、すぐさま頷き返した。
〝参る〟
答えて、淡々と続けた。
〝余は、今までに二度、毒を盛られたことがあるのじゃ〟
〝なんと!?〟
驚いて盟友と顔を見合わせた。いささか鈍(にぶ)いのか、肚(はら)が据わっているのか。読み取れるほど、ともに過ごしていないが、数之進は後者と考えることにした。
〝では、われらもお供つかまつりまする〟
日本御算用者(やまと)の初仕事は、はたして、うまくいくかどうか。それぞれ遺言状をしたためたうえの出立となっていた。
「あのお方は、なにゆえ、姿を現さぬのであろうな」
ふと一角が口にした。二人は行列の最後尾に付いている。ともすれば遅れがちになる歩みを、意識して速めていた。
「なにかお考えがあってのことに相違ない。わしは信じておる」
考えながらの答えを、友はすぐさま受けた。
「わしはおまえを信じる」

二度にわたって賊を始末したのはだれなのか。一角とて疑問や不安はあるだろうが、数之進を信じることで、見事にそれを抑えていた。

「一角」

涙があふれかけたが、目をしばたたかせて、ごまかした。

「守谷殿にも助けられた」

さりげなく話を変える。大隈重信の書生を務める若者は、興味津々の様子だったが、敢えて問いかけずに去っていた。

「うむ。次に会うたとき、詳しい話を聞かせてくれと言うていたな。おおよそのことは、察しておるのだろうが」

「それにしても」

数之進は言った。

「高樹十郎は、非情の男よ。おそらく、あやつが御用盗の頭であろう。あの様子では、同心たちもおこぼれに与っているのやもしれぬ」

高樹の目を思い出す度、悪寒に襲われる。新政府に変わった今、どうにか与力職を務めているようだが、待遇や居心地までもが同じとはいかないだろう。肩身の狭い思いをして、内心、忸怩たる思いを抱えているのかもしれなかった。

「鬼退治をする御役目の者が、鬼に変化してしもうては、どうにもならぬわ。まあ、ああいう手合いは、旧幕府の時代にも悪事を働いていたのやもしれぬ。もともと性根の悪い男なのじゃ。あやつの件は、守谷殿にまかせればよいではないか。われらには、ちと荷が重すぎる。それに脅しておかぬと、またやりかねぬからの」

一角の言葉が、いやでも華絵と薫子の姿を想起させた。二人は寝込んでしまい、まともに話せなくなっている。気持ちが落ち着くには、少し時がかかりそうだった。

「新政府に訴える、か」

自問のような呟きが洩れる。守谷の提案だったが、それで解決するのだろうか。いや、高樹は逆恨みして、ますます執拗に付け狙うのではないか。ほとんど感情を表さない底なし沼のような目が不気味だった。

「却って厄介なことになるやもしれぬ」

呟きに以心伝心、一角は応えた。

「確かに怨みを買うやもしれぬ。ま、しばらく放っておくのがよかろうさ。あやつも少しの間、おとなしくしていよう」

「そうであればよいが」

「案ずるでない。幸いにも守谷殿の仲間が、華絵たちの用心棒役を買って出てくれ

たではないか。ゆえに、われらは『無私のお務め』を続けられるというわけじゃ」

一角は、ちらりと肩越しに振り返る。即かず離れずの距離を取って、竜平が後ろに付いていた。三下のような格好はやめて、髷を結い、袴を着けて二本差しを携えている。奥山の騒ぎでは茫然自失という有様だったが……なにか感じるところがあったのだろうか。

「竜平め。わしは腹がたってならぬ。役立たずが来たところで、足手まといになるだけよ。一文にもならぬと言うたのに、なにゆえ付いて来るのか」

忌々しげに振り返っている。数之進にしてみれば、竜平に華絵たちの用心棒役を務めさせたかったのだが、勝利と違って、剣術や柔術といった武道はあまり得意ではない。そのため、やむなく守谷の仲間を頼む結果になっていた。

「そう言うでない。興味を持ったのは、悪いことではないわ。おまえが斬りつけられたとき、盾になる覚悟を決めておるのやもしれぬ」

「ありえぬ。わしを盾にして、逃げるやもしれぬ」

「手厳しいのう」

一角は目を細めて、口もとをほころばせた。往年の伊達男ぶりを見るような笑顔だった。数之進もつられるように微笑み返している。いつの間にか肩に力が入り、

ぴりぴりしていたことに気づいた。
「おぬしの笑顔に、わしは、いつも救われる」
「緊張するのはわかるが、竜平に八つ当たりするのはよせ。おまえなら大丈夫じゃ。後ろにはこの早乙女一角が付いておる」
「心強いことよ」
「それにしても」
と、友は耳もとに囁いた。
「わしは美濃守様のお心がようわからぬ。おまえが言上したあれを、いともあっさりと退けてしまわれた。暗殺などありえぬと、お考えなのであろうか」
「さあて、いかがであろうか。殿は『ぶらかし大名』であられたゆえ、先延ばしなさるおつもりなのやもしれぬな」
「暗殺をか？」
「さよう」
とぼけた答えに、一角は含み笑いを洩らした。
「『ぶらかし大名』も、たまには役に立つやもしれぬか」
「うむ」

友春を乗せた駕籠は、あとわずかで麻布の下屋敷に到着する。もともと武家屋敷が多かった区域であるため、人や荷車の往来は少ないのだが、今はまったく人通りがなかった。にもかかわらず、壊れた海鼠塀の陰に、時折、人の気配が感じられる。

「偵察役か」

数之進の呟きを、一角が継いだ。

「はたまた刺客か」

いやでも緊張してくる。が、下屋敷の御成門の前を見たとたん、数之進は小さな声をあげていた。

「奥女中じゃ」

おそらく友春の愛妾だろう、父親である家老の徳太夫の隣に並んでいた。その後ろには奥女中がずらりと勢揃いしている。世情が混乱の時期であるにもかかわらず、派手やかな着物をまとっていた。

「まずは女の戦か」

一角はおもしろがっていた。駕籠の中から様子を見ていたに違いない。友春がすぐに降りて来た。

「殿。お待ちいたしておりました」

腰を折るようにして出迎えた徳太夫に、
「大広間に藩士たちを集めよ」
友春は短く命じた。毅然とした態度が意外だったのか、
「は？」
徳太夫は怪訝そうに眉を寄せる。
「聞こえなんだか。藩士たちを集めよと言うたのじゃ」
二度目の命令は、珍しく大きな声になっていた。友春の変化をようやく感じ取ったのかもしれない。
「ははっ」
家老は一礼するや、娘や奥女中たちを手で追いやった。意図したわけではなかったが、家老派の出鼻をくじき、まずは一本取ったというところだろうか。段取りどおりに進ませないのが得策。それでも数之進は、五十嵐健之助に目顔で告げた。
〝殿のおそばから離れてはならぬ〟
これは事前の打ち合わせで、しつこいほど念を押している。
〝承知〟
健之助もまた目顔で応えた。打ち合わせをした折、老翁たちに何度も問いかけの

眼差しを投げたが、守谷同様、よけいな質問は発していない。我知らず、懐の手札を握りしめていた。

（勝利）

視線を転じた数之進は、出迎えた藩士の中に勝利がいるのを見て、思わず安堵する。新陰流はむろんだが、小野派一刀流も免許皆伝という腕前の持ち主。百合がうまく連絡をつけてくれたに違いない。

委細承知という表情をしていた。

（いざ、勝負）

数之進は気合いを入れた。

五

大広間には、続々と藩士が集まって来た。以前、数之進たちが潜入したときよりも、あきらかに数が増えている。徳太夫の焦りが見て取れた。

（刺客部隊は、隠しておきたかったのではあるまいか）

数之進は冷静に判断している。今までとは違う藩主に気圧されてはならじと、刺

客部隊にも号令をかけたのではないだろうか。むろん威嚇と脅しの意味もあるだろう。総勢、およそ百人。対する藩主派は二十人足らずである。とうてい勝負にならない。

上段の間に友春と奥方の妙子。百合と乳母は二人の後ろに控えている。そして、右側に数之進と一角、左側には健之助たちが控えていた。いざとなった場合、友春の盾になる覚悟を決めている。上段の間には家老派を座らせていなかった。

「奥方様は離れの方に、おいでなさるのが宜しかろうと存じまする」

中段の間から父親の坂野清兵衛が申し出る。その横に徳太夫が控えていた。勝利はうまく前席に陣取っている。だれか鉄砲を持ちこんではいないだろうか。おかしな動きをする者はいないか。数之進と一角は目を光らせていた。

「わたくしは殿のおそばにおります」

奥方は父の申し出を、きっぱりと拒絶した。数之進が言上した折、同席していた奥方は、躊躇うことなくこう告げた。

〝なにか事が起きたときには、我が身に替えましても、殿をお守りする覚悟です〟

家老派の怪しい動きを、つかんでいるのかもしれない。かなり思い詰めた表情をしていた。今も帯に挟んだ懐剣をきつく握りしめている。

「は」

清兵衛は畏まって、奥方の決意を受け止めた。『二心殿』と囁かれる用人だが、さすがに娘は助けたいと思ったに違いない。が、それがかなわぬとなった今、清兵衛はどう出るか。藩主派に戻るか、家老派に残るか。

（奥方様のお心を察して、こちらに戻ってくれれば、いささかなりとも勝機が生まれる）

数之進は、懐の手札を握りしめながら祈っていた。娘への愛が、坂野清兵衛を侍の道に引き戻してくれるのではないか、と。

（さて、殿はなにをなさるおつもりなのか）

友春は上座で瞑目していた。中座と下座に集まった藩士は、無言で座している。刺客を兼ねた雇われ藩士もいるだろうが、一見しただけでは判別できない。徳太夫と清兵衛が、さりげなく目顔をかわした。

「殿」

徳太夫が告げる。

「藩士が揃いましてござります」

いよいよだ。

「さようか」
友春が目を開けた。居並ぶ藩士を見まわした後、
「みなに問いたいことがある」
よくとおる声で言った。
「余は、まだ美木藩の藩主か？」
重い問いかけを投げた。数之進は、はっと小さく息を呑む。応と藩士が答えれば、藩主を続けよう。なれど、否が答えであるならば、潔く退こうではないか。
争いを好まぬ友春らしい問いかけに、場は静まり返った。
（あの男）
数之進は、中段のなかほどにいる二人の藩士が、妙な動きをするのを見た。傍らに置いたなにかを取り出そうとしていた。
「かたがたに申しあげる。それがし、日本御算用者でござる」
大声を張りあげた。懐の手札を取り出して、立ちあがる。すぐさま一角が隣に立った。数之進は手札を掲げて、続ける。
「これは天璋院様より賜りし手札でござる。ひとりでも多くの藩士や民を、助けてほしいというお気持ちを受けて、参上つかまつった次第。美木藩においては、美

濃守友春様を藩主となさるのが宜しかろうと存ずる」

申し渡したとたん、大広間がざわめいた。

「天璋院様」

「十三代家定公の」

「奥方様じゃ」

「見捨てられてはおらなんだ」

ざわめきは波のように広がり、やがて、大きな熱い塊となった。はは一っと藩士たちは平伏する。待ちかねていた救いの手。禄は失われようとも、侍の心は失っておらぬ。侍の道を捨ててはおらぬ。

(ご覧くだされ、天璋院様)

数之進はあふれる涙を止められない。

〃なんの役にも立たぬやもしれぬが〃

と、天璋院は哀しげに告げた。だがしかし、どうだろう。ばらばらになりかけていた藩士の心が、見事、ひとつになったではないか。この手札には力がある。天璋院の想いを、藩士たちは感じている。

うまく纏まるかに見えたが——。

「お覚悟」

中座の前列にいた三人が、いきなり刀を抜いた。家老の徳太夫が立ちあがると、呼応したように何人かが立ちあがる。予想どおりの流れだった。友春に襲いかかろうとした者を、勝利が素早く斬り捨てた。

「百合。殿と奥方様を」

数之進の声に、すぐさま百合が応じる。友春と奥方のそばに付き、上段の間の戸口に走った。勝利や健之助たち護衛部隊が、友春たちと一緒に守りの布陣で移動する。無事、ここから出られるか。

「殿をお守りせよ」

清兵衛が叫んだ。『二心殿』は土壇場で侍の道に立ち戻った。何人かの藩士が、藩主派の助っ人になる。それでも数では圧倒的に、家老派が勝っていた。

「おのれ、裏切り者めが」

家老の徳太夫が刀を抜いた。大広間や庭では、刃鳴りの音がひびいている。あちこちで斬り合いが始まっていた。

(これが限界か)

数之進は諦めかけたが、

（いや、殿を必ずやお助けする）

きつく手札を握りしめた。一角の守りを受けながら、友春たちを追いかける。庭に降りて目をあげたとき、

「殿」

友春を狙う鉄砲を見た。長州藩に売りつけた最新式のミニエー銃が、ぴたりと照準を合わせている。数之進は躊躇することなく、友春の前に立った。一角は鉄砲をかまえた男のもとへ懸命に走る。

間に合うか。

数之進は両手を広げて、友春の盾になる。射手の右手が引き金を引こうとした刹那、銃口が逸れた。一発の銃声が轟（とどろ）きわたる。なんと孫の竜平が、男に飛びかかっていた。駆けつけた一角が鉄砲を奪い取る。

「一角、竜平」

数之進は少し離れた場所を指した。そこにもうひとり、鉄砲をかまえた男がいた。いつの間にか周囲を家老派の藩士に取り囲まれている。勝利や健之助たちが、襲いかかる者を斬り捨てていた。百合もだれかの刀を持ち、果敢に応戦している。が、二人目の射手は、家老派の藩士に守られていた。一角と竜平はなかなか近づけない。

（もはや、これまで）

数之進は両手を広げたまま、射手を睨みつけている。撃つなら撃てと戦いを挑んでいた。殿のために命を捨てるのであれば本望だ。それこそが、侍の道。

射手が引き金を引こうとしたそのとき、

「ぐぁっ」

男の眉間に短刀が突き刺さった。とっさに引き金を引いたのだろう、発射された銃弾が、近くにいた家老派の藩士の胸をつらぬいた。

「鳥海様」

数之進は見た、待ちかねた助っ人が現れたのを。二人の配下を従えて、鳥海左門景近がこちらに近づいて来る。生田家の二女——冨美と左門の間に生まれた男子が、鳥海家を継ぎ、左門の名を継いだのだった。

「上意である」

左門は告げた。腹にひびく声だった。

「それがしは、鳥海左門景近。静岡藩主の後見役、徳川慶喜様の命を受け、始末目付の御役目を仰せつかった次第」

静岡藩主の後見役、徳川慶喜。

その名は絶大な効果を発揮した。藩主の友春夫婦がその場に平伏するや、次から次へと平伏する。藩主派だの、家老派だのは関係ない。最後まで突っ立っていた徳太夫も、渋々という感じではあったが平伏した。

「先に潜入していた生田数之進と早乙女一角らは、日本御算用者である。天璋院様の嘆願に従い、命を捨てて此度の役目に臨んだ次第。彼の者たちこそ、真の侍よと、慶喜様は仰せあそばされた」

左門の言葉を裏打ちするように、従っていた配下のひとりが、慶喜の上意書を広げた。すでに徳川の時代は終わっている。従う必要のない文書であるのは、だれの目にもあきらかだった。

「おそれながら申しあげます」

徳太夫が声をあげた。

「申せ」

左門が促した。

「は。その上意書は、ただの紙きれであると存じます。諸藩の政は、それぞれに委ねられたはずではございませぬか。今更、なにを仰せになられるのか。それがしには、わかりかねまする」

「なるほど。したが、松本徳太夫。そのほうが頭役となって、長州藩になにを売ったか。われらが知らぬとは思うてまいな」

囁くような言葉は、どんな恫喝よりも恐ろしかっただろう。始末目付に従うのならば、内々の御家騒動として片付ける。だが、従わぬのであれば、「おそれながら」と新政府に訴え出ようではないか。

そんな含みを感じ取ったに違いない。

「おそれいりましてござります」

徳太夫は、ようやく企みを諦めた。

「これにて一件落着。美木藩の藩主は、美濃守友春である。藩士はよく従い、よく励むのが肝要じゃ。侍の道は、まだ消えておらぬ。われらが五常を守る限り、われらの心に、侍の道は在る」

威風堂々とした言動は、まさに父親を髣髴とさせた。昔が甦ったような錯覚に陥る。またもや胸が熱くなった。

（鳥海様）

見つめる眸に、涙が滲んだ。

『ぶらかし大名』の最後の『ぶらかし』となったかもしれない御家騒動。暗殺の企

みは、永遠に先送りされた。
しかし……侍の道に終わりはない。

六

「慶喜様のご了解を得るのに、ちと手間どってな。姿を現すのを遠慮した次第よ。上意書が届くまでは、陰ながら手助けするつもりであった」
鳥海左門は言った。冨美の忘れ形見は、五十二歳。顔立ちは母親似だが、気質は父親そのもの。ゆったりとした巨きな氣に、包まれているのを感じた。
一同は、左門が借りた築地のもと旗本屋敷において、対談の場をもうけている。同席しているのは二人の老翁と、鳥海左門、そして、二人の配下の五人だった。数之進にとって左門は、叔父と甥の間柄だが、あくまでも上役だと思っている。
「さようでございましたか」
安堵の吐息をついていた。慶喜の許しが得られるかどうかわからない時点では、目立つような行動は取れなかったのだろう。空手形に終わり、数之進たちを失望させる懸念もある。慥かな話になるまではと、『謎の助っ人』に徹したのは、いかに

も左門らしい考えといえた。

「またご一緒に御役目に就けるとは、望外の幸せ。老いぼれ二人で死に花を咲かせる覚悟でござったが」

数之進は、つい静かな屋敷を見まわしている。

「奥方様はいかがなされましたか」

茶を出してくれたのは、配下の者たち。離縁状を置いて来たのではないかと、不安が湧いていた。

「月が変わった頃に、来るという文が届いた。東京の様子がわからぬゆえ、ちと様子を見ていた次第よ」

「それを伺いまして、安堵いたしました」

と、数之進は左門の後ろに控える配下を見た。

「して、かたがたのご姓名は？」

ひとりは三十前後で、ひょろりと背が高く、もうひとりは二十代なかば。初対面なのだが、なんとなく初めて会ったような気がしない。早くも親しみを覚えているのが不思議だった。

「それがしは、村上杢兵衛でござる。杢兵衛の孫にござります」

三十男の答えに、もうひとりが続いた。

「それがしは、杉崎兵馬。生田殿の姉君、三紗殿と所帯を持った杉崎春馬とは、遠い親戚にあたります」

「なんと」

数之進は、思わず友と顔を見合わせる。村上本兵衛は、かつて左門の配下として、徒目付の頭役を賜っていた。確かに顔立ちや、蟷螂のような痩せぎすの身体つきなどが、よく似ていた。

兵馬の方は、春馬にはあまり似ていないものの、やはり、雰囲気に近いものが感じられる。数之進たちの助っ人どころか、始末目付という役目を賜ったのは、左門の力があればこそ。二人の老翁は深々と頭をさげた。

「かたじけない」

「百人力でござる」

いつになく一角の口から素直な言葉が出た。それだけ嬉しいに違いない。左門も笑みを返した。

「数翁と角翁は、しばらくの間、美木藩で指南役を務める由。百姓仕事だけではのうて、さまざまな商いや職人の技を伝えると聞いた。御家騒動を収めても、それで

終わりとはならぬのが、いかにもらしいと言うべきか」

「お褒めのお言葉を賜りまして恐悦至極。なれど、此度の手柄は、孫娘の百合によるものではないかと存じます。『ぶらかし大名』と呼ばれていた美濃守様が、短い間に驚くべき変化を遂げたのは、おそらく百合が奥方様に智恵を授けたからではないかと」

「さよう。まさに千両智恵よ」

一角が同意する。

「勝利と竜平もようやった。初めてにしては上出来よ。もっとも竜平は、あとで震えていたがの」

「借金するのは上手いが、武道は苦手じゃ。ならば、せめて算術だけでもと思うたが、こちらもたいしたことはない。百合が男であればと、しみじみ思うた次第よ」

老翁たちの会話に、左門が割って入る。

「些少ではあるが、慶喜様より金子を賜っておる」

懐から取り出した帛紗を広げる。十両もの大金が現れた。

「われらで分けよとの仰せじゃ。危険な御役目ゆえ、充分とは言えぬやもしれぬがな。取り分は、数翁に決めてもらうとしよう」

「かような金子を、慶喜様が」

すぐには言葉が出ない。静岡藩の台所は、諸藩よりは楽かもしれないが、有り余っているわけではなかった。言うなれば徳川家の許しも得ず、勝手にやり始めた此度の役目に、金子を与えてくれること自体、涙が出るほどにありがたい。

「では」

十両を掲げて、左門に三両、配下に一両ずつとした。残る五両は、数之進たち五人で分けるという計算だ。みな生きていかなければならない。綺麗事だけでは世の中は動かなかった。

「宜(よろ)しゅうございまするか」

窺(うかが)うような問いかけに、

「むろんじゃ」

左門はあっさり答えた。

「金にかかわることは、数翁にまかせるがよしと思うておる。静岡に付いて行った旗本の中には、餓死する者も出始めていると聞いた。生計をたてる術を知らぬ侍の哀しさじゃ。それから見れば、ありがたいことよ」

「すでに餓死者が」

数之進は声を詰まらせた。噂は耳にしていたが、こうやって直に聞くと衝撃を受ける。いったい、日本はどうなるのか。生きる術を持たない侍や民を、なんとかしなければならない。ふつふつと闘志が湧いてきた。

「話は変わるが、捕亡方の与力、高樹であったか」

ふと思い出したように、左門が口にした。

「おそらく彼の者が御用盗の頭であろうな。華絵と薫子を拐かして、邪魔者を始末するつもりだったに相違ない。あやつは、ちと気をつけぬと危ないやもしれぬ。そういえば、華絵たちの様子はいかがじゃ」

二人を案じている様子が見て取れた。あのとき、やはり縄を切って、助けたのは左門だという話を聞いている。すぐに数之進たちが来るとわかっていたため、賊の始末に向かったようだった。

「華絵はまだ寝こんでおりまするが」

数之進の答えを、友が継いだ。

「薫子は、気丈に振る舞っておりまする。なにかさせた方がいいと思い、小町弁当を作らせております次第。働いてもらわぬことには、暮らしが成り立ちませぬ。なんと申しましても、借財が三百と五両、ござりますゆえ」

右手の指を三本、立て、左手は大きく広げた。左門は豪快な笑い声をあげる。父から母の昔を聞いたことがあるのかもしれない。

「あの二人は、まさに母上と叔母上の生まれ変わりじゃ。数翁と角翁は、張り合いができて、よかろう。まだまだ死ねぬな」

「笑い事ではありませぬ」

そう言いながら、数之進も笑っていた。ひととき屋敷が、なごやかな空気に包まれる。しかし、気持ちはすでに次の御役目に向いていた。日本御算用者は、始末目付の配下として、命を懸ける覚悟であることを、あらためて誓っている。

(慶喜様。御礼申しあげまする)

心の中で何度も、何度も、繰り返していた。

七

数日後。

「どこに行くんだよ」

渋る竜平をせっつくようにして、二人の老翁は、富岡八幡宮に向かっていた。月

が変わって九月になっている。同道しているのは百合と早乙女勝利で、総勢五人の道行きだったが、竜平はまた三下のような格好に戻っていた。

「言うたではないか。少しずつでも借財を返すのじゃ」

数之進の言葉に、猛然と反論する。

「おれは大川に投げこまれて死んだんだぜ。それで百五両の借財はなしだ。死人に支払う義務はない」

「屁理屈をこねるのだけは、上手いのう。なれど、借りたものは返すのが、世の定め。連中を気にしながら暮らすのは骨が折れるぞ」

「さよう。五常を守るのが侍よ」

「おれは」

言い返そうとしたが、

「侍ではないな」

数之進は素早く遮った。

「奥山の騒ぎの折は、案山子のように突っ立ったままであったわ。顔は紙のように白く、まさに亡霊のようであった」

「じゃが、美木藩の下屋敷においては、勇敢に戦った」

一角が持ちあげる。
「われらの姿を見て、なにか感じるところがあったのであろう、竜平よ。ええ、違うか。お婆様は、おまえを可愛がっておったからの。その想いに応えろ」
「そう、お婆様は言っていた。おれはいずれなにかをやる男だとな」
「たわけ」
数之進は竜平の頭を叩いたが、いつものように手の方が痛くなっていた。
「いつつつつ。相変わらずの石頭じゃ」
それでも懸命に助言する。
「よいか。『千里の道も跬歩よりす』と言うではないか。わしの手伝いができぬのであれば、まずは地道に働け。働いて、借財を返せ。話はそれからよ」
「築地の梁山泊に奉公したい」
唐突に切り出した。
「下男でも門番でも、なんでもやる。大隈様のためならば、命を懸けられる。おれも梁山泊のひとりになりたいんだ」
「わしに恥を掻かせるつもりか」
数之進は相手にしない。思いつきだけで動くのが当世流か。後ろを歩いていた勝

利が、追い越して前に出る。富岡八幡宮門前の遊女屋に、いち早く知らせに走っていた。

「よいか。慶喜様から賜った金子は、借財に充てる。〈にしき店〉にくれば、住むところと飯だけは、なんとかしてやろう。わしの手伝いをするもよし、地道な商いをするもよし。おまえの好きにするがよい」

「だから」

「今の兄上に、梁山泊は無理でござります」

後ろから百合が言った。

「なんの志も持たぬ者には、居心地の悪い場所。惨めになるだけでござりますゆえ、おやめになるのが宜しかろうと存じます」

もっともな意見だったが、言い過ぎの感がなきにしもあらず。出来のいい妹や従兄を持つと、竜平はよけい立場が悪くなる。

(足して、二で割ると、ちょうどよいものを)

思わず苦笑していた。

「生意気なことを」

竜平は肩越しに百合を睨みつけたが、

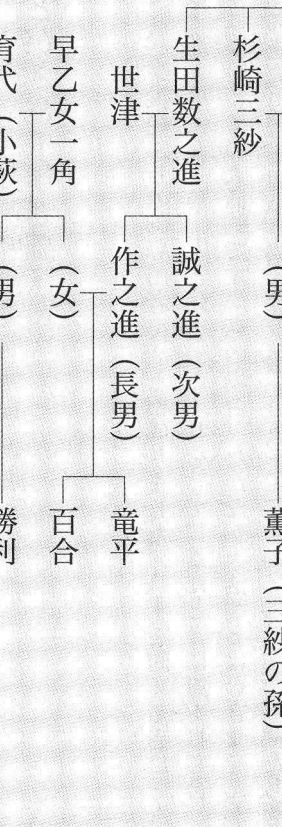
「まずは借財じゃ」
数之進は竜平の背中を押した。右側に数之進、左側に一角、後ろに百合と守りを固めている。見世に入った勝利が戻って来た。
「知らせて参りました」
「ご苦労」
「竜平」
勝利は、従弟を見やる。
「懐の金子を、数翁に渡せ。錦絵が売れると聞き、すぐさま掻き集めたのは、流石と言うしかないがな。〈にしき屋〉に売って、かなり儲けたであろう」
「まことか」
数之進の驚きを、一角が受ける。
「金の匂いがしたとたん、山犬のように動くのう。悪いとは言わぬが、こそこそやるのはよくない」
と、右手を差し出した。
「裏切り者め」
今度は勝利を睨みつけたものの、仕方なさそうに一分金を二枚、載せる。百五両

の借財にはほど遠いが、少しでも多い方がいい。
「行け」
孫を押して、見世に入る。待ちかまえていた主と男衆が、目を剝いた。
「足がある。幽霊じゃありませんね」
「簀巻きにして大川に投げこんだのに」
「おれは不死身だ」
えらそうに胸を張った孫の足を蹴りつける。頭は固すぎて、こちらの手が保たない。手短に竜平が生き返った経緯を説明した。要は勝利が置いて行った小柄を隠し持ち、川の中で縄を切っただけの話である。
「すまぬ」
数之進と一角は、深々と辞儀するとともに、左右から竜平の頭を押さえつけた。なかば強引に頭をさげさせる。
「百五両の借用書を、書いていただけるとありがたい」
一両二分を渡しながら告げた。
「ついでに、此度の返済分の受け取り書もな」
と、一角。

「承知いたしました」
主が内所に足を向けたとき、外がにわかに騒がしくなる。瓦版売りが、なにやら声を張りあげていた。数之進の頭に浮かぶのは、血腥い騒ぎのみ。勝利がいち早く外に出て行った。
「あらたな戦の知らせであろうか」
「おれが」
「おまえはここにおれ」
孫の帯を摑み、逃がさないようにする。ここで逃がしたら、次に会うのは石川島の監獄という可能性もあった。ほどなく勝利が戻って来る。
「元号が変わるようです」
差し出した瓦版には、慶応から明治に変わる旨が記されていた。
「明るく治める、か」
呟きを、友が継いだ。
「元号だけでも明るくせねばの」
「うむ」
「兄上。どこに行かれるのですか」

百合の声で目をあげる。妹は竜平の腕を取るや、後ろ手にねじりあげていた。勝利は見て見ぬふりをするつもりだったのか、唇をゆがめている。
「いててて、放せ、痛いだろうが」
「竜平」
数之進は怒鳴りつけ、駆け寄ろうとした。
「う」
刹那、腰に激痛が走る。
「数之進。また腰か」
支えた友の腕を握りしめた。
「う、む」
明治元年（一八六八）九月。
慶応から明治へと元号が変わった。
維新の風は、いっかな収まらない。
吹き荒れていた。

生田家・早乙女家 家系図


鳥海左門
鳥海冨美
杉崎春馬
杉崎三紗
生田数之進
世津
早乙女一角
育代（小萩）
（女）
（男）
誠之進（次男）
作之進（長男）
（女）
（男）
華絵（冨美の孫）
鳥海左門景近
薫子（三紗の孫）
竜平
百合
勝利

あとがき&千年老舗

作中では、半世紀ぶりの御算用者復活と相成りました。八十を超える老翁となった生田数之進と早乙女一角。ときに老耄たふりをして、またときに鍼を打ち合ってと、老体に鞭打っての大活躍です。私の場合、なかなか大活躍とはいきませんが、腰を痛めるあたりなどは我が身と重ね合わせることもしばしば（笑）。孫たちを従えての形なき政府へのご奉公が、はてさて、どんなふうに動いていくのか。楽しみながら書き進めたいと思います。

さて今回は、取材で花王さんにお邪魔いたしました。ご存じの方もいるかもしれませんが、素晴らしい花王ミュージアムがあるのです。

ＶＴＲやジオラマをそなえたミュージアムは、見応え充分でした。そもそも花王の銘柄は、顔洗いに由来するとか。石鹸製造の始祖――堤磯右衛門さんは、磯子

村の村役人を務める旧家の出身で、明治初期の横浜の実業家とされています。石鹸作りを手がけた理由は、磯右衛門さんが造船所で働いていたとき、油まみれになった手の汚れをなかなか落とせなかったことに始まるようです。仏蘭西人はすでに石鹸を使っていましたから、それを見て、「これは売れる！」と思った由。さもありなんですが、この閃きはだれにでも訪れるものではありません。

ですが、そこからが一苦労となりました。この時期、日本にはまだ苛性ソーダは輸入されていません。試行錯誤の日々となったわけですが、ある日、奇跡が起こります。石鹸作りにばかり没頭する磯右衛門さんに辟易していた奥方様は、厄払いだったのか、怒りのあまりだったのか。石鹸を造っている釜に塩を投げ入れた由。

すると、あーら不思議、偶然、石鹸成分とグリセリン、そして水を分ける「塩析」が起きて、石鹸成分と石鹸ができたとか。事実は小説よりも奇なり、ですねえ。嘘のような本当の話です。

それでも完成度の高い石鹸を造るには、何年もの月日を必要としました。依然として我が国では、「さいかち」や「むくろじ」といった従来のやり方で洗濯をするしかなかったようです。この「さいかち」を泡立てて洗濯する場面なども、ＶＴＲで見ることができました。見るとわかりますが、けっこう泡立つものなんですね。

最近ではアトピー対策などにも使われているそうです。

ここまでも充分、面白い話だと思うのですが、途中に設けられていたジオラマを見て吃驚。なんと、文中に出て来た築地梁山泊の台所のジオラマがあるではありませんか!?

総坪数、二十五坪（屋敷の坪数ではありません。台所のみの坪数です。念のため）。安普請の我が家と、ほぼ同じ坪数だわと思い、心の中で苦笑いしたのは言うまでもありません。石鹸を造る行程はもちろんですが、このジオラマも実によくできていました。息吹が聞こえるかのような台所に感激した次第です。

さらにさらに驚いたのは、化粧室をお借りしたときのこと。洗面所にずらりと並んでいたのは、そう、花王さんの商品です。泡ソープがあるのは当然としても、うがい薬や紙コップ、ハンドクリームまで各化粧台に並んでいたのには吃驚しました。流石と思ったのは言うまでもありません。

花王さんは、カネボウ化粧品なども傘下に納めているうえ、紙製品の分野にも手を広げています。

伝統は革新の積み重ね。

なる言葉を思い浮かべました。百年どころではない、千年、続いてほしいという

願いをこめて、千年老舗を締めくくらせていただきます。案内していただいた副館長の津田さん、広報部の武田さん、平林さんには心からの感謝を申しあげます。お忙しい中、本当にありがとうございました。

最後になりましたが、昨年の七月。女優の浅野温子（あさのあつこ）さんと「ＨＥＲＳ」（二〇一一年九月号）という雑誌で対談いたしました。浅野さんが「御算用日記」のファンだというご縁で対談となった次第です。夢のような時間でした。以前、解説していただいた細谷正充（ほそやまさみつ）さんのときにも書いたと思いますが、見る人は見ていてくれるんだなと、しみじみ実感した次第です。嬉しかった。

その対談を今回は載せていただけることになりました。担当者の萩原さんや編集部、そして、「ＨＥＲＳ」の編集部にも御礼申しあげます。

さて、次なる小藩はどんな問題を抱えているでしょうか。幕末から明治に移る狭間の、廃藩置県が行われるまでの四年間を、数翁や角翁とともに歩んでいきたいと思います。

応援してください。

愛がいっぱい詰まった「御算用日記」シリーズ

女優・浅野温子×著者・六道慧 対談

この対談は、二〇一一年七月に行われ、「HERS」（二〇一一年九月号）に収録されたものです。

お料理の本を読んでいるような、暮らしの知恵が満載

六道　浅野さんが熱心に読んでくださっていると聞いて、正直びっくりしました。

浅野　もう、好きで好きで。新刊が出ると焦って本屋さんに駆け込むんですよ。

六道　ありがとうございます。

浅野　六道さんは何がきっかけで時代小説を書き始められたんですか？

六道　実は最初から、いずれは時代小説を書くことを目指していました。そして、ライトノベルズでいろいろやりながら壁にぶちあたった時に、時代官能小説からや

ってみようと……。今まで清純派女優だった人がいきなりポルノ女優になるような変化ですよ（笑）。それで自分の文体を作ること、資料を揃えることを覚えました。「そろそろいいかな？」というところにきたので「御算用日記」シリーズを書き始めました。

浅野　そうだったんですね。読ませていただいてすごく思うのが、主人公がごく平凡で普通の人だから、やることなすことすべてが自分の生活にリンクして分かりやすいんですよ。読んでいて「これ、いただき～！」みたいなね。まるでお料理の本を読んでいるような、暮らしの知恵が満載。

六道　おばあちゃんの知恵みたいな。

浅野　そう。自分の中で血肉となり体に直接響く感じがとっても好きなんです。

六道　ありがとうございます。

人間関係が転がって、読み始めたら止まらない！

浅野　男同士、女同士の友情はどの時代劇でも欠かさず書かれていると思うんですね。そこもきっちり含んでいますし、理想の上司もちゃんと出てくる。大人がきち

んと傍で見ていてくれる安心感って、人生でいちばん豊かなものでしょう。豊かなものがここにはたくさん詰まっている。それに人間関係がどんどん転がっていくあたりが、読み始めると止まらなくなっちゃうんですよね。

六道　転がっていく。まさにそれなんですよ。資料を読んで使えそうな箇所をパパッと書き留めていくんですが、ある程度外観ができた段階で「はいよっ」とキャラクターを放り込む。そうすると勝手に動き出して、私が思ってもみない言葉をしゃべる時があるんです。それが多くなるほど面白いものになる。

三十歳前後で、子供の頃の原風景に戻って

浅野　でも、どうして時代劇に興味をお持ちになったんです？　女の子は普通、最初からそっちにはいかないですよね。

六道　中学生の時に父が買ってきた「小説新潮」や「オール讀物」で柴田錬三郎さんや山田風太郎さんに親しんできたからでしょうか。兄がいたのでマンガだと「少年マガジン」「少年サンデー」それから「りぼん」「マーガレット」「少女フレンド」と、それを片っ端から読みました。中学卒業の頃になると少女マンガ全盛で、萩尾

望都さん、竹宮惠子さんといった錚々たるメンバーが出てきて、そっちが面白くなっちゃった。

浅野　歳が近いので通ってきたルートは一緒です！　私も少女マンガは夢中で読んでいました。それと中間小説が好きで読んでいましたが、二十歳過ぎると手に取らなくなっちゃった。なぜか読まなくなっちゃう。

六道　そうなんですよね（笑）。

浅野　それで三十五歳を過ぎたあたりから、再び山手樹一郎さんの時代小説を読み始めたんですよ。

六道　分かります。

浅野　全集を全部買って。それだけで胸がいっぱいになっちゃって。六道さんはいつからまたこの世界に戻りました？

六道　三十歳前後くらいでしょうか。やっぱり子供の頃の原風景に戻る感じがしますよね。兄が「SFマガジン」を買って読んでいたものですから、自然な流れでそこからSF小説を書き始めました。でも今も小説を書けていることが自分でも信じられないんです。小説の神様が見出してくれたのだからストイックに課してやらないと、いつまた書けなくなるか分からないという不安があって。

浅野　どういうストイックさですか？

六道　私の場合、体が虚弱体質で心臓が人よりも小さいので、無理が利かないんですね。連載をためて一冊にするよりも、書下ろしで一気に書いてリズム感と躍動感を伝えたいんです。そのために昔の小学生みたいに規則正しい生活をしています。

スピード感が洋ドラや少女マンガに似ている

浅野　女流作家と男性作家とでは、体の持っていき方が違いますよね。

六道　体力に差がありますから。佐伯泰英さんが猛スピードで書かれるでしょう？それを横目で見て焦らないなんて嘘です。浅野さんが時代小説を読み始めたきっかけは？

浅野　やはり、その佐伯さんの作品で時代文庫の大きな流れを摑ませていただいて、そこから立て続けに読んできました。でも一般的には〝時代小説＝小難しい〟というイメージがまだあるのかもしれませんね。

六道　そうですね。「歴史知識がないと読みにくそう」と。

浅野　でもこの「御算用日記」シリーズは、女性でも読みやすいと思います。スピ

ード感はいま流行りの洋ドラにも似ているし、主人公や取り巻きの感情の動きを軸に物語が進んでいくあたりは少女マンガとも似ているかもしれない。人物も可愛いし。

六道　でもなかなか広がらないんですよ。

浅野　おかしいですねぇ！　出版社の売り込み方が悪いんじゃないかしら（笑）。でも、まだまだ本屋さんに行くと時代小説のスペースが少ないですね。私がそっと目立つ場所に置くようにしてるんですけど（笑）。

六道　ふふふふ。ありがとうございます（笑）。不景気で部数を抑えられてくると、余計に手に取っていただく機会は少なくなります。しかもシリーズが出るほど、読者はどこから手をつけていいか分からなくなってくる。浅野さんはいい具合に波に乗られましたが。

浅野　辛気臭いものから入るよりは、六道さんを入門編とするといいと思います。お話も分かりやすいし。それと、やっぱり自分の欲しいものが手に入る。それは女の友情であったり、兄弟愛、日常からかけ離れていない知恵だったり。それが読んでいて分かりやすく手に入る。愛！　愛が詰まっている感じ！「御算用日記」シリーズでは、主人公を食い物にしているダメ姉妹がいるからこそ主人公が頑張れる。

六道　でも、その姉たちも少しずつ変化していくんです。そこが江戸の面白さ。田

舎では鼻つまみものが、江戸に出てくると女性でも結構役に立つじゃないか、と。

浅野　どうしようもない食い道楽の姉でさえも自分で職を見つけましたしね。だから今の四十代、五十代の女性が技を身につけるということだって、不可能ではないですよね。

六道　絶対に不可能ではないですね。

江戸の人情、賑(にぎ)やかさへの憧(あこが)れ

浅野　十年後の六十歳には、もしかしたらワンステップ上がっているかもしれない。周りに知恵を広めることもできるし。そのきっかけになればいいですよね。今はまた情報が溢(あふ)れすぎて、読書離れしつつあるから、「ここで一度、お手にとってご覧なせぇ」ってね。でも「御算用日記」シリーズは、絶対に男性作家が書いていると思い込んで読んでいました（笑）。

六道　ふふふふふ（笑）。

浅野　骨組みが男っぽいんですよ。

六道　性格でしょうね。男っぽいんです。作風には性格がでると思います。僭越(せんえつ)な

がら浅野さんと私は似ているかもしれません（笑）。

浅野　かもしれないですね。

六道　同じ時代小説でも池波正太郎さんの剣豪小説と人情小説、世話物は違いますよね。

浅野　六道さんは世話物ですよね。主人公を武士と市井の中間にいる人として描いているから親近感が湧くし、とっつきやすい。ところで、おきゃんな姉妹のモデルになったのは誰ですか？

六道　実はね、私、四人きょうだいの末っ子なんです。散々姉たちに苦労させられて（笑）。

浅野　ハハハハハ！　そうでしたか。

六道　私自身が主人公の数之進そのもの。姉に振り回されて、苦労性で貧乏性で。最後は泣くよりも笑うしかなくなるんですよ（笑）。

浅野　そんな背景があったとは。近ごろではドラマ『ＪＩＮ―仁―』のヒットで江戸時代を身近に感じた人も多いのではないかしら。

六道　今は時代がちょっと疲れているから、江戸の人情や音が聞こえてきそうな賑やかな情景への憧れがあるんでしょうね。

浅野　六道さんは下町育ちですか？

六道　はい。私の実家は両国の本所亀沢町です。下町のど真ん中なんですが、ダサい街でした、本当に。山の手の人たちに馬鹿にされていました。

浅野　確かにそうでしたね。

六道　もう完全に蔑視ですよね（笑）。私の小さい頃は、台風が来ると床上浸水しちゃった時代なんですよ。だから『ＡＬＷＡＹＳ三丁目の夕日』のような映画を見ると「嘘よ。これはうそうそ」とか思ったりするんですよ。

浅野　えー、そうですか（笑）。

六道　隅田川なんてヘドロまみれですごく臭かった。

江戸の人たちは、些細なことで喜びを見出していた

浅野　普通の人にとって六道さんの書かれる江戸や下町は〝一枚向こう側の世界〟なんです。理想郷になっている。「ＡＬＷＡＹＳ三丁目の夕日」をもっと人情豊かにしたのが、六道さんの世界のような気もします。

六道　江戸も実際はもっと厳しかった。梅毒も蔓延していて平均寿命も短かった。

だから私は本当に理想郷を書いているんだと思います。裏はそんなに美しいものではなかった。もっとドロドロしてたのでしょう。

浅野　なるほどね。

六道　夫が遊びに出ることで奥さんは伝染される。それで早死にしちゃうんです。

浅野　もうそこまで悲しい人生だったら最後は笑うしかない。

六道　そうなんです。江戸の人たちは結構開き直って暮らしていたんですよ。真面目に働いていたのはほんのわずかな商人くらい。大半の町人は遊び暮らしていたのが江戸の実態らしいんですよ。

浅野　ちょっと働いて、あとは〝食う〟〝寝る〟〝やる〟しかない。江戸の人たちは、ほんの些細なことで喜びを見出していた。小さな喜びを大きくするのって、今の私たちが忘れていること。まぁ、だからって時代小説を読んだくらいで、そこまで現代人が変われる訳じゃあございませんよ（笑）。けれども、やっぱり温かいものに触れると「いいな」って思う。肉親とは別に人を受け入れたり、鰻屋の店主が登場したり、近所の夫婦が出てきたり。現代の人生の中で「よろしく！　頑張るから」ということが自分でできていないから、余計に身近な人との繋がりに憧れます。

六道　ありがとうございます。そうそう、今日は浅野さんに八月に刊行する新作本

の、本を刷る前のゲラ原稿を持ってきました。（※編集注）

浅野　えっ、貰っちゃっていいんですか？　嬉しい！　ホントにいいんですか？　装丁はまた村上豊先生ですか？

六道　今はまだ秘密です（笑）。

浅野　だぁ〜れ〜だ〜？（笑）でもでも！「御算用日記」シリーズはまだ続けてくださいね。ゾンビになっても書き続けてくださいね！　新しいのは、あと50、60巻くらいシリーズを続けた後にしましょう。書いていただいてもいいですけど、それはまだ本にはしないで、私がお預かりしますから（笑）。

（※編集注）『奥方様は仕事人』として二〇一一年八月に光文社文庫として刊行。

取材／大谷繭子

あさのあつこ　東京都出身。高校生の時にスカウトされ、芸能界へ。二〇〇三年より、古事記を題材とした一人語りの舞台「よみ語り」を全国の神社などで開催している。

〈参考文献〉

『論語と算盤』渋沢栄一　角川ソフィア文庫
『幕末入門』中村彰彦　中公文庫
『百年続く企業の条件　老舗は変化を恐れない』帝国データバンク史料館・産業調査部編　朝日新書
『幕臣たちと技術立国』佐々木譲　集英社新書
『幕臣たちの明治維新』安藤優一郎　講談社現代新書
『千年、働いてきました』野村進　角川ｏｎｅテーマ21
『今ものこる江戸の老舗』吉村武夫　河出文庫
『将軍家御典医の娘が語る江戸の面影』安藤優一郎　平凡社新書
『江戸っ子の意地』安藤優一郎　集英社新書
『幕末下級武士のリストラ戦記』安藤優一郎　文春新書
『幕末史』半藤一利　新潮社
『幕末明治傑物伝』紀田順一郎　平凡社
『幕末明治　女百話（上下巻）』篠田鉱造　岩波文庫

『幕末の世直し　万人の戦争状態』須田努　吉川弘文館
『「明治」という国家』（上・下巻）司馬遼太郎　ＮＨＫブックス
『石けんの本』㈱グレイル編著　ナツメ社
『江戸時代　人づくり風土記（26）京都』農文協
『江戸時代　人づくり風土記（41）佐賀』農文協
『江戸時代　人づくり風土記（46）鹿児島』農文協
『図解幕末・維新』成美堂出版
「江戸幕末発見伝！」江東区深川江戸資料館



光文社文庫

文庫書下ろし／長編時代小説
天下を善くす　御算用始末日記
著者　六道慧

2012年3月20日　初版1刷発行

発行者　駒井稔
印刷　萩原印刷
製本　榎本製本

発行所　株式会社 光文社
〒112-8011　東京都文京区音羽1-16-6
電話（03）5395-8149　編集部
8113　書籍販売部
8125　業務部

© Kei Rikudō 2012
落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。
ISBN978-4-334-76377-0　Printed in Japan

R本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

組版　萩原印刷

お願い　光文社文庫をお読みになって、いかがでございましたか。「読後の感想」を編集部あてに、ぜひお送りください。

このほか光文社文庫では、どんな本をお読みになりましたか。これから、どういう本をご希望ですか。

どの本も、誤植がないようつとめていますが、もしお気づきの点がございましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえいただければ幸いです。当社の規定により本来の目的以外に使用せず、大切に扱わせていただきます。

光文社文庫編集部

本書の電子化は私的使用に限り、著作権法上認められています。ただし代行業者等の第三者による電子データ化及び電子書籍化は、いかなる場合も認められておりません。

仮宅　佐伯泰英
沽券　佐伯泰英
異館　佐伯泰英
再建　佐伯泰英
布石　佐伯泰英
決着　佐伯泰英
愛憎　佐伯泰英
薬師小路別れの抜き胴　坂岡真
秘剣横雲　雪ぐれの渡し　坂岡真
縄手高輪　瞬殺剣岩斬り　坂岡真
無声剣　どくだみ孫兵衛　坂岡真
木枯し紋次郎（全十五巻）　笹沢左保
夕鶴恋歌　澤田ふじ子
修羅の器　澤田ふじ子
大盗の夜　澤田ふじ子
鴉婆　澤田ふじ子
千姫絵姿　澤田ふじ子

真贋控帳　澤田ふじ子
霧の罠　澤田ふじ子
地獄の始末　澤田ふじ子
狐官女　澤田ふじ子
将監さまの橋　澤田ふじ子
黒髪の月　澤田ふじ子
逆髪　澤田ふじ子
雪山冥府図　澤田ふじ子
火宅の坂　澤田ふじ子
花籠の櫛　澤田ふじ子
城をとる話　司馬遼太郎
侍はこわい　司馬遼太郎
白狐の呪い　庄司圭太
まぼろし鏡　庄司圭太
捨て首　庄司圭太
闇に棲む鬼　庄司圭太
鬼面　庄司圭太

死相　庄司圭太
深川色暦　庄司圭太
鬼蜘蛛　庄司圭太
赤鯰　庄司圭太
陰富　庄司圭太
夫婦刺客　白石一郎
つばめや仙次　ふしぎ瓦版　高橋由太
群雲、関ヶ原へ（上・下）　岳宏一郎
群雲、賤ヶ岳へ　岳宏一郎
天正十年夏ノ記　岳宏一郎
寺侍市之丞　千野隆司
読売屋天一郎　辻堂魁
ちみどろ砂絵　くらやみ砂絵　都筑道夫
からくり砂絵　あやかし砂絵　都筑道夫
きまぐれ砂絵　かげろう砂絵　都筑道夫
まぼろし砂絵　おもしろ砂絵　都筑道夫
ときめき砂絵　いなずま砂絵　都筑道夫
さかしま砂絵　うそつき砂絵　都筑道夫
焼刃のにおい　津本陽
死笛　鳥羽亮
秘剣水車　鳥羽亮
妖剣鳥尾　鳥羽亮
亥ノ子の誘拐　中津文彦
枕絵の陥し穴　中津文彦
つるべ心中の怪　中津文彦
彦六捕物帖　外道編　鳴海丈
彦六捕物帖　凶賊編　鳴海丈
ものぐさ右近風来剣　鳴海丈
ものぐさ右近酔夢剣　鳴海丈
さすらい右近無頼剣　鳴海丈
ものぐさ右近多情剣　鳴海丈
炎四郎外道剣　血涙篇　鳴海丈
右近百八人斬り　鳴海丈
ご存じ遠山桜　鳴海丈

ご存じ大岡越前　鳴海丈
唐人笛　西村望
辻の宿　西村望
こころげそう　畠中恵
井伊直政　羽生道英
大老井伊直弼　羽生道英
薩摩スチューデント、西へ　林望
不義士の宴　早見俊
お蔭の宴　早見俊
抜け荷の宴　早見俊
孤高の若君　早見俊
まやかし舞台　早見俊
獄門首　半村良
大江戸の歳月　平岩弓枝監修
武士道歳時記　平岩弓枝監修
花と剣と侍　平岩弓枝監修
武士道切絵図　平岩弓枝監修

武士道残月抄　平岩弓枝監修
坊主金　藤井邦夫
鬼夜叉　藤井邦夫
見殺し　藤井邦夫
見聞組　藤井邦夫
始末屋　藤井邦夫
白い霧　藤原緋沙子
桜雨　藤原緋沙子
密命　藤原緋沙子
辻風の剣　牧秀彦
悪滅の剣　牧秀彦
深雪の剣　牧秀彦
碧燕の剣　牧秀彦
哀斬の剣　牧秀彦
雷迅剣の旋風　牧秀彦
電光剣の疾風　牧秀彦
天空剣の蒼風　牧秀彦

波浪剣の潮風　牧秀彦
火焔剣の突風　牧秀彦
若木の青嵐　牧秀彦
宵闇の破嵐　牧秀彦
朱夏の涼嵐　牧秀彦
柳生一族　松本清張
逃亡（新装版）（上・下）　松本清張
秋月の牙（新装版）　峰隆一郎
三国志外伝　三好徹
三国志傑物伝　三好徹
史伝新選組　三好徹
侍たちの異郷の夢　三好徹
仇花　諸田玲子
だいこん　山本一力
人形佐七捕物帳（新装版）　横溝正史
修羅裁き　吉田雄亮
龍神裁き　吉田雄亮

鬼道裁き　吉田雄亮
闇魔裁き　吉田雄亮
観音裁き　吉田雄亮
火怨裁き　吉田雄亮
転生裁き　吉田雄亮
陽炎裁き　吉田雄亮
夢幻裁き　吉田雄亮
鬼神舞い　吉田雄亮
いざよい変化　六道慧
青嵐吹く　六道慧
天地に愧じず　六道慧
まことの花　六道慧
流星のごとく　六道慧
春風を斬る　六道慧
月を流さず　六道慧
一鳳を得る　六道慧
径に由らず　六道慧

星　星の火　六道　慧
護　国の剣　六道　慧
駑　馬十　駕　六道　慧
甚　を去る　六道　慧
石　に匪ず　六道　慧
奥方様は仕事人　六道　慧
寒　鴉　六道　慧
駆込寺蔭始末（新装版）　隆　慶一郎
くノ一忍び化粧　和久田正明
外様喰い　和久田正明

お助け侍・数之進の千両智恵が冴え渡る！

六道慧

時代人情小説に新風を吹き込む
大好評「御算用日記」シリーズ

文庫書下ろし

青嵐吹く
天地に愧じず
まことの花
流星のごとく
春風を斬る

月を流さず
一鳳を得る
径に由らず
星星の火
護国の剣

駑馬十駕
甚を去る
石に匪ず

ISBN978-4-334-76377-0

C0193 ¥667E

9784334763770

1920193006674

定価（本体667円＋税）

天下を善くす 御算用始末日記　六道慧

尊皇攘夷の風が吹く幕末。武士たちは生活の拠り所を失いつつあった。かつて、幕府御算用者として諸藩を救った生田数之進と盟友の早乙女一角。二人は、十三代将軍家定御台所の天璋院篤姫から葵の御紋が記された手札を託された。徳川の時代が終わろうとする混迷の江戸で、再び彼らが「千両智恵」を駆使し、武士に生き方を指南する。「御算用日記」シリーズ新展開。